
正しい勇者の育て方

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい勇者の育て方

【Zコード】

Z0754M

【作者名】

Rail

【あらすじ】

長閑な田舎を支配する魔王として就任して早二年。弱小魔王の“私”のところに勇者サマがやってきた。なんでも私を退治しに来たのだとか。面倒なので適当に追い返したのにまた来るし、しかも勇者サマの教育係って何事！？

がきんちょ勇者サマとともにぐさで大人げない魔王の交流する多分ほのぼのギャグストーリー。

第1戦 ガキンチヨ 勇者サマ襲来

我が家にノックダッシュを繰り返していた子供をよつやく捕まえた。十度目の正直だ。

私は子供の襟首をつかむと、思い切り拳骨を食らわせた。

「こら坊や！ 人の家にイタズラしちゃダメでしょ！」

私が叱ると、子供は涙目で私を睨みつけてきた。

「つるさい魔王め！ 僕が退治してやるんだからな！」

人々から魔王と呼ばれて早三年。

それが私と『勇者サマ』との初めての出会いだった。

＊＊＊

さて、単なる有翼族と人間のハーフである私がなぜ人々から魔王と呼ばれることになったのか。これにはちょっとばかり込み入った訳がある。

といつても、八割方の理由は私の名前にある。

私の父は有翼族だつた。女つたらしで有名なあの有翼族である。常に女は取つ替え引つ替え、同じ相手と一ヶ月続いたら槍が降るに違いないと言われるあの有翼族だ。

「」多分に洩れず、私の父も女つたらしだつた。私の母と燃えるような恋に落ちた父はあつという間に冷めて、母から離れていつしまつた。冷たいとは思わない。しかし我が母ながら、どうせ恋するなら一生添え遂げてくれるという人狼族にしとけばよかつたのにと

思わずにはいられない。

それはさておき、その短い期間に母は私を身につけたというわけだ。

私の母は変わった人で、自称地球人で日本人で元大学生という人だった。ある日いきなりこの世界に飛ばされたのだという。母の話を聞く限り、母は『さまよう扉』をくぐってしまったようである。さまよう扉といえば、旅人の間では使われる『世界の扉』の亞種で、ごくまれに姿を現すというあれである。飛ばされる先がわからないというスリリングなものだから、醉狂な人以外は見かけてもまず使わないともっぱらの評判だ。母は知らずにそれをくぐり、数多ある星の中のシークに飛ばされたというわけ。母のいた地球という星には『世界の扉』が存在していなかつたらしく、帰る手段もなかつたんだそうだ。

まあそういうわけで寄る辺もなかつた母だが、意外や意外、たくましかつた。父がいなくなつた後も女手一つで私を育てた。シークで生まれた私だが、名前は日本人と同じである。名字は母と同じ空野。名前は真央。女の子が産まれたら真央という名前にしようと心に決めていたそうだ。

勘の良い方はお気づきだろう。この珍しい響きの名前は見事に勘違いを呼び、私は今やこのテスハという星において、「空の魔王」という通称で呼ばれている。

なんだかんだで私も母を亡くして生まれ故郷の星を離れてしまいこの惑星テスハに流れ着いたわけだが、魔王というのも意外と悪くない。私が支配している村の人たちとの関係も良好だし、衣食住は

保証されている。唯一心配されるのは魔王を倒す資格がある『勇者』だったが、幸いにしてこの三年、特にそういう人間が来たことはない。このノックダッシュ勇者サマが最初である。

「はいはい、それで？ なんで私を退治するのにノックダッシュなんとしてたのクソガキ」

勇者サマを正座させて問いただすと、彼は再びこちらをにらみつけてきた。

「うつせーババア！」

私は勇者サマを殴った。これは純然たる教育的指導である。

「お姉さんと呼びなさい。私はまだぎりぎり十代なんだから」「うつせーババア」

再び教育的指導。勇者サマはもうポロポロと涙をこぼしている。良心が痛まないかって？ だって私魔王だし。

「お姉さんが無理なら魔王様と呼びなさい」

あ、なんか私つてば昔母さんが言つてた女王様みたい。

「うつせー……魔王」

「よろしい」

なかなか素直だ。子供は素直が一番。

「で？ 君はどこの子？ 見たことない顔だけど」

自慢じゃないが、村の子供たちなら顔を見ればどこの子か分かる。

私の問いに少年は黙りこくつてしまつた。

ため息をつきつとも私は少年を観察した。

年の頃なら十代半ば……より幼いか。十一、三歳？ いや、もしかしたら十歳ぐらいかもしれない。防具は布の服に皮の靴、といえば聞こえがいいが、要するに普通の格好である。山に入る際には大人も子供も大抵こういう格好だ。そして右手に木の枝、左手に鍋のふた、腰には何やら入つていそうな皮袋を下げていて、首から下げているのは手作りのお守りのようだ。とりあえず思う。装備簡単過ぎるだろ。冒険ごっこか？ 肉体派にも到底見えないし、これじゃあ弱いモンスターにだつて負ける。

「とにかく、もう暗くなつてきるし送るよ。村の入り口でも大丈夫だよね」

さすがに暗い山道を子供に歩かせる訳にはいかない。仮にもこの村を支配している魔王としては将来の貴重な労働力が減つてしまつことは避けたい。

私が立ち上がると、勇者サマはびっくりと肩をふるわせた。私は肩をすくめた。

「次に来るときはもう少ししゃべりとした装備で来ることだね。せめてひのきの棒と皮の盾くらいは」

武器が木の枝つてこいつのは無理だらう。高度な魔法使いならともかく。

「……だもん」

少年が小さく呟く。

「これは聖剣だもん」

「よーし、村に行くよ」

ガキの戯れ言に付き合つていられない。普段なら用いない転移魔法で村まで一気にジャンプだ。

村に着くと、ちょうど大人たちがうろついていたので声をかける。

「ヤルン、この子どこの子か知らない？」

「ああ、魔王さん」

振り返つたヤルンは私の連れた少年を見てはつとした。

「みんな、オキがいたぞあ」

彼が言えば、ぞろぞろと村の人々が集まる。

「いやあ、ちょうどよかったです。今からみんなで魔王さんとこ行

く準備してたんですよ

「何、魔王狩り？」

私が冗談で言つと、ヤルンはいやいやと首を振つた。

「その子、オキがね、魔王さんを退治するつて言つて山に入つたつて子供たちが言つててね。時間的にも危ないでしきう」

まあだからこそ私が送つてきたわけだが。大人たちが迎えに来るんならほつとけば良かつた。魔力を無駄にしたな。それにしてもオキという名前は初めて聞いた。

私はオキを大人たちに引き渡した。様子を見るに、この後お説教大会が始まるのだろう。

オキが連れて行かれるのをぼんやりと見送つていると、突然彼が振り返つた。

「次は絶対やつづけてやるからな！」

見事なまでの反骨精神だ。とても魔王当人に村まで送られた人間の言うこととは思えない。

「手土産持つてこないと追い返すから」

大人たちに叱られているオキに手をふつてやると、彼はまだ何かわめいているようだつたが、そのまま大人に連れて行かれた。後に残つたのは私とヤルンだ。

「見ない子だけど、この村の子？」

「いや、隣村です」

ああなるほど。

「あつちに挑戦してたら確実にあの世行きだよね」

隣村の魔王といえば、大蛇魔王ミーミーヤンジャだ。あんな巨大蛇に木の枝だけで挑めば一飲みにされてしまうだろう。自分の村を支配している魔王ではなく、あえてこの一帯では一番弱い私に挑んできたあたり、ある程度の分別はあるようだ。

しかしああいつた向こう見ずな子供にはもう少しきつくお灸を据えても良かつたかもしれない。あの分じゃあと何度も挑んできても

おかしくない。面倒くさいことになりそうだ。

「今日は無事だつたけど、次回もそうとは限らないんだからしつかり釘差しといでね」

私が言うと、ヤルンは苦笑した。

「ええ、重々承知します。とはいっても、あの年頃の子供は大人の言うことを聞きましたから」

その言葉に私も苦笑する。私もあれくらいの年齢の時は母親とかなり喧嘩した。家を閉め出されたことも数えられないくらいあった。一晩木に吊された時は本気で泣きわめいたものだ。

「そういうば魔王さん、うちの女房が作ったパンのまだ温かいのがありますよ。持つて帰りますか」

「うん、もらつてく」

とにかく、問題に発展する前に解決して何よりだ。

魔王の私が言うのもなんだが、平和が一番である。

第1戦 ガキンチョ 勇者サマ襲来（後書き）

PCのサイトからの転載です。

第2戦 今日もツキバ村は平和です

唐突だが、私の支配する村について説明しよう。

私が支配するツキバ村は、山に囲まれた緑豊かな村だ。有体に言うと田舎。気候は穏やか、人々も穏やか。というか大人しい。大体の村人は農耕と牧畜の両方で生計を立てている。テスハという星全体から見れば貧しい村かもしれないが、生活していく上ではそれほど苦しくもない。何より人の表情が明るいのがいい。

百ほどの家族が暮らす小さな村だ。村の人は互いに顔見知りで、一つの家族のような村である。

私との関係は至って良好。定期的に食物を献上してくれるし敬つてくれる。同年代では仲のいい友達も何人かいるし。

総合的に見て、大した力もない新人魔王が担当するには勿体ないくらいの好条件だ。もちろん、手放す気はない。石にかじりついてでも支配し続けてやる。規模が大きい街なんかだと、時々支配下の人間が反乱を起こすらしい。こつちは大したこともしてないのにい迷惑だと知人の魔王がこぼしていたのを聞いたことがある。もしうちでもそういうことがあつたら村長を人質にしてどうにかして逃げようと思う。いや、あのハゲは意外と人望が薄いから村長の奥さんの方が良いかもしれない。彼女は人格者だしグラマラスな美女だ。なんであのハゲと結婚したのかツキバ村で一番の謎だ。

まあとかく平和でいい村だが、昔つからそうだったかといえばそういうわけではない。

私がこの村を支配する魔王になつた当初、この村はいわゆるハズレの地域だった。山の高台から荒廃した村を見下ろした時の、あのぞつとした感覚は忘れない。

何しろ森も山も荒れ放題、家屋は壊れていない方がまれ、村人は

私と田が合あうものなら全力で逃げ出した。

唯一違っていたのはハゲこと村長だけだった。

「トウイ様、その方が……？」

すがるようすに言つハゲは、私の後見人である先輩魔王トウイに全幅の信頼を寄せていいようだつた。なぜトウイのような面倒くさがりで調子だけはいい無精ひげを生やしたおっさんを信用するのか、私にはいまいち理解できない。

「ああ、こいつは空の魔王つつてな。弱いしヘタレだがお前らにはピッタリだ」

おっさん喧嘩売つてんのかと怒鳴らなかつた私は賢明だつたんだろう。あそこで破談になつてたら今の安樂な生活はなかつた。

ツキバ村は疲弊していた。私の前にここを支配していた魔王のせいだ。

トウイは簡単に説明してくれた。

曰く、「前の魔王が不治の病にかかつてヤケになつて暴れた」らしい。しかもヤケを起こしてから三年以上生きていたという。さらにおっさんなら不治の病つて要するに水虫だつたらしいんだけどなんでそれでヤケ起こすのか。つていうかなんで水虫で死ぬの先代魔王。傍迷惑すぎるだろう。

まあそんなこんなで壊滅的状況に陥つたツキバ村は平和を願つた。そして求人票ならぬ求魔王票を魔王連盟に提出したのだが、一向にこれといった魔王が現れない。地理的に規模の大きい村や町に囲まれていたのも一因だつたろう。周辺の魔王が強いと力のない魔王は肩身が狭い。わざわざ荒れた小さな村に行つてそんな気鬱な近所づきあいをしてやろうという魔王が現れず、魔王不在の期間が長く続いた。

一般に、勇者たちは魔王を倒して平和をもたらす英雄と考えられているが、魔王がいなければ平和、というのは間違いである。

魔王というのは確かに邪悪な存在ではあるが、それと同時に邪悪な存在を取り締まる役割もしている。要するにヤクザの元締め。魔王がいなければ野良モンスターが好き勝手に跋扈する。それを魔王サイドなりにまとめるのが魔王の仕事でもある。そこにいる村人たちが自力でモンスターを倒せる実力があるならともかく、ごく普通の村人たちなら魔王にモンスターを統括してもらった方が遙かに楽なのだ。

さて、魔王がいなくなつてひとまず危機は脱したものの、モンスターのせいでじわじわと衰退していく村に危機感を抱いていた村長は、知人のツテを頼ることにした。それがトウイであり、それに連れられて来たのが私だつたわけだ。

今にして思えば、私が魔王になつてしまつたのもトウイの策略だつたんだろう。奴がいなければ私は魔王試験に合格することはなかつたはずだ。私の魔王試験についてはいずれ話そうと思つ。

まあそういうわけでトウイ曰く弱くてヘタレな私はツキバ村の魔王に就任した。

村長の奥さんであるリ「が定期的に私に食物を持つてきたが、それだけだつた。挨拶と事務的な会話しかしなかつた。先代の魔王のこともあつてか、隠してはいるが私に対しても怯えているのは明らかだつた。それでも来ていたのは村長の妻という立場があるからだ。立派な女性だと思う。

村が貧しいこともあり、運ばれてくる食料もお世辞にも豪華とは言えないもので、用意された生活用品も粗末なものだつた。といつても、村が荒れ果てているのも承知していたので私は何も言わなかつた。

そこで一念発起してツキバ村の復興に手を貸せばまあ美談なんだろうが、残念ながら私はそんな献身的な性格ではない。とりあえず自分の身をすることを最優先にした。

まずご近所の魔王に挨拶。これは重要なだ。新参者が挨拶もなしだなんて生意氣だ！と反感を持たれてはかなわない。魔王連盟の取り決めで他の魔王の領地を侵略してはいけないというのがあるが、嫌がらせならば黙認されている。その上近隣の魔王たちは力のあるタイプが多い。敵に回したら私が地獄を見るに違いない。私は断つて最弱である。そういうわけで私は綿密なリサーチを重ねてから近隣の魔王の好物を引っ提げ挨拶回りをした。牛丸ごと一匹はともかく、新巻鮭は非常に入手が困難だつたが、そこは気合である。トウイに頼んだ。これは丸投げではない。戦略だ。

そんなこんな挨拶回りは好感度で終わつた。事前にリサーチしたのが良かつたに違いない。例えばもしリサーチを怠つて空腹のミニーヤンジャのところに行つたものなら、私は確実に奴に食われていた。下調べって大事だ。

次に魔王試験に合格すると覚える特技とでもいうもので、村中のモンスターを配下に下した。強い勇者が来た時モンスターを盾にするためだ。私の号令一つで俊敏な動きをするように駆けた。お手やおわり、取つてこいなんて序の口である。チームプレイ、暗号、結界、料理洗濯などの家事、マッサージ、なんでもできるようになつた。特に私の安全を確保する行動と私の日々の世話を重点的に覚えさせた。後に様子を見に来たトウイに「じつは本当にモンスターか？」と言わしめた程である。

そして仕上げに自分の住居である山を要塞化した。勇者に攻め入られないようである。魔王用の住居は先代のをそのまま引き継いでいるのだが、まあこれが荒れていた。住居の修理は当然モンスターにさせたのだが、ひどいのは住居の周りである。山の頂上に建設されているのだが、その山がすっかりハゲ山になつてゐるのだ。当然だ、先代魔王が暴れたのだから。しかし木のない山の天辺にある住居など、格好の的である。大砲や遠距離魔法で集中砲火を浴びたらおしまいだ。

これは植樹するしかない。

思い立つたが吉日、私はハゲ山緑地計画に着手した。

私は植物系モンスターに召集を掛けると、「あんたたち木になれ」と命令した。わざわざ苗木から育てるなんて面倒くさいことはしたくない。手つ取り早く巨木サイズのモンスターを植物にしたら楽だし早いと思ったのだ。しかし当人たちから無理と言われた。一度モンスターになると植物には戻れないらしい。「あんたたち私の安全が脅かされてもいいのか！」とうつかり癪癩を起したのだが、奴らはオロオロするだけだった。使えない。

しかし三人寄らば文殊の知恵というのは本当だつたらしい。奴らはしばらくこそそそと話し合つた後、私に進言して来た。新しくモンスターを作りだしたらどうか？　と。

どうやらモンスターを虐め倒して……じゃなかつた、躰をしている間にレベルが上がつていたらしく、モンスター合成の技が使えるようになつていた。

と、いうわけで、私はモンスターを造つた。その名もセイチヨウタスケルモンスター、略してセーター。ネーミングセンスがないのは百も承知だ。このモンスターはその名の通り、植物の成長を助ける能力がある。ついでに言うと植物の世話もやつてくれる。なぜならば自分でするのが面倒くさいから。こういつのを下僕にやらせるのも魔王の醍醐味だ。私はそのモンスターに頼んでハゲ山に植物を植えさせた。ほとんど果樹である。無論私が食べるためだ。下生えをすべてベリー系にしたかったのだが、足元がトゲトゲするので勘弁して下さいとセーターから言われて諦めた。根性がない奴だ。親の顔が見てみたい。しかし採れたての果物が食べたい私としてもトゲトゲの山を歩きたくはない。といつても野望を諦めたわけではないので、現在でもセーターに棘のない木イチゴを作らせている。しかし品種改良の道はまだまだ遠いとのことだ。

そういうわけで、あつという間に三か月が経過した。ハゲ山は多少貧相ではあるが、緑あふれる山となつた。三か月では驚異の成長

つぶりだ。流石は私が作ったセーター。そのころにはセーターは仲間を増やしてセーター三十号までいた。そして奴らは妙にやる気のみなぎつており、うちの周りだけでなく村全体の山の世話をしだした。生みの親と違つてマメな奴らだ。なんにせよ、自然が豊かになつたのは気分が良かつた。

そして三ヵ月目となつて、小さな変化があつた。

リコの態度が柔らかくなつてきたのだ。食物を持ってくる際視線を合わせてくれるようになつたり、挨拶をしてくれるようになつたり、村の近況を知らせてくれるようになつたりもした。

どういう風の吹きまわしかと最初は首をひねつたものだったが、友好的なら構わないかと思つて気にしていなかつた。

そして一つの転機ともいえるべき出来事が、魔王に就任して五ヶ月目に起こつた。

数日、雨が降り続いていた。私は雨の日は外に出かけられないのでもつぱらモンスターに新しい芸を教え込むことにしている。趣味と実益を兼ねた素晴らしい時間の潰し方だと思う。モンスターたちは嫌がるが。

狸に似たモンスターに額に葉っぱを載せて化けるという様式美を教えていた時だつた。私がウルフと呼んでいる狼型モンスターが勢いよく室内に入つてきた。様子が尋常ではない。

奴はひどく焦つたように報告した。なんでも、私の居城の北部にある山が土砂崩れを起こしそうなのだという。

しかし私は単なる弱小魔王である。土砂崩れを食い止める力など持つていない。しかも奴の言うあたりならば、私に被害はない。

「あつそう、じゃあみんなその辺には近付かないようにな」

私がそう言うと、ウルフは短く唸つた。しばらく考え込んでいたようだが、やがて重々しく奴は言った。あそこが崩れたなら、新しく作つた私のブドウ園は壊滅だううと。

私はモンスターの召集をかけた。

十分としないうちに私たちは現場にいた。幸い崩壊には至つていなかつたが、パラパラと小石が降つて来ている辺り、秒読みのだろう。少し崩れるくらいかと甘く見ていたが、詳しい報告を聞いてみれば山津波レベルになるだらうということだつた。

そこからの私は頑張つた。獅子奮迅の働きだつたのではないだろうか。

まず植物系モンスターに命令して、土石流が押し寄せてくるであろう場所に根を下ろさせた。土石流を死ぬ氣で止めろというわけだ。一部の植物系モンスターには山の上に行かせ、セーターと協力して根を張つもらつた。当社比五倍の成長速度になるはずだ。上から根っこを張つていくことで少しでも崩れる土砂を減らしたかつた。時間は限られていたが、やらないよりましだ。風を操るモンスターを複数使い、山に降る雨を四方に散らした。気持ち程度ではあるが、きっと効果があると信じたい。

力持ちのモンスターを使って、植物系モンスターの背後に土石流を止める堰を造つた。即席なのでお粗末極まりないが。植物系のモンスターは自分たちの前に作つてくれと不満を言つていたが、あんたらが一番頼りになる堰だと言つたら何故か機嫌を直した。

そうして小一時間、不気味な地鳴りがした。私は鳥型モンスターに乗つて上空へと避難した。飛べないモンスターたちも散り散りに逃げだしていた。

薄暗い中でも、山が崩れるのが見えた。上空から見たそれはひどく現実離れした光景だつた。緑色の地面がずるずると移動し、茶色い地面が増えていく。緑色だつたそれはやがて茶色に変わり、猛ス

ピードで斜面を下つていいく。それまで地面にどつしりと生えていた植物も、圧倒的な質量をもつたそれに抗えずなぎ倒され、飲みこまれていく。

これはもしかしたら下にいるモンスターは全滅するかもしない、と怖くなつた。

と、同じく空を飛んでいたモンスターが地面に向かつて何体も下降するのが見えた。その背には別のモンスターが乗つている。

何か遠吠えが聞こえる。それと同時に地面から土の槍が突き出した。何体ものモンスターによつて発動した呪文は、見事なチームワークでもつて土石流の勢いの緩和に成功した。一斉に火の玉をぶつけているチームもある。モンスターたちは幾度となく土石流を追いかけてはその先に障害物を生み出し、少しづつその勢いを緩めていた。しかし止めるには至らなかつた。

そして最後の砦、植物系モンスターたちの壁に土石流がぶつかつていつた。メリメリという音が轟音の中からでも聞こえてきた。私は息を飲んだ。

結果だけ言つならば、土石流を完全に食い止めるることは出来なかつた。ブドウ園のほとんどが土砂に埋まつた。植物系モンスターたちは瀕死なのもいたが、一体たりとも死なずに済んだのは不幸中の幸いだろう。事前に防御力を上げておいたのがよかつたらしい。セーターたちは力の使い過ぎでみんなバタバタ倒れた。

私は疲れて自宅のベッドで寝ていたのだが、ウルフに顔を舐められて目が覚めた。

「私の眠りを妨げるのは……」

我ながら実に魔王っぽい台詞だと思つ。

起こされた腹いせにウルフの耳をいじりまくつてやうりうと身を起した私は外が騒がしいことに気がついた。

着替えて表に出ると、なぜか村人たちがたくさん来ていた。私が驚いていると、村長が近付いてきた。

「魔王様、村を救つてくださつてありがとうございます！」

それを皮切りに村人たちも口々に謝辞を口にする。

何のことかさっぱり分からず、目が点になった。

聞けば、あのブドウ園よりさらに下つたところには村人の家が固まつていたのだという。もし私が土石流を食い止める努力をしなければ、土砂は多くの村人の命を奪つていただろう。

私は隣りで手柄顔をしているウルフの頭を一つ叩くと、何食わぬ顔で謙遜をしておいた。

それ以降、私に対する村人たちの態度はがらりと変わつた。それまでの怯えた態度はなくなり、代わりに尊敬のまなざしを向けてくるようになつたのだつた。

それにしても思つてもみなかつた。私が近隣の魔王と友好的になつたことでそれまで一線を引かれていた他の村の態度が軟化していたり、モンスターが私の隕けの成果を村で発揮してしたり、ハゲ山や他の山々を手入れしたことでそれまで頻発していた土砂崩れがなくなつてしまつたことになつてゐるなんて。

すべては私の私による私のための行動だつたのだが、村の人はそうは思わなかつたらしい。そして極めつけの山津波だ。なんと私がモンスターを総動員して村に被害が行かないように駆けずり回つたということになつてゐた。なんでもお節介なモンスターが村人に避難勧告まで出していたんだそうだ。

私も人並みの良心はあるので、それ以降積極的に村の手伝いにモンスターを貸し出したりするようになつた。

まあわざわざ貸し出さなくとも、私のしごきを嫌がつたモンスターが自主的に村の手伝いに行つていたんだけれども。

そういうわけでも、別にしたくてしているわけではないがこの村の環境維持は魔王の管轄となっている。もちろん私は魔王なので配下に丸投げしている。

そんなこんなで私の配下のモンスターが村中を闊歩しているわけだが、

「……元の場所に捨ててきなさい」

私はセーター五十一号に向かつて言つた。しかし五十一号はぶんぶんと首を振つた。可哀想なことを言わないでくださいと言つ。モンスターの癖に情に厚い奴だ。

関係ないが、人語をしゃべれるモンスターは少ない。大抵のモンスターは人間の言語を理解できるが、モンスターの言語が普通の人間に通じることは滅多にない。モンスターの言語を細部まで理解できるのは魔王と魔物使い、それからレベルの高い勇者ぐらいのものだろう。ちなみにセーターは人語をしゃべれない。

私は五十一号と、五十一号が連れてきた人物を見てため息をついた。

「うちには迷子センターじゃないんだから、村に連れて行きなさい」
しかし五十一号は首を振る。私のところに連れて行けど駄々をこねられたらしい。

五十一号と仲良く手をつないだ少年を見て、私は再びため息をついた。

「勇者サマ、うちの部下に道案内させないでくれない?」

私が言つと、オキという名の少年勇者サマはギッと睨みつけてきた。

「つるさい、魔王の癖に!」

「勇者の癖にうちの山で迷子にならないでよ」

私が言い返すと、勇者サマは言葉を詰まらせた。あからさまに不

機嫌な顔になる。

大人げないと言つなかれ。魔王と勇者は仲が悪いと相場が決まつているのだ。そもそもこの勇者サマは恐ろしく礼儀がなつてない。社会の常識というものを覚えさせる必要がある。

「道案内をしてもらつたんならまず五十一号にお礼ぐらう言ひなさい

い

びしりと言ひつと、勇者サマは頬を膨らませた。五十一号がオロオロと私と勇者サマを交互に見ている。何やら勇者サマをかばついてるようだが、知つたことじやない。

「勇者サマ、良いことを教えてあげる。魔王の城に来るつてんなら、しつかり準備をしてきなさい。情報収集と地図、それから装備品とアイテムをね。着の身着のまま体当たりで魔王に勝とうなんて百年早い！」

私がキツイ口調で叱つづけると、勇者サマの目が見る間に潤んでいつた。計算通りだ。

私が見るに、勇者サマはざらり泣き虫のようである。ちょっときつめに叱りつけさえすれば、泣いて逃げかえるに違ひない。私は子供の相手をするつもりはない。

私が余裕綽々の顔で勇者サマを眺めていると、予想通り彼の双眸からはポロポロと涙があふれ出した。非情？ だつて私魔王だし。泣きながらでもこちらを睨みつけている辺り、意志は強いのかもしれない。にしてはモンスターを頼つているようだが。いい加減五十一号とつないだ手を離すべきじやなかるうか。

しかし私の予想を裏切る出来事が起こつた。五十一号が泣いた勇者サマをあやすように抱きしめたのである。その目は私を責めている。

しゃくり上げる勇者サマを撫でる五十一号を見て私はため息をついた。モンスターの癖にお人好しな奴だ。ここは五十一号の心意気を汲んであげよ。

「お茶飲んだら村まで送り返してね」

こんなガキンチョ勇者サマに私が殺される心配はないが、彼の将来は心配である。こんなのでいいのか、勇者サマ。数年後に思い出していくベッドの上でたうちまわってそうだな。

その後勇者サマはモンスターたちに怪我の手当をされ、出されたお茶を飲みほし、なおかつお茶菓子をがつたり食べ、手土産までもらつて意気揚々と帰つて行つた。また来る、なんて言つていた気がするが気のせいだらう、うん。

勇者サマが帰つてから、私は五十一号に正座をさせられ説教をされた。

山の中で何時間も道に迷つて泣いていた子供を保護しないとは何事か、あんな擦り傷だらけの子供を放つておくのか、あんな頭ごなしに叱りつけてはいけない、などなど。

なんで元一般人の私よりモンスターの方が人間っぽいんだろう。謎だ。

第2戦 今日もツキバ村は平和です（後書き）

この連載ではやたらとハゲハゲ連呼しますが他意はありません。単に作者がハゲという語感が好きだけです。

第3戦 当人以外理不尽と思わない理不尽

困ったことになった。というか、つまこことになった。

私が自室でのんびりと『週刊魔王自身』を読んでいる時だった。勢いよく入口の扉が開かれた。

「魔王！ 今日も来てやつたぞ、覚悟しろ！」

先日の勇者サマだった。

「来るな、帰れ」

分かりやすく端的に断つたのだが、勇者サマは元気に部屋に入ってくる。というか、私の部屋まで通したのは誰だ。セーターか、勇者サマの後ろにいるセーターが裏切ったのか。そんな甲斐甲斐しく勇者サマにお茶だのお絞りだの出さなくていいから。ミルクちゃん（ウシ型モンスター）がお茶菓子まで出している。

「あ、ミルクちゃん、それ私のとつておきのお菓子じゃん！ そんなガキにやらないで！」

せつかく隣村から貰つた貴重な菓子だといつのこと、こんな生意気なガキにくれてやることはない。

しかし勇者サマからお菓子を奪い返そうとした私はミルクちゃんとセーターからの冷たい視線を浴びた。理不尽だ。

子供相手に大人げないですよと彼女らは言つが、そもそも招かれざる客にお茶やお菓子を振る舞つている時点で間違つている。打倒魔王を声高に宣言している相手を歓迎してどうする。実はあなたち私のこと嫌いなのか？ つていうかなんで私が悪者みたいになつているのだ。確かに私は魔王だがそれとこれとは別である。嬉々としてお菓子を食べる勇者サマが憎い。

「なんだ、魔王も食いたいのか？」

勇者サマが私の目の前でお菓子を見せびらかした。一日限定30個のスペシャルブドウ饅頭である。

私が手を伸ばそうとした瞬間、一日限定30個のスペシャルブドウ饅頭は勇者サマの口の中に消えた。

これ、ヤツちやつて良いよね？

「……ふ、ふふふ、身の程を知らない人間が……！ その身に恐怖を骨の髓までしみこませてやるわ！」

大人げないと呟つながれ。食べ物の恨みは怖いのだ。それにこういう台詞は魔王の専売特許だろう。

と、いうわけで、空の魔王こと空野真央と勇者オキとの戦いの火ぶたが切つて落とされたのだった。世界に魔王と勇者は数あれど、こんなくだらない理由で戦い始めたのはつちだけじゃないだろ？

バトルは鍛錬場で行うことになった。暇なモンスターが見物に来ている。コソコソしている奴らがいると思ったら、どちらが勝つか掛けをしているらしい。オッズを聞いたところ、私は1・0001倍、勇者サマが100倍だった。これ、掛けとして成立してないけれど意味があるのか？ それとも大穴に賭けるばくち打ちがいるんだろうか。

と、もうひとつ掛けをしているグループがあつたのでそちらのぞいてみた。そちらでは私が勇者サマをどうやって泣かせるかという掛けが行われていた。言葉攻めで泣かせる、睨みつけて泣かせる、

勇者が泣くまで殴るのを止めない、その他諸々。泣かせないという選択肢はなかつた。流石魔王の手下。考えることがえげつない。とりあえずこいつらが私のことをどう見ているのか分かつたので鉄拳制裁を食らわせておいた。

さて、私たちは鍛錬場の真ん中で向き合つた。勇者サマは武器を構えていた。彼の持つ武器は、確かに前回の木の枝よりはましになつていた。ましにはなつていたが、勇者サマが持つてゐるのはどう見ても麵棒だつた。そう、台所にあるあれ。パンや麵を作るご家庭ならばよく見るあれ。勝手に持ち出してお母さんに怒られたりしないんだろうか。子供同士の喧嘩ならともかく、普通の戦闘で使うには長さが足りない氣がする。が、私にとつては好都合だ。

「魔王、今日こそ成敗してやるからな！」

武器（仮）を構えた勇者サマが高らかに宣言する。

「絶対泣かす」

私も対抗して宣言してみた。大人げないだのなんだのミルクちゃんが言つた氣がしたが氣のせいだらう。

審判であるモンスターが合図を開始する。私は「どこからでもかかつてきなさい」と言って悠然と構える、なんてことはしなかつた。誰がそんな甘つちよろいことをしてやるものか。開始の合図とともに問答無用で勇者サマに飛び蹴りを食らわせる。年齢からくる体格差もあつて、全体重をかけて蹴りつけられれば小柄な勇者サマは軽々と吹っ飛んでいった。起き上がれない勇者サマを見下ろして、私はにやりと笑う。

途端に味方のはずのモンスターの一部からブーイングやら悲鳴やらが巻き起こつた。理不尽だ。あいつら誰の味方なんだ。

とにかく、勝負は勝負だ。私は勇者サマの上に馬乗りになると腕を振りかぶつた。

これは食べられなかつたブドウ饅頭の分！ これは勇者サマのせいで足がしごれるくらい説教された分！ そしてこれは、前回お土

産として勇者サマに二つの間にか渡ってしまったロールケーキの分だ！

もちろん私は鬼畜といつわけではないので、手加減しつつ殴つている。

「一発目で勇者サマが泣いていた気がするが、気のせいだろ？」

さらに四発目を食らわせようとした時、セーター五十一号に止められた。ここつぱじうやう前回のこともあって勇者に情が移つてゐるようである。何やら怒つてゐる気がする。怖いよ五十一号。あれ、その手に持つてゐのつて茨の鞭じゃない？ そつちで賭けに勝つて歓声上げてる奴ら、ちょっとこいつ助ける。

「ま、まあ待つて落ち着いて五十一号！ これは勇者サマが私を倒す、なんて無謀かつ失礼なこと言つていたことに対する私の強さを誇示するために必要な行為で、そうでもないとこのクソガキは違う魔王にも挑むからね？ 身の程を弁えさせるために必要不可欠なの！ よ、弱い者いじめとか憂さ晴らしとかじやないんだからつ！」

私は早口でまくしたてる。語尾をツンデレっぽくしてみたが、私が言つても全然可愛くなかった。というかうつかり本音が漏れてしまつた。

気がつけば、私の下からしゃくり上げて泣く声がする。勇者サマだつた。観戦しているモンスター（メス）からの視線が痛い。あいつら無駄に母性本能豊かだ。同じ女でも私は勇者サマが不憫には思えないので彼女らの気持ちは全く分からぬ。

しかし視線が痛いので私は仕方なく勇者サマの上から退くと、彼を立たせた。軽く服の埃を払つてやる。しかしひどい顔だ。男なんだから数発殴つた程度で泣くなよ。

私がため息をこらえていると、何体かのモンスターが駆け寄つてくる。勇者サマに向かつて。そして勇者サマを取り囲むと、みんな手に飴だのチョコだのを手に、勇者サマを慰めていた。差別だ。どうかそもそも、

「ここつて普通、『流石は魔王様です！』って私を褒め称える場面

じゃないの？「

曲がりなりにも勇者に圧勝したんだからそれくらいはあつていいと思ひ。なんて理不尽な連中だ。

何やらウルフが鼻で笑つたので、奴の尻尾を思いつきり引っ張つておいた。今度奴が寝ている間にリボン型首輪をつけておこう。

その後、モンスターに手当された勇者サマはすつと泣きじゅくつていたが、やがて泣き疲れて寝てしまつた。まさにガキだ。

ソファに寝かされている勇者サマを眺めながらため息をついた。このまま山に捨てたいところだが、セーターたちが怒るのは田に見ていろ。送り返すのが無難だろう。

とはいへ、この勇者サマは隣町の勇者である。いくらなんでも私の配下のモンスターが勇者を送り届けるのはまずいだろ。田代いろ食事以外にはさして関心のない大蛇魔王のミーミーヤンジャでも快く思わないに違いない。手間ではあるが、この勇者サマが寝ている間に村に送るに違ひない。まだ日は明るいし面倒だし配下のモンスターに送らせるか。今からなら夕方までには村に着くはずだ。ついでに手紙でも書いて、あのハゲに文句を……いや、隣村の村長に直接言つた方がいいのか。それともこのオキとかいう勇者サマの親御さんに連絡をした方が良いのだろうか。

そこまで考えて私は気付いた。私はこの勇者サマのことをほとんど知らない。よく考えたら彼とはほとんど話をしていない。初対面はちょっとだけ叱つて終了したし、さつきも会話らしくて会話もなかった。私が知つていることと言えば、彼がオキという名で、泣き虫

な勇者といふことぐらいだ。あと弱い。しかしそう思っているのはそれだけで、彼の親の名前も家の在り処もどういう素性かも知らない。

私はしげしげと勇者サマを見下ろした。

十歳ちょっととの少年は、先ほど大泣きしたせいですっかりまぶたが腫れ上がっている。私が殴つたせいで頬も少々赤く腫れているようだ。子供相手に三発はちょっとやりすぎだったかもしない。次回からは一発ぐらいに減らそう。むしろ次からはボディ狙いでいうそろしそう。殴らないなんていう選択肢は私の中には存在しない。さて、私は觀察を続けることにした。飾り気のない服も、茶色くて短い髪も、このあたりではありふれたものだ。同年代の子供と比べていささか小柄で色が白い。一言で言うならもやしつ子っぽい。こんなのがどうして勇者なんてやつてるんだろう。

今さらだが、勇者について説明しておこう。

勇者というのは、魔王と同じで職業の一種だ。ただし魔王と違つて試験を受けるものではない。ある日いきなり認定されて『勇者』という職業になるのだ。誰からか、なんていうのは私にも分からぬ。不思議なことに、魔王が爆発的に増えれば勇者も爆発的に増え、魔王の数が横ばい状態ならば勇者の数も然り。別に魔王連盟がわざわざどこかに知らせているわけでもないのに、自然とそうなつている。言うなれば天の意志だ。

私の母曰く、この事象は地球上には存在しなかつた『不自然法則』らしい。レベルや職業による特殊スキルなんていうのもそうだ。地球では職業につけば勝手に覚える特殊な技なんていうのも、目には見えないが感じられる経験値やパラメーターもなかつたらしい。魔法を使える人もいなかつたというのだから驚きだ。そもそも母のいた地球上には魔王も勇者もいなかつたんだとか。その上モンスターといえはクッキーを貪つている奴やポケットに入るもののぐらいしかいなかつたのだとか。151種類しかいなかつたというが、それだけ

いればたくさんいると言つて過言でない気がするのだが。

閑話休題。勇者という職業に任命されたものは、それ以外の職に就くこともできるが、基本的に勇者の仕事をすることになる。モンスターを倒したり、魔王を倒したり、あとは災厄が訪れた際に原因を究明して解決したり、などなど。それらには知識と腕つ節が必要なので、オフシーズンの勇者は自らの鍛錬に時間を費やしている。場所によつては勇者を集めて雇つているところもある。基本的に勇者は優遇されるが、冷遇されることはありません。

なぜ勇者が優遇されるかと言つと、その職業特有の特殊スキルにある。

世の中には魔王が数多くいるが、魔王を倒せるのは勇者だけだ。勇者に任命されていない人間が魔王と戦つても、なぜか止めを刺すことが出来ない。せいぜい虫の息にするぐらいだ。しかしその場合、復活した魔王が怒り狂つて報復する可能性が高いのであまり推奨されていない。ちなみに弱つたときに封印をするだけならレベルの高い魔法使いたちが協力すれば可能だ。しかしそれでも危険な賭けである。

そして原因不明の災厄。これにも勇者が対策班に加われば、そうでない場合に比べて圧倒的に早く解決する。それはもう天のお導きとしか言えないくらいのいくつもの偶然が重なるのだ。

そして往々にして、勇者は目覚ましい成長を遂げる。二十日大根もびっくりな成長っぷりだ。鍛えれば鍛えるほど強くなり、心強い存在となる。

そういうこともあって、どの地域でも万が一の災厄に備えて常に勇者を一定数確保してあるのが現状だ。

この勇者サマも勇者であるなら、この幼かろいとおバカさんであ

ろうと問答無用で隣村の管轄下で過ぐしているはずである。その割には随分とひょろひょろしているし、そもそも近隣では評判の優良魔王の私を倒そうと考えているのがおかしい。年齢から考へるに、任命されたばかりなのかもしれない。

そういえば思い出した。確か現在隣村ではツキバ村と同様、勇者がいなかつたはずである。一ヶ月ほど前に、つちの村は勇者がいなくて不安だと話しているのを確かに聞いた。ということは、この少年はそれこそここ数週間の内に任命された勇者サマなのだろう。待望の勇者到来に喜んだ村人からおだてられて舞い上がってしまったに違いない。そう思えば若干同情の余地も出てくる。

そこまで考えて、私は首を振った。こんなガキのことを考えてもしょうがない。時間の無駄だ。これだけ痛めつけて力の差を見せつけたのだから、この勇者サマも金輪際うちに来ようとは思わないだろ。とっとと送り返して縁を切ろう。そうすれば一度と煩わせられないこともない。

そうして私は近くにいたモンスターを呼びつけると、勇者サマを村まで連れていくよびに命じたのだった。せりばだ勇者サマ、永遠に。

勇者サマとの対決の翌々日、客が訪れた。ハゲことつけの村長と、隣村のうすらハゲ村長だった。

ハゲが来ること事態は珍しくない。リコと夫婦喧嘩をしたとかで

愚痴りに来たり、娘に「お父さん臭い！」と言われて愚痴りに来たり、あとはまあ村についての真面目な話をしに来たり。ちなみに最後以外はすべて追い返している。とはいっても、面倒見のいいモンスターが愚痴を聞いてやっているらしい。そういう意味ではハゲと仲が良いのはモンスターたちだらう。

対してうすらハゲとの交流は私もモンスターたちもそれほど深くない。季節の便りを交わしたり（もちろんモンスターに書かせる）たまに顔を見せに行つたりする程度には交流があるが、うすらハゲが私の家まで来るのは珍しい。大規模なモンスターの貸し出し要請だらうか。

「さつさと用件済ませてね」

私はストレートに言った。昨日モンスターたちとカードゲームを夜更けまでやっていたので眠いのだ。あいつら魔王相手だと言うのに接待ゲームができないらしい。連敗して意地になつた私がモンスターたちが音をあげるまで勝負を挑み続けていたのだ。寝不足のせいで頭が多少ぼんやりしている。

それにしても、ハゲたちはやけに機嫌が良い。何かあつたのだろうか。

「実はうちの村の勇者のことなんですが

うすらハゲが言う。確かに一つの名前はカミウスだつたがアタマウスだつたか、そんな名前だつたはずだ。最初に聞いた時、見事なまでに名が体を表しているなあと感心した記憶がある。

「知つてゐる。少々無謀な子供のようだけど」

まあ将来性があると言えばある。何しろあの勇者サマは成長期を控えているフレッシュマンだ。今はチビでひ弱でも、数年後には驚異の成長を遂げるかもしれない。

「そちらに迷路をおかけしたそうで、申し訳ありません。何と申つたらよいか……」

アタマウス（だつたと思う）が深々と頭を下げた。どうやら先日

の件のお詫びに来たらしい。「」苦労なことだ。

「こちらはお詫びの気持ちです。どうぞお納めください」

そう言つと、アタマウスはおもむろに包みを取り出した。どうせ適當な菓子折りかタオルセットでも持つてきたのだろうと高をくくつていたが、中から出てきたのは隣村の名物大蛇饅頭と、見るからに高級そうな茶葉、そして綺麗なティーセットだった。どうしてなかなか、私の好みの品である。

「うん、ま、あの勇者サマはまだ子供だし、私もちょっときつく対応しすぎたかも知れないからお互い様つてやつだよ」

私は鷹揚に言うと、嬉々としてお詫びの品を受け取つた。アタマウスがホツとした顔で再び謝辞を述べた。

と、それまで黙つていたハゲが口を開いた。

「聞きましたよ、魔王様。なんでも勇者を一喝して、魔王の威厳を見せつけたとか。流石魔王様です」

するとアタマウスも大きくうなずく。

「ええ、オキが赤子の手をひねるよつて簡単に負けたとか。流石ですね」

褒められて悪い気はしない。うん、こいつらなかなか分かっているじゃないか。

「当然」

私はお茶を飲みほした。

「魔王様にとつては、勇者の相手など朝飯前ですね」

アタマウスが言つ。

「当然」

あんなのに負けるわけがない。他の魔王からはヘタレだの弱いだの言われる私だが、流石にあれに負けたら大人として駄目だろう。

「当たり前だろ、カミウス。うちの魔王様を甘く見るんじゃないハゲが厳しい声音でうすらハゲに言つ。あれ、アタマウスつじやなかつたのか。うつかり間違えていた。どっちにしろ薄いことは確かだし、口に出してないからセーフセーフ。

「うちの魔王様なら勇者を一流に育てる」とだつて簡単なことだ。

「そうですよね、魔王様」

「当然」

「おお、では」依頼の件を引き受け下さるんですな？」

「……ん？」

何やら雲行きが怪しくなつてきたぞ。

「ありがとうございます、魔王様！ 」これでうちの村も安泰です！」

カミウスが何度も頭を下げる。待て待て、何か嫌な予感がする。

「流石は魔王様、なんてお心の広い！」

ハゲも言つ。

「ご依頼の件つて何だ？」

「ちょっと」

私が尋ねようとすると、隣りからすつと手紙が渡された。ミルクちゃんだった。読めということだらうか。

手紙を開いて内容に目を通す。

読んでいる最中から、眉間にしわが寄るのが分かる。懇切丁寧な口調で書かれてはいるが、要するに面倒くさいことこの上ない依頼だった。今の今まで私にこの手紙を渡さなかつた辺り、ミルクちゃんたちはこうなるのを狙つていたに違いない。本気で頭を抱えくなつた。

依頼といつのは、つまるとこじつこじつだ。

「魔王様に才キの教育を受けさせていただけるなんて光榮です！」

顔を輝かせた両村長の顔がキモい。手紙によると、私が勇者サマの教育を引き受ける代わり、勇者サマは両方の村の所属の勇者となるそうだ。それでうちのハゲまで来たというわけだ。

「ありがとうございます！ これからもオキのことをどうぞよろしく

くお願ひいたします！」

満面の笑みを浮かべる一人に言われ、今更違うと言えない。とい
うか、今気付いたが柱の陰からこちらをうかがっていたモンスター
たち（主にメス）が狂喜乱舞している。あいつら、どんだけ勇者サ
マにほだされてるんだ。

引きつった笑みを浮かべる私に、カミウスたちは今後のことにつ
いて一通り説明して帰つて行つた。

魔王になつて早、二年。私は勇者サマの教育係となつたのだった。

第3戦 当人以外理不尽と思わない理不尽（後書き）

やたらとハゲハゲ連呼しますが以下略。

第4戦 魔王の天敵登場

頭輝くシャイニングブレイズに頼まれたので、私は勇者サマの面倒を見ることになった。といっても、勇者サマが通いで来るのが条件としている。村長たちには「毎日山を登つてくることで足腰を鍛える」と言つたが、実のところ毎日の山登りにうんざりしてつと音を上げてくれないかと期待している。

頭がまぶしい一人組が帰つてから、私は考えを巡らせた。

いくらお子様の勇者サマとはい、三日ぐらいは通つてくるだろう。面倒だが私は彼を立派な勇者にするため、面倒だが、かなり面倒だが、とてつもなく面倒だが、少なくとも数日は指導する必要がある。

勇者サマは子供だ。子供に必要なのは運動と勉強だ。
そして私は運動が嫌いだ。

よし、座学中心にしよう。

そう決めた私は勇者サマの勉強を補助するモンスターを合成することにした。教材の準備や授業を押しつけるためだ。繁殖能力は低くていいが、高性能である必要がある。

余談だが、大抵のモンスターはつがいであれば繁殖可能である。獣型モンスターはその代表だ。私の作ったセーターは一応人型なので、これまた繁殖可能である。確か十四号などは三角関係の末に、生まれた時期が同じ幼馴染の十三号を振つて、年下の生意気ボーイ二十三号とくつついて子供を作つてはづである。十三号は直後に失踪したが、それから割とすぐに村の南の山に謎のバラ園ができるらしいので恐らくそこにいるのだろう。モンスター間でもこういつたドロドロがあるのがなんともやりきれない。

閑話休題、なんやかんやで上手くいき、新しいモンスターが生まれた。

「ベンキョウジヨシュモンスター、略して、

「ベンジヨ、でいいか」

私が呟くとモンスターが猛然と首を横に振った。ベンジヨという名前が嫌らしい。生まれた直後から創造主に逆らうとはなかなかの反骨精神だ。こいつは将来いつぱしのモンスターになるに違いない。とにかく、周囲のモンスターの同情交じりの反対もあり、名前は別のものに変えることにした。ベンジヨといつもある意味レトロで非常に親しみやすい名前だと思うのだが、モンスターたちはそうは思わないらしい。生まれたモンスター自身が最終的には殺氣混じりで睨んできたので私が折れることにしたのだ。

結局、モンスターの名前はジョシュになつた。助手ではない、ジョシュだ。アクセントに違いがある。その辺はジョシュ自身に何やらこだわりがあるらしい。眼鏡をかけているから博士とかにしたらよかつたと思わないでもない。

さて、セーターも人型だがジョシュも人型である。見た目的にはインテリ眼鏡、もしくはもやし。オプションの眼鏡は私が与えた。その方が頭が良さげに見えるからだ。ジョシュは私が作ったモンスターの中で一番人間に近い形をしている。大変頭が良く、珍しくも人語を話せるモンスターである。

前回圧勝だつたあの勇者サマとの戦いで私のレベルが上がつていった。子供をいじめただけでレベルが上がるというのもなんとなく罪悪感がないでもないが、喧嘩を売つてきたのはあちらなので深く考えないことにしている。

それはさておきレベルが上がつたので、合成したモンスターの能力も上げることができたようだ。主に能力のパラメーターを知能に振つたため、頭はいいが武ばつことには向いていないモンスターである。ついでに言えば、現在生まれたてのジョシュは頭はよくと

も持っているのは基本的な言語能力だけ、他の知識はゼロの状態なので、先代魔王の蔵書でも読ませて勉強するよう命じた。私が作りだしたモンスターが私の知らない知識をあらかじめ持つて生まれるというのはあり得ないのである。そのところ、非常に不便だと思う。とかく、地下の図書館は先代から引き継がれてかなりの量の蔵書がある。カビ臭くも膨大な知識の蓄えられたそれらを、私は面倒くさいから自発的に読む気はない。じつは勉強ができる奴が読むべきなのだ。

翌日の勇者サマとの勉強会の準備を任せた私は、さつさと寝ることにした。モンスター合成って疲れるんだよね。

翌朝、鳥のさえずり以上にうるさい声が私の眠りを妨げた。

「魔王！ 来てやつたぞー！ とつと起きひー！」

どんどんと寝室のドアを叩く音がする。言わずもがな、勇者サマだ。

日々の一度寝が日課の私は朝から機嫌が急降下してた。宵つ張りの朝寝坊で構わないじゃないか。一度寝最高。勇者なんていくらでも待たせてやる。だつて私魔王だし。

と、思つていたら寝室の扉が開いた。入ってきたのはジョシュだつた。

「魔王様、おはよつひぞこます。あなたには勿体ないくらいの気持ちの良い朝ですよ。そんな寝ぼけた顔でぐずぐずしてないでとつと起きて下さい。だらしないあなたのせいで私の仕事が始められないじゃないですか」

一瞬何を言われたのかさっぱり分からず私はジョシュを呆然と見つめていた。一朝一夕ほどのない、たつた一晩でどうしてこうなった。言葉は一応丁寧語だが慇懃無礼、むしろ表面上の敬意すら払つてもらつてない気がする。なんでいちいち言葉の中に私に対する悪口が混ざつているのか。なんでだ。敬語キャラで勉強ができる奴といつたら気が弱い優男だつて相場が決まつてんじやないのか。眼鏡か？ 眼鏡キャラだから腹黒つぽくなつてゐるのか？ 敬語と眼鏡の組み合わせが悪いのか？

私が悶々と悩んでいる間にジョシュはさつさと部屋のカーテンを引いて窓を開けている。

ジョシュはすたすと私のところに歩み寄つてくると、無表情に私を見下ろした。

「なに間抜けジラセラしていらっしゃるんですか？ 時間の無駄ですから早く顔を洗つて準備して貰ださいね。お客様を待たせるなんて大人にあるまじき行為ですよ」

無表情で言うな無表情で。怖いだろ？が。

「そーだそーだ！」

戸口のところにいる勇者が同調する。クソガキめ。つていうか時間を指定しなかつた私の手落ちか？ いやしかし散々ボコつてから間もないのにまさか魔王の居城（といふほど城つぽくないが）に朝つぱら来るなんて誰が想像できるものか。

「分かった。準備するからあんたたちは出て行きなさい」
なんとかそれだけ言うと、ジョシュを戸口の方へと押し出す。扉を閉めようとすると、

「くれぐれも我々を追い出してから一度寝しないでくださいよ？」
と釘を刺された。

人の思惑を読みやがつた。これだから頭のいい奴は。

十数分後、用意を整えた私は部屋を出た。いつもの私のくつろぎ空間では勇者サマが椅子に座つて朝食を待つてゐるところだった。

「魔王、遅いぞ！ ご飯が冷めちゃうだろ！」

私は気付いた勇者サマが言つ。いやいやいや、おかしいだらう色々々と。

「なんで勇者サマと一緒にご飯食べなきゃいけないのよ」

頭痛をこらえて言えば、勇者サマは胸を張つて言つ。

「そんなの、僕がご飯を食べてきていからに決まつてゐるだろ！」

「胸を張つて言つことじやないからそれ」

こんちくしょう、親の顔が見てみたい。なんだこの強引グマイウエイな子供は。

「明日からは来る時間を決めておいたほうが良いでしょう。魔王様の準備もその時間に合わせてさせますし、食事をなさるなら準備も必要ですからね」

くいつと中指で眼鏡を押し上げながらジョシュが言つ。その表情はトコトコ無表情だ。つていうか、さつきさりげなく準備をさせて言わなかつたか？ 仮にも私は魔王、つまり上司のはずなんだけど。

「ジョシュ、一晩の間にあなたの身の上に何が起つたのさ」

私が唖然として言えば、ジョシュは再び眼鏡を押し上げる。

「地下の図書室で勉強してことおつしゃつたのは魔王様でしたが、もうお忘れですか？」

嫌味つたらしい言い方だ。しかしその際それは置いておくとして、最初に読んだ本のタイトルは？

「馬鹿犬のしつけ方、という本でしたが」

それが何か？ とでも言つようにジョシュが私を見る。問題大アリだ！ つていうか先代魔王はなんでそんな本を持つてたんだ。犬飼いたかつたのか？ というか、

「私は馬鹿犬と同列か！？」

こんちくしょう、最初の本だけでも私が選んで渡せばよかつた！

『偉大なる魔王贊歌』みたいな。あるか知らないけど。

ちなみにこの時私は知らなかつたのだが、その次にジョシュが読んだのは『駄目な上司のスバルタ操縦法』という本だつたらしい。先代魔王の蔵書目録を一度確認する必要がありそうだ。つていうか先代魔王がその本を読んだのか？

「はは、まさか魔王様が犬と同列なわけないじゃないですか。犬よりは多少ましだと思いますよ」

ジョシュが無表情に声だけで笑う。つていうか犬より多少つて魔王どころか人間としての尊厳も危ないじゃないか。

「おい、魔王。腹減つたんだから早く席に着けよな！」

私たちの会話がなかなか終わらないことに痺れを切らした勇者スマがフォークの柄でテーブルを叩いた。

次の瞬間、ピシッと鋭い音がした。

「痛つ！」

勇者スマが手を押されて悲鳴を上げる。

「テーブルを叩いてはいけません。お行儀が悪い」

ジョシュの手には、先ほど勇者スマの手を叩いたであらう鞭が握られている。いつの間にそんなもの持つてたの、ジョシュ。

「あなたを立派な勇者として教育するのが私の務めです。厳しくいきますので、そのつもりで」

その宣言はものの見事に有言実行、それから勇者スマに対するジョシュの厳しい指導が始まった。

……そしてなぜか私も立派な魔王になるべく厳しく指導され、かなり後悔することになるのだった。

モンスター合成は計画的に。

第4戦 魔王の天敵登場（後書き）

魔王の天敵登場。勿論ジョシュのことです。

第5戦 まずは基本の勉強

朝、私はゆっくりと身を起こす。

枕元にあつた糊のきいた服に袖を通す。皺ひとつない、綺麗な服だ。髪もきつちり櫛を通す。

身支度を整えると、自室を出る。近くにモンスターがいたので私は笑いかけた。

「おはよう、いい朝だね」

おはようございますと頭を垂れるモンスターに、私は鷹揚に笑つた。

「そんな改まらなくていいよ、顔を上げて。むしろいつも世話をなつている私がお前たちに頭を下げなければならんんだから」
モンスターが感極まつたように私を見つめている。私は微笑み返してから歩き出す。

食堂につく。勇者サマが来ていた。ぴしりとしたシャツにベスト、髪もしつかりと整えている。

「おはよう、勇者サマ。いい朝だね」

「おはよう魔王。ああ、爽やかな朝だ。今日もあなたに会えて光栄だよ」

「はは、私こそ未来ある勇者サマと朝食を共に出来るなんて光栄の極みだ」

私たちは笑顔を交わすと、対面の席についた。

ほどなく、湯気の立つた食事が運ばれてくる。美味しいそうな食事が山ほど出てきた。

「お前達、先に食べなさい」

皿をじっと見ていたモンスターに私は言つ。

モンスターは遠慮したが、私はにこりと笑つ。

「私はいい。お前たちが幸せなら私も幸せ。一人で食べるよりもみ

んなで分けて食べた方がおいしいでしょう?」

しばらくモジモジとしていたモンスターたちだが、勇者サマも一緒になつてすすめたのもあって食べ始めた。

「皆で食べる」飯はおいしいねえ

「あはは、確かにそうだな、魔王」

私と勇者サマは明るく笑みを交わした。

ああ、なんて平和なんだ。

なんて思つわけがない。

「……悪夢だ」

私はガバリとベッドから身を起こした。

どうやらジョシュのスバルタな勉強に影響されておかしな夢を見てしまつたらしい。

あんなもん、悪夢以外何物でもない。あまりの氣色悪さに鳥肌が立つていて。

と、ドアの外から喧しい声がする。どうやらまたぞろ朝駆けしてきた勇者サマがやらかしてジョシュに教育的指導を食らひつているらしい。

魔王だが私も人の子、鞭を食らいたくないのでさつと身支度を整えて部屋を出た。

「おはよっ、ジョシュ」

私は声をかける。ジョシュは鞭を片手に勇者サマを正座させて説教をしていた。勇者サマは涙目だった。腕にいくつか///ズ腫れができる。

昨日といい今日といい、どうして泣きそうな目になつて分かって

いて来るのか、このお子様は。このあんちくうんの勇者サマはよっぽどの鳥頭なのか、そうでなければどこなのだ？

そもそも勇者は日々辛い修行に耐え、荒野やら洞窟の中やらさまよいながらモンスターと戦い、拳句多くの人の期待やらを受けて失敗の許されない使命を全うしなければならないのだからそれぐらいの性格でなければ務まらないのだろう。なぜか死ねないし。ついつい人の家のタンスやら壺の中やら漁らなきゃやつてられないくらい荒むのもうなずける。なんとも嫌な職業だ。面倒事は部下にすべて押しつけ、やることと言えば日長一日暇つぶしといつ魔王とはえらい違いである。あれ、もしかして魔王つて超優良職業？

「おはよう！」さこます、魔王様。今日は昨日よりはましな時間ですね。少しさは眞面目にする気になりましたか？ 明日からもこの調子でお願いしますね。でもそのみつともない寝癖は直して下さいませんか、見苦しいですよ」

こんちきしそう。殴りたい。相変わらず表情が欠如した面をすぐ殴りたい。多分私負けるけど。甯つ張りの朝寝坊、基本的に食つちゃ寝しかしないぐーたら生活魔王の弱体化なめんな。

髪を撫でつけながら私は食事の席に着く。私が来たことで勇者サマに対する説教が終わつたらしく、勇者サマも真つ赤な顔で席に着いた。

食前に感謝の言葉をそれぞれが言つ。勇者サマは神に対して、私は食物自身に対して。

そしてそれぞれ食事を食べ始める。モンスターに分け合える？ そんなことするわけがない。そもそもこれは私用の食事であつて、他人というか他モンスターに与えるなどと言語道断。

食事の最中もジョシュの目が光る。やれ姿勢が悪いだのやれピーマンをより分けるなのだ、やれよく噛んで食べろだの口うるさい。私の母より厳しい。といつても、私の母の場合私が少しでも残そうとしたら皿ごと没収して自分で食べていたのだが。おかげは大抵一

品しかなかつたのでその後は主食のパンのみかイモのみ、時々米を食べることとなる。うちは貧乏だったのだ。ひもじい思いをしたくなくて、私は嫌いなものでも頑張つて食べた。現在の私が食い意地が張つているのもその辺に起因すると思つ。

勇者サマの食べっぷりを観察してみる。好き嫌いがあるらしく、ニンジンをしかめつ面で食べていた。やはり子供だし、野菜が苦手なんだらう。まずそうに飲みこんだあとはベーコンを嬉しそうに食べている。勇者サマは嫌いなもとの好きなものを交互に食べて誤魔化す口らしい。それをハラハラと見守つてゐるモンスターたちは暇なのか。暇なんだな？ 仕事押しつけてやるうか？

それはさておき、うちはいつも私が起きてくるのが遅い上に寝起きが良くないために朝食は軽いものにしている。が、今日は勇者サマが来るということでモンスターが張り切つて準備をしたせいでいつもより三割増量である。増えた三割は野菜だ。勇者サマ、頑張れ。これはきっとモンスターからの愛の鞭。私はピーマン以外は好きだからいいけど。頑張れば食べられない量じゃないし。あ、でもあとセロリも嫌い。

さつさと食事を食べ終えた私だが、勇者サマはもたぐさとまだ食べていた。どうやら思つたより嫌いな食べ物が多くつたらしい。それにしても作ったモンスターが気の毒だからあんまりはつきり態度に出してやるなよ。

と思つたら、厨房の方から雄叫びが聞こえてきた。昼食こそは！ みたいなことを言つてゐる。

「何があつたの？」

ジヨシュに目を向けて見ると、相変わらずの真面目腐つた表情で答えてくれた。

「子供の好き嫌いをなくすのが大人の勤め、だそうですよ」

「……料理人魂に火が着いたわけね」

何回目になるかは分からぬが、やはりこつらは勇者サマに対しても過保護すぎると思つた私だつた。

朝食の後はお勉強である。不本意ながら私も参加している。

「はい、では昨日の続きから始めましょうか」

ジョシュが教師然とした調子で言つ。

私たちは勉強部屋と呼ばれる部屋にいた。この勉強会が始まるまで、私は一度も来たことがない。というか、存在すら知らなかつた。だつて私勉強しないし。勉強部屋は黒板と机があり、うずたかく積まれた資料やら地図やら様々なものが置いてある部屋だ。

「まず、レベルを上げるにはどうしたらよいですか？」

「はいっ！」

勇者サマが勢いよく手を上げる。無駄に元気だ。

「修行する、モンスターを倒す、人を助ける！」

「その通り」

ジョシュがうなずく。

「勇者だけでなく、一般人や我々モンスター、それに魔王様でも経験値を貯めることはできます。修行は堅実ですが経験値が低く、強いモンスターを倒せば高い経験値が得られます。が命の危険があり、人助けの場合は突発的なこともあります。内容によって経験値にムラがあります」

淡々とした声音でジョシュが解説をする。

「私の場合、倒さなくても経験値が入るけど？」

モンスターを虐め倒した……じゃなかつた、躊躇たときにレベルが上がつたのだ。

ジョシュは眼鏡を押し上げた。

「それは魔王様にとつては修行にカテゴライズされたのでしょう。また、倒すと一言で言つても種類があります。相手を消滅させること、気絶させること、降参させることと様々です。もちろん経験値

にも反映されます

要するに、相手を殺せば高い経験値が、そうでなくともある程度の経験値が得られるわけだ。どんな経験も無駄にはならないってか？ 何の訓話だか。

「なあ、モンスターって死んだらどうなるんだ？」

お気楽お子様ノ一 天気な勇者サマが尋ねる。私は顔をしかめた。

「モンスターに死ぬという表現は似つかわしくありません」

ジョシユは眉ひとつ動かさない。大した鉄面皮だ。

「じゃあ死なないのか！？」

勇者サマが目を丸くして驚く。無神経な奴だ。

ジョシユは一瞬考えたようだが、やがて眼鏡をくいっと押し上げて喋り出した。関係ないけどこいつのこの癖、なんかむかつく。

「モンスターは一定の条件を満たせば消滅します。逆を言えば一定の条件を満たさなければ何度も甦ることが可能です。しかしその場合、それまでの記憶の蓄積は消えた上に弱体化しますので、新しく生まれ変わると考えていただいて結構です」

ジョシユはモンスターの生死の仕組みについての明言を避けた。賢明だらう。

モンスターには核というものが存在する。モンスターによつて存在する場所が異なるが、人間で言う心臓のようなものだ。しかし人間と違うのは、モンスターには核とは別に心臓が存在するということだろう。心臓が破壊されればモンスターは活動を停止する。脳を破壊されても同様。そうするとモンスターの体はまるで石のように硬化し、砕け散る。これが世間一般の考えるモンスターの死だ。

しかし、実はこの時点でもンスターは完全に死んだわけではない。核が無事ならば、それに内蔵する魔力を使って復活するのだ。核にはモンスターの遺伝子とでも言つべきものが刻み込まれており、同

じ種族のものが再び誕生する。文字通り、同じ種族のモンスターが誕生するのであり、一度死んでしまったモンスターが生き返るわけではない。

逆を言えば、モンスターの核を破壊されてしまえば一発でアウトである。モンスターは一瞬で消滅し、復活も出来ない。

さらに言つならば、核の中に復活するだけの魔力が残つてないと復活できない。復活しようとした核はエネルギーを放出しきり、砕け散つてしまふのだ。そのため私なんかは弱つたモンスターにちょいちょい魔力を与えたりする。戦力が減るのは防ぎたい。また、核だけの状態でも魔王が魔力を注げば即座にモンスターは再生する。ちなみに考えたくはないが、魔王が死んだ場合は問答無用で消滅する。復活なんて芸当ができるのはほんの一握りの強大な魔力を持つた魔王だけだ。私のような弱小魔王が復活できるわけがない。そのため私は日々死なないようしているのである。

ふと違和感に気付く。勇者サマの雰囲気が変わったのだ。
「どうかしましたか？」

ジョシュが声をかける。勇者サマはうつむいていた。しばらく勇者サマは黙つていたが、やがて小さな声で呟いた。

「……人間は死んだらどうなるんだ？」

私とジョシュは顔を見合せた。

なんでこんなことを私らが教えなきやいけないんだ。こういうのは普通親が教えるもんだろ？

ジョシュはしばらく勇者サマを見ていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「死んだら終わりです」

実に簡潔かつ明瞭な答えた。

「ジョシュ、あんた子供相手なんだからもうちょっとオブラーート包

めば？」

私が呆れて言えば、ジョシュはしばらく考えたようだが、死んだ人間で生き返ったのは勇者だけです。他の人が生き返ったという話はありません

包む気ゼロのようだ。勇者サマの体がびくりと震えた。

「……勇者は生き返るのか？」

恐々とした調子で勇者サマが顔を上げた。なんだ、そんなことも知らなかつたのかこのガキンチョは。

「魔王様はご存知ですよね？」

まさかここでお鉢が回つてくるとは。思わず腰を浮かせて逃げの体勢をとつた。

「私に言えと？」

「ええ、お願ひします」

言い方こそ丁寧だが、面倒だから私に押し付けたいに違いない。つたく、とんでもない性格だ。一体誰の影響なんだか。

ノーコメントを貫き通したかつたが、ジョシュの無言の圧力に耐えられなくなつた私は口を開いた。

「普通の人間の体は死んだら朽ちる。止まつた心臓が動き出すことはないし、祈つても起き上がりつたりしない。でも勇者の場合、体が朽ち果てることがない」

これは知り合いの魔王に聞いた話だ。

「死んだ勇者の体は不思議な光に包まれ、魔物が害をなすことはできなくなる。その状態の勇者は周囲の力を吸収するから魔物の傍に置くのは邪魔。だから魔物たちは棺桶に勇者の死体を突つ込んで街に送り返す」

そういうえば、棺桶に突つ込まれた状態で洞窟の奥深くに閉じ込められたり土に埋められたり水に沈められたりする勇者も結構いるらしい。それでも時間が経てば復活して出てくるんだとか。本当に人間なのか、勇者サマ。

知り合いのオカマ魔王は言つていたものだ。

『もーすつごいのよ！ 一度怖いもの見たさで放つておいたんだけどねー、バンバンこっちの力吸われちゃうのよー。それでも我慢してたのよ、アタシ。でも怖くってー。アタシちゃんとダーリンの腕もいで食べちゃったのに、徐々に生えてくるのよ！ トカゲのしつぽじゃないのよ、人の腕！ 人の腕が生えてくるんだから！ ダーリンは人間なのによ！ それ見てたらさすがにダーリンでも怖くなっちゃって、急いで街に送り返しちゃったわよ。アンタも勇者やつちゃつたら、変なこと考えずに街に送り返しちゃつた方がいいわよー』

と。

ダーリン、といつのは彼にじょつちゅう挑んでくる勇者のことである。連戦連敗らしいが、懲りずに挑むあたり勇者どM説の裏付けになりそうだ。

「お、送り返された勇者はどうなるんだ！？」

おや、勇者サマが食いついてきた。なんだか顔色が悪いぞ。なんだかこういう純真な子供に嘘を吹き込みたいと思つてしまつのは大人の性だらう。

私はにやりと笑つた。

「送り返された勇者はね、バラバラになつた体を縫い合わされて、足りない部分は粘土で補つて元の形に戻すんだよ。それから祭司が三日三晩祈つて生贊の子羊ささげて生き返らせるの。生き返つた勇者はしばらく激痛のせいで動けないんだけど、その状態で直るまでもくらーい教会で祈りをささげられるんだよ」

「う、うそだつ！」

勇者サマが青ざめた顔で叫んだ。

「嘘じやないよー。勇者サマも心当たりあるんじやない？ 突然教会の説話が中止になつたり、立ち入り禁止になつたことない？ あれは勇者の体を縫い合わせたり生贊の子羊の血を掛けたりしてるんだよ。死ねば死ぬほど体が土粘土になつていくんだつてさ」

私が言えба、勇者サマは言葉を詰まらせた。教会の件で心当たり

があるのだろう。怖がってる怖がってる。いい気味だ。

「そ、それじゃあ俺もいつかは粘土になるのか！？ 粘土だつたら水に溶けるだろ！？」

「そつそつ、だから一度死んじやつた勇者はお風呂に入れなくなるんだよね」

「お風呂にも入れないのか！？」

勇者サマの悲痛な声が響く。

「そう。雨に降られても解けちゃうしね」と、空気を切り裂く音がした。

「いつたつ！ ジョシュ、何すんの！」

私の手にミミズ腫れが出来ていて。ジョシュの鞭を食らつたのだ。「魔王様、悪ふざけが過ぎますよ。いたいけな子供をいじめてる自分が情けなくなりませんか？ それとも魔王様はそのなりで中身は彼と同じくらい幼いのですか？」

冷ややかなまなざしを向けられて私は不満げに肩をすくめた。ちよつといくらいいじやないか。

「や、やつぱり違うのか！？ 違うよな！」

勇者サマが勢い込む。ちつ、もうちょっとと楽しみたかったのに。

「……魔王様が言ったことはすべてが嘘だというわけではありません」

「え……？」

勇者サマがピシリと固まる。なんだ、ジョシュも人が悪いな。知つてたけど。

しかしこの蔵書にはそんなことまで記した書物があるのか。侮りがちな、先代魔王。

「勇者が死ぬ時は、大抵ひどい状況です。その体が損壊していることも少なくありません」

首が千切れそうになつてたり腕がもげてたり皮膚が焼け焦げてたり内臓出てたりね。

私は未だかつてこの生意気なガキンチョ勇者サマ以外に挑まれた

ことがないので分からぬが、他の魔王の話を聞く限りそんな感じらしい。一度と刃向わないように魔王に対する恐怖を骨の髓まで叩きこむのだそうだ。勇者と違つて一度死ねば終わりの魔王は必死である。私はそれほど強くもないし、グロテスクなのは好きじゃないからひたすら敵前逃亡で行こうと思つ。

「しかしそれを粘土で補つたりはしません。棺桶に入れたまま教会の棺桶に入れられ、生き返るまで安置されるだけです。一日に一度くらいの頻度で祭司が祈りを捧げますが生贊はありません」

ついた。

「勇者の傷が八割直ると目が覚めると言われています」

やうに思ひ、シミシミは一つ咳払いをした。

「ただ、我々モンスターと違つて勇者の復活の条件は分かつていません。ごく稀に復活できず朽ちていく勇者もいるそうですが、何が原因なのかというのを確定されていない状況です」

二十一

一ま、命は大事にしましょん！」とだね

「その通りです。無謀な挑戦も結構ですが、死ぬほどの苦しみを味わいたくないのならば自重することです」

その言葉に勇者サマはすっかり怯えてしまつたようで、私の方をちらちらと見てゐる。このガキ、さつきまで散々好き勝手してのびのびしてたくせに今頃怯え出すか普通。この勇者サマ、もしかしなくとも底抜けのおバカさんだ。最初から知つてたけど。

私はため息をついた。

一 私に子供を殺す趣味はない

その瞬間、勇者サムがはっと表情を明るくした。まるで犬のよう

な反応をされ 悪戯心が湧いた

「でも子供をいじめる趣味はある」

途端に勇者サマが震え上がった。何これ面白い。

「生意気なガキにキツイお灸据えるって楽しいよねー……」

私が不気味に笑うと、勇者サマがさつとジョシュの後ろに隠れた。だからなんで勇者サマはそんなにうちの部下に頼るんだ。そいつら私の部下だから。魔王の部下だから。

勇者サマを見下ろしたジョシュは私の方を見ると大きなため息をついた。

「魔王様、今年おいくつでしたつけ？　ああ、数えることもできないくらい幼くていらっしゃるんですか？　それとも若者をいじめることにしか生き甲斐を見いだせないような高齢になられたんですか？」

「この性悪嫌味野郎め。

「魔王ならこれくらい性格悪いのが当たり前でしうが！」

私が膨れて言えば、ジョシュは鼻で笑つた。

「まだ幼い子供にこいつ意地悪するのは性格悪い、ですか？　それを言うなら子供じみた性格でしう。魔王様は語学の練習もする必要があるかもしだせませんね」

ジョシュと私の間にバチバチと火花が散る。私とジョシュとの一時間に及ぶ舌戦の始まりだった。

ちなみにそもそもその原因だつた勇者サマはミルクちゃんがお茶とお菓子を持ってきたのでそちらへ行ってくつろいでいた。

私がそのことに気付いたのは勇者サマが一人分のお菓子をすり食べてしまつたあとである。

第6戦 新たなる軽めの試練（前書き）

今回は短めです。

第6戦 新たなる軽めの試練

陰険眼鏡との戦いの幕が明けてから一週間。予想外に勇者サマは毎日やつてくる。そして私のおやつは日に日に減っていく。そのうち私のおやつがなくなるんじゃないかと心配だ。

さて、ある程度予想していたがついにこの時がやつてきた。

「せんせー、勉強ばっかりでつまんない！ もっとどびばーっとレベル上げたりとかかっけーのはないの？」

子供が学校でもないのに一週間も座学で我慢できりや上等だろ？ 私だつたら三日と経たずにトンズラしてる。

ジョシユは眼鏡を押し上げながら答える。

「勉強も修行の一種です。確実に経験値は上がっていますし、能力も上がっていますよ」

「やー、でもそろそろ体を動かすのもいいんじゃない？」

勇者サマの肩を持つわけではないが、私も言つ。

ぶつちやけて言うならば、一週間も座学に付き合わされてかなり疲れているのだ。他でもない私が。居眠りしたら鞭で叩かれるし、答えを間違えば冷たい目で見られる上にお小言を食らう。いや、教えてもらつてる立ち場としちゃ当たり前なんだけどさ。でも私は勉強したいなどと言つた覚えは一度もない。

そして何より面倒くさいのだ。だつて私は元々宵つ張りの朝寝坊、自分がしたいことだけをする魔王。机に向かつてノート取つてゐる奴なんて魔王じやない。

どうせやるなら勇者サマが実技でひいひい言つてゐるのをソファにでも寝転がりながら腹を抱えて笑いながら見ていたいのだ。だつて私魔王だし。

「若いうちは体も鍛えやすいくて言つしわ」

私が言えば、ジョシュは実に胡散臭そうに私を見た。

「ものは言いよづですね」

どうやら私の思惑はすっかりお見通しらし。これだから頭のいい奴は。

しばらく考えていたようだが、やがてジョシュは厭味つたらしく咳払いをした。ちつ、陰険な奴だ。ハゲる。

「とはいえ、お一人の言つことも一理あります。そろそろ実践も混ぜた方がいいでしょう」

その言葉に勇者サマが小躍りする。

部屋の後ろにはセーターやミルクちゃんたちがいてその様子をぼのぼのと眺めている。どこの授業参観だ。お前ら仕事しき仕事。「ただ仕込みが必要なので、実践は明日からです。今日の内に準備しておきますよ、魔王様が」

「…………は？」

私がぽかんと口を開けると、ジョシュは無表情に私の目を見た。

「言いだしつへは魔王様でしょ？」

いや勇者サマだらう。

「よろしくな、魔王！」

魔王によろしく頼んでいいのか、それでいいのか勇者サマ。

翌日に備えて勇者サマは早めに帰らせた。私とジョシュは簡単な打ち合わせをして、勇者サマの実技に備える。といつても、ジョシュの出した企画が面白そつたのでそのまま私がお膳立てしだけだ。

少しばかり余所の人に協力を仰ぐ必要があつたため、方々に文を飛ばす。もともと私が勇者サマを育成しているというのは周辺の村にはすっかり広がつていて相手も事情を理解するのが早く、ノリノリで私の要請を引き受けてくれた。今日もテスハは平和だ。

そして私は仕上げの仕事、モンスター合成を始めた。といつても、

今回は一から作るわけではない。既存のモンスターに魔力をぶち込み、バージョンアップを図るのだ。普通に合成するよりは楽である。

細工は流々、準備万端整つたところで私は眠りについた。明日は長い一日になりそうだ。

翌日、意氣揚々と勇者サマがやつてきた。

そんな彼にジョシュはいくつかのアイテムを『』えた。

一つは手紙、一つは木の棒（武器）、もう一つは瓶に入った酒。おまけとばかりに地図も渡している。

「これをアリギ村のヤトさんに届けてください」

てつくり「おつかいかよ！」とか勇者サマから突っ込みが入るかと思つたが、幸いにして勇者サマは他のことに気をとられたらしく突っ込みはなかつた。勇者サマはこなにさかばかり不安そうにジョシュの顔を見上げている。

「アリギ村？ バークーロじやなくて？」

「それじゃああまり意味がありませんからね」と、ジョシュはうなづく。

「」で、ツキバ村周辺の地理関係について説明しよう。

私の支配しているツキバ村の周囲には三つの村と一つの町がある。それらがツキバ村にそれぞれ接しているのだ。

バークー口というのは勇者サマの住んでいる隣村のことだ。山に囲まれたツキバ村だが、バークー口までの道はしつかり整備されており、人やモノの行き来も一番活発である。他の村に行くのに比べて道がなだらかというのも、また歴代の村長同士の仲がいいのも理由だ。当代のうちの村長とバークー口のカミウスも仲がいい。ハゲ同士気が合うのだろう。ツキバ村で隣村といえば、このバークー口のことを指す。

そして隣村とツキバ村の両方に接しているのがアリギ村である。こちらはうちと違つて渓谷や岩山の多い地域だ。二つの村をつなぐ道はもともとの険しさもあり、少しばかり荒れている。言つなれば勇者サマの家からうちに来るまでは散歩道、うちからアリギ村への道は登山道なのだ。ちなみに私は徒步では絶対行かない。筋肉痛になるから。

たしか隣村とアリギ村は隣り合つてはいるが、行き来は少ないはずである。こちらもやはり間に険しい渓谷が横たわっているのだ。二つの村をつなげているのは古い橋である。両村の子供たちが勇気を試すためにその橋を一人で渡るというのだから、どれほどボロいか分かるというものだ。

まあそういうわけで、いかにも臆病っぽい勇者サマがアリギ村に何度も行つているとは思えない。つまり、勇者サマにとつては慣れない不安な土地というわけだ。

「アリギ村までの道は体を鍛えるにはもつてこいですし、そろそろこの薬用酒を届けなければならないんですよ」

そう言ってジョシュは勇者サマの持つ酒瓶に視線を落とした。魔

王印の薬用酒である。

「薬用酒？ 酒が薬になるのか？」

勇者サマは不思議そうに首を傾げた。

酒について説明をさせるなら私をおいて他にいまい。私が意気揚々と説明を始めようとすると、傍にいたセーターが慌てて口をふさいだ。

「じり、不敬だぞ。

「……魔王様が酒のことを語ると田が暮れる、と他のモンスターから聞いています。ここは私が説明しましょう」

やれやれといった調子で言うジョシュにカチンと来たが、しかし実際酒についてモンスターに対して語りに語つて夜が明けたことがあるので今回だけは大人しく引き下がつた。

「薬用酒とは薬草をつけた酒です。いくつかの薬草を配合することで、それなりの効果が得られます。テスハではまだまだ主流ではありますせんが、他の星ではそれなりに使われています」

その言葉に勇者サマは田を丸くした。

「まずくないか？」

「それなりに飲める味ですよ」

何がそれなりだ。私の薬用酒はテスハ一うまいつつーの！ 不満たらたらではあるが、未だにセーターが私の口をふさいでいるので発言することは叶わなかつた。

その後、勇者サマはいくつかの注意をジョシュから受けアリギ村へと向かつた。

ちなみにジョシュからの注意と云うのは、

一つ、知らない人にはお菓子をあげると言われてもついて行かないこと

一つ、危険な場所には近付かないこと

一つ、寄り道はしないこと

一つ、野犬には気をつけること

どう見ても普通に子供のおつかいの時の注意事項だ。

が、お子様勇者サマにはちょうどいい。彼はモンスターに見送られながらさしたる疑問もなく魔王城（つてほど豪華でもないけど）を出発していったのだった。

第6戦 新たなる軽めの試練（後書き）

次回はなーにがでーきーるーかなーの話です。

第7戦 行きはよいよい

勇者サマが出発した後、私は部屋のソファにふんぞり返っていた。ソファの前には大きめのローテーブルが置かれており、その上には丸い水晶が鎮座している。紫色のベルベットの土台に設置されたそれはどこか占い師が使うそれを連想させる。まあ私がそう作られたのだけ。こういうのは雰囲気が大事だと思うのだ。モンスターたちの共感は得られなかつたが。

さて、現在その水晶から映像が浮かび上がっている状態である。私が両手を広げたくらいの大画面のそれには、モンスター特製のお弁当と魔王印の薬用酒の入つた袋を背負つた勇者サマの様子が映し出されている。

実はこれ、今水晶の隣りに座つてている小さな鳥型モンスターの特殊能力なのである。

この鳥型モンスター、私はカメと呼んでいる。鳴き声が「カメー カメカメー」というへんてこな鳴き声だからだ。当初カメカメと呼んでいたが何度も舌を噛んだので省略することにした。

このカメというモンスター、変わつた習性がある。オスがメスに求愛するときに自分の見た映像と音声を思念で送るというものだ。一番メスが気に入つたものを送つたオスが求愛に成功する。で、その習性を利用したのがこの遠隔映像投射機というわけだ。モンスターのオスを目的地に飛ばし映像をリアルタイムに送信させ、メスに受信させる。メスが受信した映像を魔力を込めた水晶を媒介にして、外部からも分かるように投射する。これにより遠隔地

の映像でもリアルタイムで見ることができるのだ。以前のままだとさほど力が強くなく、近い距離でしか映像を飛ばすことができなかつたが、今回私が強化したことにより中継できる距離を延ばすことができた。またこの水晶は別のモンスターの加工により、映像を記録しておくことができる。

ちなみに実験と称して私の朝起きてからの行動を記録されていたため（そして油断してだらけていたため）ジョシュにかなり嫌味を言われた。どのカメラが記録したか知らないが、覚えとけよ。

さて、私は田の前の幻像に田を向けた。まだ出発したばかりといふこともあって、この山すら下りていらない状況のようだ。普段見慣れた景色のはずだが、視点が違うので僅かに新鮮である。

この時点では勇者サマも元気である。さすがに毎日通つてているだけあって、下りる足取りに迷いはない。

勇者サマの足がどれくらいかは知らないが、アリギ村への分かれ道まで行くのにあと一時間くらいはかかるだろう。とりあえずお菓子でも食べておくか。

私はモンスターに言いつけようと振り返り、絶句した。

私は居間のソファに座っていたのだが、その背後にはびっしりと、そりやもう天井から床までびっしりとモンスターたちがいた。正直キモい。

「……あんたたち、仕事はどうしたの」

なんだろう、頭痛がする。背後にひしめいているモンスターはメスだけじゃなかった。勇者サマを可愛がっているモンスター全員が狭い室内に集合しているんじゃないだろうかという状況だ。

勇者サマは勇者の癖にモンスター受けが良かつた。魔王である私にボ「ボ」（というほどひどくはないと私は主張する）にされてもジョシュに叱られてもめげずに通りてきていることや、（私以外には）素直なところなどが気に入られているようだ。勇者サマが来て以来モンスターからのお小言が増えたりおやつが減った私としては勇者サマは間違いなく疫病神である。

「ああ、仕事なら今朝夜が明ける前からみんなで総動員して済ませていたようですよ」

ジョシュがしれっと告げる。私はさらに頭痛がひどくなつた。
まあもともと仕事なんて大したものもないんだけどや。それでも
釈然としない気分になるのはなんだろう。

とにかく、私は深くは気にしないことにした。近くにいたモンスターにお茶とお菓子を持ってくるよう言つ。
お茶が来たことを確認すると、私は少し早田のティータイムへと
しゃれこんだのである。

流れる映像を見ながらジョシュは何かしら手に持った手帳に書き
つけている。

「ジョシュ、あんたそれ何書いてるの？」

私が興味本位で覗きこもうとしたが、ジョシュはその前にそれを
閉じてしまった。

「今後の参考に気付いたことを書いています」

「なんで隠すのよ」

「知ったところで魔王様は下らないことにしか使わないでしょう？」

図星ではあるが、指摘されて一番腹が立つのが真実というものである。

「勇者サマの教育任されたのは私なんだから私にも見る権利ある
でしようが」

「駄目です」

くそう、けちんばめ。こうなつたら実力行使だ。

私はジョシュの持つていた手帳を掴むと自分の方に引き寄せた。

ジョシュも負けずと自分の方へと引き寄せよる。

ぐーたら魔王と教育係の勝負は、お互い筋力がないため拮抗した。五秒も引っ張り合いをすればお互い腕が震えている駄目っぷりである。体を鍛えよう。明日から。

なにはともあれお互い負けず嫌いなため諦めるところとはしなかつた。五十歩百歩の勝負は背後にいるモンスターたちから「画面が見えないからどうしてほしい」という苦情が出るまで続けられたのだった。

なんか最近部下に軽んじられてる気がする。

さて、ジョシュとの攻防によつていらない汗をかいた私はお茶を淹れなおしてもらい、再びソファに身を沈めた。

疲れた。無駄に疲れた。

画面の中の勇者サマは意氣揚々として歩を進めていく。アリギ村まで行つて帰つて、子供の足でも朝に出れば夕方までには何とか帰つてこれるはずだ。順当にいけば、の話だが。さて、勇者サマは一体どれくらいで戻つてこれるだらうか？

勇者サマが出発してから三時間、勇者サマが村の境に近付いた時のことだった。

画面に映り込んだ影に私は首をひねつた。

「2力めに切り替えて」

一応念のためカメは三匹用意してある。それぞれ1カメ2カメ3カメと区別してあるのだ。

私が目の前のカメに言つと、画面に流れる映像が変わる。そしてそこに映つたものに頭を抱えたくなつた。

元気に歩く勇者サマの背後からコソコソと尾行している影、どう見てもうちのモンスター、セーター（五十一号）とミルクちゃんだ。彼女たちはモンスターの中でも特に勇者サマに対する過保護が過ぎるからうちにいるようこと釘をしておいたはずなのが。

というか、出発後にちゃんといふかどうか確かめたのに、なぜ？私は背後を振り返つてそれまでいると思っていた二人を探し、頭の痛い事実に気付いた。どちらも良く似たモンスターを替え玉にしていたのである。替え玉を務めているモンスターたちは冷や汗を流していた。どうせ彼女たちの鬼気迫る説得に負けたのだろう。

「ほんつと過保護！」

私は頭を抱えた。

勇者サマが分かれ道で足を止める。その背後からセーターとミルクちゃんがハラハラした様子で見守つている。

勇者サマが正しい道を選んで歩き出すと、あからさまにホツとした様子で再びついて行く。

時には勇者サマに先回りして悪戯された看板を直したりもしていた。

勇者サマが倒木に腰かけて水筒の水を飲んでいるのを影からそつと見守つたりもする。

勇者サマが北へ行けばついて行き、南に引き返せば慌てて戻る。小さな子供の後をつけていく様はどう見ても不審人物である。モンスターだけど。

駄目だこいつら、早くなんとかしないと。

カメを使って様子を見ている私が人のことを言つのもなんだが、この一人はどうしようもない。

が、私の背後で見守つてるモンスターたちだつて似たようなもんで、勇者サマの行動に一喜一憂してゐしもう本当にどうしようもない。

「帰つたら絶対説教食らわせてやる……」

腐つても魔王、あいつらの上司だ。可愛い子には旅をさせよといふし、試練を乗り越えてこそ強くなるつてもんである。やこんどこをしつかりと分からせないとね。

途中で蝶々を追いかけて道を外れるというハプニングがあつたものの、セーターが即席で作つた看板によつて事なきを得た。ぶつちやけそこで迷子になつて勇者サマが泣きだしたら面白かつたのにと思つ。それこそいい経験になると思うのだが、それをうつかりこぼしたらやはりモンスターたちから冷たい目で見られた。

さて、畠を少し回つたひたすら勇者サマは無事アリギ村に着くことができた。

勇者サマは村の入り口を過ぎ、現在は一本道を歩いてゐる。ここまでくればもう田的であるヤードの家までもつ一息である。やれやれと息をついていた私だが、

「よっ、坊主。おつかいか?」

画面に映った路傍の石に腰かけたジジイを見て、飲んでいたお茶を勢いよく噴き出した。

「そりだぞ! ヤトさんの家まで行くんだ!」

声を掛けられた勇者サマは意気揚々と答えていた。

「やうかそりか、偉いなあ、坊主。ほら、じいちゃんがアメちゃんやうわ!」

やうに言ひヒジジイが差し出すのを勇者サマは嬉々として受け取つてゐる。

あの馬鹿勇者! 知らない人にもの貰つちやいけないってジヨシユが注意したらどうが!

つていうか人ですらないんだけどそいつは...

私は画面に映るジジイを睨みつけながら思いつきり叫んだ。

「手を出すなって言つたのにあのジジイ!」

画面の向ひで好々爺然として勇者サマと相対してるのは私もよく知つてゐる、アリギ村の魔王だったのである。

第7戦 行われぬこと（後書き）

こまわりですが、魔王は女の子の割に言葉遣いが乱暴です。

第8戦 見守る魔王、手を出す魔王

魔王といつのは別に超レアな存在というわけではない。ぶつちやけて言つと、魔王試験に合格さえすれば誰でも魔王になれるお手軽な職業だ。しかも辞めるときは魔王連盟にちよろつと辞表みたいなを書いて出せばいいというかなりいい加減な仕組みである。それに対しても勇者という職業は自分の意志ではないし辞められないというから大概ひどい職業だ。

まあそもそも魔王試験を受けに行ってなおかつ合格するというのが難しいらしいのだがそこはそれ。

とかく星の数ほどとはいかないが、魔王の数もそれなりにいるといろんな魔王がいるわけだ。

「ほほほ、ツキバ村から来たんか。難儀じやつたらう

一見单なるひょろつこい老人に見えるこのジジイは、こつ見えて魔王連盟全体から見てもかなりの実力を持つ魔王なのである。このジジイが本気になれば村の一つや一つ、簡単に消せるぐらいレベルの高い魔王なのだ。

「全然！ 僕、強いから大丈夫だ！」

胸を張つて言う勇者サマは、自分が誰に向かつて話しているか気付いていないようだ。人は見た目で判断すんなつて教わらなかつたのかこの勇者サマは。つていうか勇者なんだから相手が魔王だつて気付け。

「そりがそりが、将来が楽しみじやなあ

二口二口とした顔で言われて、勇者サマは照れたようだつた。僅かに顔を赤くして、しきりに頭をかいている。

「魔王様、あの方は？」

ジョシュが私に尋ねる。そういえば、ジョシュを周辺の魔王にお披露目してなかつたな。連日勉強漬けだつたし。

「ああ見えて隣村の魔王だよ。若い者をからかうことこそ年寄りの至上の娛樂つつて、ショッちゅう人間に擬態しちゃあちこち徘徊してんの」

むしろ人間の姿の方が本性じゃないのかと時々思つてしまふくらい人間の姿が板についている。

「…………ボケてませんよね？」

「若干色ボケ」

ボンキユツボンな美人が好きだと豪語していたジジイである。一番最初に手土産に酒を持つて挨拶に行つたら美人な姉ちゃん連れてこんかいとか抜かしたジジイである。思わず勢いで殴つてしまい青くなつたのだが、なぜかそのまま氣に入られて今に至る。いやあ、生きてて良かつた。

「魔王様は事前に連絡を入れ忘れたのですか？」

ジョシュが非難めいた視線を向けてくる。失礼な。

「ちゃんとジジイには手紙送つたつてば。ちょっとくらそつちに勇者サマがあつかいに行くけど、邪魔しないでねつて」
しばらく考え込んでいたジョシュだが、

「アリギ村の魔王をされている方は若い人をからかうのが娯楽なんですね？」

「ただけど？」

私が答えると、ジョシュは確認するよつに呟く。

「…………なら、邪魔するなと言つたら邪魔するに決まつてると思いませんか？」

あ。

しまった、盲点だった。つていうかよく考えたら当り前である。あのジジイが素直にこちらの要求を飲んだことがいまだかつてあつただろ？いやない。ケーキが食べたいと言つたら石の「」とく硬いせんべいを用意するようなジジイである。手を出すなと言えば手を出すに決まつてゐる。大方こちらが勇者サマの様子を伺つてゐるのもお見通しなのだろ？

しまった、失敗だ。

頭を抱えている私を見て、ジョシュは小さくため息をついた。
「まあすでに出会つてしまつたものは仕方がありません。あとは彼がどれくらい仕事を全うできるかです」
それが一番心配なんだけどね！

「の、坊主。ちよつとじこちやんとオセロをせんか。ちよつとじた戯れに、の？」

何故かジジイは勇者サマにオセロの勝負を挑んでゐる。何がちよつとした戯れだ。私は舌打ちをした。

「オセロの一局ぐらいは問題ないのでは？」
ジョシュが首を傾げてゐる。そう思つてゐるならジョシュ、周りにいるモンスターに聞いてみたらどうだ。ここにひづらオセロという言葉にうんざりした表情を見せてゐるが。

「あのジジイとオセロするなら一時間はかかるのよ……」

私はげつそりとした気分になつた。

「単なるババ抜きですら、あのジジイとやつたら一回勝負するだけ

で小一時間かかるんだから「

後ろにいるモンスターたちがつらつらといつぱりしてくる。

「しかも考え込むくせにめちゃくちゃ弱くてさー」

オセロで囚虜取らせたのに私が勝つちやつたときにはこいつそ感心してしまつたものだ。

その上、

「弱いくせに負けず嫌いで、負けてもすぐに勝負挑んでくるんだよねー」

なんか背後で魔王様もそこは同類でしょうとか言つてゐるモンスターがいたのでもちらを見ずに攻撃魔法（威力的にはチョーク投げつけたくらい）を放つてみた。本当のことなのにひどいとか言つてゐるが知つたこいつちやない。

「とにかく、勇者サマが勝負を受けちゃつたら口があるひちに帰つてこれるか怪しくなるつてことー」

その辺よく分かつてゐるモンスターたち、勇者サマの様子を固唾をのんで見守つてゐる。

さて、ジジイの提案に首をひねつて考え込んでいた勇者サマだつたが、

「うーん、今は止めとく

思いのほかしつぱりと断つた。

「残念じやのう。なんでじや?」

ジジイがややしょんぼりした風に言つ。これはジジイのお得意の演技である。ちょっと弱つた老人を裝えば優しくされるといつことを知つてゐるのだ。なんとも嫌なジジイだ。

勇者サマはジジイの様子に罪悪感を感じていつたが、それでも意見を変えなかつた。

「僕、ヤトさんに薬用酒届けなきゃいけないんだ。これ、酒なんだけど薬なんだつて。もつすぐなくなりそつだから届けなきゃいけないんだ」

勇者サマはぐっと拳を握った。

「薬つてす、」く大事だろ？ なくなつたら怖いからな！ だから僕はヤトさんには届けなきやこけないんだ！」

おやおや、意外なことに勇者サマは使命感に燃えていたようだ。勇者サマの雄姿を見て、モンスターの一部が感激の涙を流している。お前ら涙腺弱すぎるだらう。さらに一部では勇者サマに向けて拍手喝采が送りしている。どうやらモンスターの間で勇者サマの株が急上昇しているようだ。

カメが映した映像の端っこにいるセーター や ミルク や んも田元をねぐつていた。ここからはマジで勇者サマに甘すぎると。勇者サマに向けるやの甘さを半分でいいから私に分けてくれ。思いつきりだらけるから。

……もしかしてそういう考え方をするから私には甘くしてくれないんだろうか。

「そうかそうか。あい分かつた。それじゃあ気をつけ行くなじやぞ」

ジジイの言葉に思わず私は田を丸くした。こつもあつせつジジイが勇者サマを解放するとは思つてなかつたのだ。何か裏があるんじやないだらうか。

「うん！ ありがとなじいちゃん！ また会つたらオセロじょうな！」

勇者サマは元気に言つと、ずんずん歩き出した。

ジジイはそれを見送りながら手を振つている。勇者サマが見えなくなる直前に振りかえり、大きく手を振つていた。

「……わい」

勇者サマが見えなくなるとジジイが小さく呟いた。小さく手を動かしている。

するとジジイの前に円形の亜空間が現れた。直後に私の目の前にも同じものが現れる。通信魔法である。

「出歯龜とは、嬢ちゃんは趣味が変わったんかの？」

亜空間からジジイの声が流れ出る。映像を見てみれば、ジジイは一匹だけ残した3力メに田線を叩わせていた。予想はしていたが、すっかりはれているようだ。

「事故が起きても対処できるように見守ってるのー。」

私が亜空間に向かつて言えば、ジジイはほほほと笑った。

「たかだか隣村に行くだけのおつかいに傍づきのモンスター一体に加えて空の魔王直々に見守るたあ、随分と期待された勇者じやのう？」

「モンスターは勝手についていったの。まあ私は期待してゐるけや期待してるけどね。多分ジジイと同じ意味合いで」

ジジイは再び笑つた。

「ここに来るまでに道しるべを入れ替えたり落とし穴を仕掛けたつちゅうのに全部直しあつてからに。楽しみが減つたわい。つまらんのつ。」

「ああ……ちひきルクちゃんが落ちた落とし穴はそつこつ……」

なんだが頭痛がするよ、お母さん。

セーターたちが奮闘しなかつたら今頃は到着すらしてなかつたわけで、そういう面で見たら彼女らの独断専行が功を奏したわけだが、そもそもの原因が隣村の魔王。つくづく勇者サマは魔王サイドに縁がある気がする。まあ勇者だからしうつがないんだけども。

「つてか、邪魔するなつて言つたじやん」

「山あり谷ありの方が面白いじゃんつ~」

それは同意見なのだが、フォローする方の身にもなつて欲しい。

フォローしたのセーターたちだけビ。

「まあ嬢ちゃんのところのモンスターの慌てつぱりも見れたからよしとするかの」

つづくやなジジイである。どこから見ていたんだか。

「今度遊びにいくから、ちやんと準備してくんだじやよ」

「はいはい。適当に用意させとく」

私が脱力しながら言えば、ジジイがポンと手を打った。

「そうそう、大事なことを忘れとつたわい」

「何？」

私が画面に目をやると、ジジイはいつになく真剣な顔をしていた。

私だけでなく、周囲にいるモンスターの顔も引き締まる。

「嬢ちゃんが今使つておるモンスターのことじや。遠くの景色が見れるんじやうう。いくらかうちに寄こしてくれんかのう」

あれ、なんかろくでもない予感がする。

「なんで？」

なるべく感情を消して言うと、ジジイは一ぐつと笑つた。

「そんなもん、若い娘の湯あみを見るために決まつとるじやううがまあ予想はしてたけど、言わせてもらおう」

「！」のスケベジジイが！

さて、ジジイとの通信を無理やり終了した私は映像を1カメに切

り替えた。

私とジジイが世にもくだらない話をしている間にもしつかり進んでいたらしく、ちょうどヤトの家の扉を叩くところだった。

「ごめんください！」

元気よく扉を叩いている。一生懸命背伸びしながらノックカーを使っている様子を見たメスモンスターの一部が身もだえしていた。大丈夫かな、うちのモンスター。

しばしの沈黙ののち、軽い足音が戸口に近付いてきた。

「はい、どちら様？」

「バークーのオキだ！ 薬用酒届けに来たぞ」
年上の知らない人の家に行くんだから、敬語ぐらい使つたらどうなんだ勇者さま。まだ子供だからギリギリ許容範囲と言えなくもないが。

勇者さまの元気な返答に扉が開く。

「あらあら、あなたが真央の言つてた勇者様ね。いらっしゃい。遠くまで大変だつたでしょ？」「

「口一口と笑顔で勇者さまを迎えるのは私の友人、ヤトである。

ヤトは私の二つ年下の友人で、このアリギ村で年の離れたお兄さんと一緒に暮らしている。いつも明るい金茶の髪をお下げにしていて、大きな青い瞳と白い肌、そして華奢な体格も相まって、清楚なお嬢さんといった風体だ。事実、ヤトは清楚なお嬢さんである。元来のおつとりした性格に加え、小さいころに両親からしっかりと儀作法を学んだこともあり、気取ったところはないものの上品で、実にお嬢さんらしいお嬢さんだ。

ただ体が少しばかり弱く、村の外に出る機会が少ない。家の外に出ることも少ないくらいだ。

そしてその数少ない外出の機会に道に迷つて行き倒れた私を家に

連れ帰つて介抱してくれた類稀なるお人好しなのである。

ヤトが勇者サマを家の中に招き入れた。

「はい、ヤトさん。届け物だぞ！」

勇者サマは背負つた袋から酒瓶を取り出してヤトに渡す。

「ありがとう、オキ君。ちょうど切れかかつたところなのよ。助かつたわ。ふふ」

「どういたしまして！ 勇者だから当然だ！」

とは言いつつも勇者サマは非常に嬉しそうな表情だ。

「あらあら、偉いわね。今お茶を入れるからちょっとここで座つててね」

ヤトは微笑ましげに勇者サマを見やるとお茶の準備をして部屋の奥に引っ込んだ。

勇者サマは少しばかり緊張した様子で椅子に座つている。

「他のモンスターからは聞いていましたが、魔王様とはすいぶんタイプの違う方ですね」

ジョシュが感心したように言った。

「まあね。私の自慢の友達だし」

「おや、じ自分はヤトさんとは違うタイプだと自覚されてるんですね」

ああもう、なんで私の周りはこう厭味つたらしい奴が多いんだろうか。類は友を呼ぶ？ そんなバカな。

「当り前でしょ。だつて私、魔王だし」

私がそう言つと、ジョシュは大仰なため息をついた。こんなやう

う。

しばらくして、トレイにお茶とお菓子を載せたヤトが戻ってきた。

「お待たせしてごめんなさいね、オキ君。退屈じゃなかつた？」

「全然！ 僕、ちゃんと待つてたぞ！」

「あらあら、偉いわねえ」

胸を張る勇者サマを見てヤトは微笑ましげに笑つた。

「オキ君はバークー口の子なんでしょう？ アリギ村にはあまり来ないんじやない？」

「うん。いつもはツキバ村にしか行かないんだ。魔王の城に行つてやつてるからな！」

誰も来てくれ頼んでないぞこのガキンチョめ。

「そうなの。真央のところにいくまで山を登るから大変でしょう？ お茶を飲みながらの会話で、ヤトはいつも以上におつとりしているようだ。

勇者サマが首を傾げた。

「そういえばさつきも言つてたけど、真央つて誰だ？」

ヤトは目を丸くした。

「真央は真央よ。ツキバ村の魔王の。オキ君も知つてるでしょう？ すると今度は勇者サマが目を丸くした。

「魔王つて、空の魔王つて名前じやないのか？」

忘れられがちだが、私の名前は空の魔王ではなく空野真央である。しかし残念なことに私の本名を知つてゐる人の数は少なく、さらにおつなら本名で呼んでくれる人は数えるほどしかいない。

まあ、魔王様と呼ばれようと真央様と呼ばれようと大差はないからもう気にしないけど。

「それは通称ね。魔王になつた時に大々的に宣伝しちやつたからそつちの方が有名なのよね」

ヤトは「じゅうじゅう」と笑う。私にどうちや笑い事でもないのだが。未だに「よつ、空の魔王」とか挨拶されるこっちの身にもなつて欲しいもんだ。

その後も他愛のない世間話を「十分ほどしていた」一人だが、帰りの時間もあるだうと「言つことでお開きになつた。

「これ、お土産にどうぞ。みんなで食べてね」

そう言つてヤトはクッキーらしきものが入つた袋を勇者サマに渡した。

「それからこつちは帰りにお腹がすいたら食べてね」

そう言つて、簡易の携帯食糧らしきものを手渡していく。ヤトがつくるお菓子や携帯食糧つて美味しいんだよね。ちょっとうれしい。

「ヤトさん、ありがとな！」

元気よくお礼を言つてから、勇者サマがもじもじとしだす。なんだ、トイレにでも行きたくなつたか？

「……あ、あんな。また僕、ここに来てもいいか？」

先ほどまでは打つて変わつて自信なさげな態度に私は目を瞬かせた。これは一体どうしたことか。もしかして勇者サマ初恋か、初恋なのか。もしそうなら私の全精力を傾けて全力で妨害するぞ。

「ええ、いつでも遊びに来て頂戴」

相変わらずの笑顔でヤトが言つ。そんなこと言つて勇者サマが本気で毎日押しかけたらどうしよう。殴つてでも止めるか。ヤトの返答に勇者サマは顔を明るくさせた。

「うん、来る！ 絶対に来るからな！」

ヤトの家を出る勇者サマを見ながら私はため息をついた。
これで今回の勇者サマの任務は完了したわけだが、家に帰るまで
が任務である。しかも勇者サマがいるのはあのジジイのテリトリー。
ちゃんと帰つてこれるかはなはだ不安だ。
というか、嫌な予感しかしない。

その予感が当たつていると知るのは、それからわずか一時間後のことだつたりする。

魔王の手記（前書き）

勇者サマの登場しない番外編の話です。

魔王の手記

私が勇者サマの教育係を引き受けたと知ったトウェイから、嫌がらせじゃないかと思つくらい紙や本を貰つた。

せつかくなのでこれを機会に、思いつくままにひづつた手記というものを書いてみようと思つ。

日記にしようかとも考えただけど、絶対三日で飽きると断言できる。だから手記だ。思いついた時にだけ書く。

先日ツキバ村の方から新しく出来たお酒が献上された。味見をしてみたが、なかなかに美味しい。ただもう少し寝かせた方がまろやかになりそうだ。

今年は果物の出来が良かつたらしく、果実酒も葡萄酒もどちらも美味しい。私としては大満足だ。このまま酒造りが盛んになつてくれたらよいと思つ。

何を隠そう私の生まれ故郷は酒の名産地だつた。しかも純粋な酒でなく、果実酒や薬用酒、その他諸々とにかく酒を加工しては楽しむのもかなり一般的だつた。

が、なんとテスハはそいつた酒を楽しむ文化がない！ 葡萄酒以外の酒は飲まないと聞いた時はめまいがしたものだ。

私の生まれ育つた惑星シークでは子供が十歳になると成長の祝い

として酒を飲み、それ以降自由に飲めるようになる。うちは貧乏だつたが、それでもお祭りや祝い事のときには何かしらお酒を飲んだものである。

リンゴ酒も桃酒もどぶろくも麦酒も飲めないなんて！ と一時は絶望した私だったが、魔王の権限を活用して村の人に掛け合いで酒を作るようになした。で、一般的な嗜好品としての酒造りは認められないが、祭事や薬用としての酒ならば作つてもよいと言われて今に至る。あとは私への献上用。しかし現時点では技術的にも人手としても量産は難しいということもあり、生産量はわずかである。もしこれで大量生産か、もしくは良質のものが出来るようになればツキバ村の名物となると思う。

現在ではセーターの作った果実で果実酒を、それでもともと薬草の調合を得意としたモンスターと協力して薬用酒を村の職人が作っているのだ。ヤトに持つていく薬用酒もこれだつたりする。

そうそう、村の職人と言えば、村一番の酒造の腕の持ち主であるココナ爺が最近後継者育成に力を入れ始めたそうだ。ココナ爺の後継者はヘンファーとかいう気の抜けそうな名前の十代半ばの少年である。

そのヘンファーが先日泣きべそをかきながらちに相談に来た。ココナ爺についていけないのだという。

そんなに指導が厳しいのかと同情していたのだが、どうもそうではないらしい。ヘンファーは大真面目な顔で言つたのだ。モンスターの言語を分かるようにはビリじたらいいのか、と。

モンスターの言語と一口に言つても、実に多種多様である。動物

の鳴き声と同じようなもの。発声の器官に違があるから発する言語も違う。同じ意味の言葉でも「にゃー」だの「くるっくー」だの「もーー」だと種族によつて異なるのだ。ただ言語は違えどもモンスター間でのかなり正確な意思疎通は可能である。その辺はフイーリングだとしか言いようがない。魔王や一部の勇者、モンスター使いなどもフイーリングでモンスターの言葉が理解できる。

そう言えば、世の中には偏屈な人間がいて、モンスターの種族ごとに違う言語を解読して意志疎通を図れる人間がいるのだと。モンスター爺さんだったか婆さんだったか忘れたが、ご苦労なことである。その労力を魔物使いになるために使つたら手っ取り早かつたのではないかと思う。まああの職業は才能が物を言つらしにけれど。

とにかく、一般人がモンスター言語を理解しようなんて無理な話だ。身ぶり手ぶりでなんとか理解してもらつしかない。幸いにして酒担当のモンスターたちはボディーランゲージが得意な連中である。

私はヘンファーにそう話したのだが、彼は実に悲壮な表情をしていた。しまいには泣き出してしまい、お茶を替えに来たモンスターに私が冷たい目で見られた。泣かしたのは私じゃないのに。全く、あいつらときたら私のことを弱い者いじめする魔王だと思つてゐるに違いない。

それはさておき、このままじゃ埒が明かないと思った私は村の酒造の様子を見に行くことにした。なんといつても後継者君に逃げられては今後の私の楽しい酒ライフが遠ざかってしまう。結構重要な問題だったのだ。

村の酒造現場を見学に行って、ヘンファーの言葉の意味が分かった。

「だから！ 配合は1・1・3の方がいいって言ってんだろーがバーロイ！」

「！」

「む……そりやたしかにそうだが、前の通りにやつたつて同じにしかならねえじやねえか」

「！」

「しかし今回は前に比べて純度の高いもんを使ってんだからよお、量も多いしつた冒険する方がいいんじやねえか？」

「……」

「よし、じゃあ今回の配合は2・1・3でどうだ！」

「！」

「コナ爺と酒担当のセーターががつしりと握手を交わした。どうやら無事話し合つがまとまつたようである。

セーターは一応人型だが、人語は喋れない。一般人からすれば、モニヨモニヨと意味不明の言葉を発しているようにしか聞こえないだろう。

にも関わらず、コナ爺はセーターの言葉を正確に読み取つて会話しているのである。

そりやヘンファーだつてついてけないわ。

「口口ナ爺……」

私は酒に用いる果物の選定をしている口口ナ爺に声をかけた。

「ん？ なんでえ、魔王の嬢ちゃんか。どうしたんでえ？」

御歳七十を超えたはずの老人は私を見てちょっとばかり目を瞠つた。

「いや、あの、口口ナ爺。なんで口口ナ爺はセーターの上に分かるの？」

すると口口ナ爺は心底不思議そうな顔で言ったのだ。

「ああん？ 酒造りに關しちゃお互いい妥協を許さない職人同士だ。分からんでどうする」

「いやいやいや、普通分からないから」

思わず突っ込みを入れてしまつたが、もしかして職人には何かしら相通じるものがあるんだろうか。

が、振り返つてみたらヘンファーが首を横に振つていたので違つぽい。

そこにもう一体モンスターがやつてきた。口つちはスリムな熊みたいな姿のモンスターで、薬草の調合を得意とする。薬用酒担当のモンスターだ。

「…………？」

「おう、そうか。分かつた。口つちが片付いたらすぐここから用意しといてくれ」

「…………？」

「いや、今回は果物が腐る前にせにゃいかんからな。少なめでいい

「…………」

モンスターは私とヘンファーに挨拶をしてから去つていく。これまた完璧な「ミコニケーション」が取れていた。

…………「れはあれだな、うん。

私はヘンファーの肩を叩いて言つ。

「頑張れワカゾー」

大事なのはフィーリングだから。

＊＊＊

その後、本格的にヘンファーが泣き出したのは私のせいではない
と想いたい。

そういえば、酒造りをモンスターに丸投げしてから私が通訳に行
つたことは一度もない。ということは、最初からココナ爺はモンス
ターたちと意思疎通を図れたということか。

職人つてすごいんだなと実感した日だつた。

魔王の手記（後書き）

魔王が珍しく常識人に見える話です。

第9戦 勇者サマ迷走

部屋の中にいるモンスターは息を押し殺していた。
誰も一言も発しない。とてもなく重苦しい空氣だ。

私は重苦しい空氣の発生源であるジョシコを盗み見る。
相変わらずの鉄面皮で表情は変わらないのだが、問題はそれ以外
だ。

私はジョシコの顔を見なによつにして言う。「
「…………ジョシコ、無言で高速竄くわすりするの止めてくれない
？ 惨いから」

その途端、残像が見えるほど高速で動いていたジョシコの足が
止まつた。同時にそれまでジョシコの振動に同調して小刻みに跳ね
ていたローテーブルも動きを止める。先ほどから力チャカチャカとう
るさかつたティーセットも静かになった。

「…………失礼しました。ですが魔王様も先ほどからソファのひじ
掛けを指でうるさいほど叩いていますね。御止しになつては？」
こいつは何か一言私に嫌味を言わないと死ぬ病気にもかかつて
いるのか。

かなりむかつとしたが、自分が無意識に指を動かしていたことを
指摘された気まずさもあり、反論するのを止めた。

先ほどから画面がめまぐるしく入れ替わっている。が、そのビビ
にも勇者サマは映つていない。

「つたぐ。ビビ行つたんだが……！」

もつすぐ日が沈むといつのこと、勇者サマを発見できていない。私
は歯噛みした。

発端は一時間ほど前とかの頃である。

ヤトの家を出た勇者サマはツキバ村の私の家、要するに魔王城に向かつて歩き出した。

お茶を飲んでリフレッシュしたのか、気分上々のようで鼻歌まで歌つていた。それを背後から追いかける一匹のモンスターがほのぼのと見ている。

もしや帰り道にジジイが待ち受けているのではないかと心配していたのだがそんなこともなく、勇者サマは「ぐぐく普通にアリギ村を出ようとしていた。

が、勇者サマがぴたりと足を止めた。はっと道の脇を見ている。

どうかしたのかと私は首をひねる。一カメから3カメに切り替える。

微妙に位置が変わったことで、それまで拾えなかつた音が拾えた。

ぐぬる、ぐるると低い声で動物が唸つているのだ。

さらに2カメに切り替える。道の茂みの奥に爛々と輝く瞳があつた。

これはヤバい。

勇者サマは弾けるように走り出した。途端に茂みから薄汚れた野犬が飛び出して勇者サマを追いかけはじめる。

画面を見ていたモンスターたちが悲鳴を上げた。

ツキバ村や周辺の村で何が一番危険つて野犬が一番危険なのだ。私含めこの一帯の魔王は人間とは不干渉、または共生をモットーとしているため、モンスターに人間を襲わないように指令を出している。

厄介なのは自然動物だ。モンスターの一部や魔王の一部は彼らと意思疎通を図れないこともないのだが、命令に従わせることができない。なぜならば単なる動物だから。自然動物はモンスターよりも知能が低い上に、魔力をほとんど持っていないため魔王独自の強制力が働かないのだ。ある程度モンスターが自然動物を従えさせることはできるのだが、それでもないよりもという程度だ。動物たちは動物同士でのコミュニケーション能力も低い。

そのため、この辺りで人間を襲うものといつたら野生の自然動物なのだ。中でも微妙に人に慣れている野犬の被害が多い。

恐らく勇者サマの持っている食料の匂いに惹かれてきたのだろう。

しかしそんな暢氣に考えている暇はない。

セーターとミルクちゃんが大急ぎで勇者サマを追いかけている。カメたちも急いで彼らの後を追い始めた。

ふと不穏な空気を感じて私は振り返り、ぎょっとした。

「ちょっと、あんたたち、ウルフのせいじゃないんだからハツ当た
りしちゃダメでしょ！」

周囲のモンスターがウルフに白い目を向けていたのだ。ウルフは
ぺたりと耳を伏せている。

「ですが、犬系は彼の管轄ですからねえ」

珍しくジョシュが論理的でないことを言う。

「あの辺はまだアリギ村でしょ。アリギ村の野犬までウルフが手え
出したらジジイに何言われるか分かったもんじゃない」

絶対代償だなんだと何かしらとんでもないものを要求されるに決
まっている。あのジジイは転んでもタダでは起きない、むしろわざ
と転んで法外な慰謝料を要求するジジイなのだ。

というかそもそも、腹を空かした野犬に命令を聞く理性があるか
どうかも謎である。

私がきつぱり言い切ると、ジョシュは小さくため息をついた。ジ
ョシュにしては珍しく、弱ったようなため息だつた。

「それもそうですね。皆さんもそう怖い目で睨まないで上げてくだ
さい」

ジョシュがそう言つと、モンスターたちも氣まずげな様子でウル
フを睨むのを止めた。

……私が言つても睨むの止めなかつたくせに。何、もしかしてジ
ョシュの方が私より偉いの？ 威厳？ 威厳が足りないのか？

まあそんなことはどうでもよくないけど後で考えよつ。

私は画面に目を戻した。

高いところから見下ろしているらしい1カメは、森の中を田茶苦茶に走り回る勇者サマを捉えていた。野犬を撒こうとしているらしいが、相手は犬で勇者サマは人間だ。武器用に持たせた木の棒は勇者サマの腰に刺さっているのだが、本人は忘れているのか逃げるのに夢中で気付かないのか、使っている様子がない。何のために渡したと思っていたんだ、勇者サマ。

それにしても思った以上に勇者サマが素早い。木々のせいで勇者サマの姿がときれどきれにしか見えないのだが、かなりの速さで移動しているようだ。

背後で声援を送るモンスターたちはちょっと黙つてゐる。

2カメ、3カメは頑張つて森の中を飛んでいるようである。切り替えてちょっとばかり見ていたが、画面がぐるぐる回るので途中で気持ち悪くなつてしまつた。モンスターの一部もドロップアウトした奴がいた。

画面がめまぐるしく変わることで気分が悪くなる現象……これはきっと母が昔言つていた『ぽけもん現象』とやらに違いない。地球上にいた結構な人数の子供がこの『ぽけもん現象』にやられたというさもありなん。気持ち悪いことこの上ない。

とりあえず1カメに切り替える。視界がある程度安定したので落ち着いて見ることができた。やれやれだ。

が、そこで予想外のことが起こつた。

勇者サマが一瞬画面から見えなくなつた時だつた。何か妙な音が

したと思つたら勇者サマが消えたのである。

「は？」

間抜けな声が漏れる。予想外過ぎてよく分からなかつた。

慌てて他のカメでも確認してみたが、やはり勇者サマは見当たらぬ。それまで勇者サマを追いかけっていた野犬も途方に暮れたようにつらうつら歩きまわつていた。

鼻の鋭い野犬がすぐそばにいた獲物を見失うだらうか？
木の上に上つたのかと思つたが、周囲にそれらしき木はないし、
カメが映した画像にも勇者サマは見当たらなかつた。

勇者サマは手品のように私達の前から忽然と姿を消したのだった。

それからまず私達はカメの記録の検証をした。勇者サマが最後に確認された時点の記録を再生する。

しかし、

「見事に映つてませんね」

ジヨシユが言うとおり、ものの見事に映つてなかつた。

勇者サマが消える直前の1カメの映像は私達も見ていた。一瞬木の枝の影に入つて見えなくなつたのだ。

2カメは森の中で勇者サマの左翼側にいたはずだが、ちょっと前に飛んでいる最中に木に激突して地面に墜落していた。アホだ。

3カメは勇者サマの右翼側でしつかり見ていたのだが、ほんの刹
那、3カメの視界をひらひらと舞う落ち葉が一瞬視界を遮った後に
は勇者サマは姿を消していた。

私は勇者サマが消えた理由を悟った。
離れたところにいる人物を一瞬で消すとなつたら手段は限られて
いる。

可能性の一つとして消えたように見えただけ、つまり穴に落ちた
とかそういうのがあるが、野犬が見つけないというのも変な話だし、
周囲を探っている力メに見つからないというのはおかしい。
考えられるのは勇者サマが何者かによって転移させられたという
ことだ。とはいって、離れた場所にいる人間を転移させるのは至難の
業だ。はつきり言つてしまえば魔王や高度の魔術師以外不可能だ。

私は通信魔法を使ってジジイにコンタクトを取つた。私はヘタレ
ゆえに未だ通信魔法を長時間維持できないのだが、受信側がその気
ならばつなげ」とは容易だ。

「ジジイ、あんた勇者サマじつはやつたのー?」

私が尋ねると、ジジイはおかしそうに笑つた。

「そんな殺氣立たんでもいいじゃひ。ちよつとばかり助けてやつた
だけじやろ?」

「やつたことは誘拐と紙一重でしうが! 心臓止まるかと思つた
わ!」

ついつい怒鳴つてしまつたのだが、ジジイはますます面白がつて
笑つただけだつた。

「まあ落ち着くんじやな。うちの犬つこりに嬢ちゃんとこの勇者が
何かしたら問題になるから助けただけじや。心配せんでもちよつと
ばかり北の道に戻しだけじやよ」

その言葉に私は息をついた。周囲のモンスターもホッと胸をなでおろしていた。

しかしそれで転移させた直後に連絡をしてほしかった。

どうせ私達がやきもきするのを期待していたんだろう。期待通りの反応をしてしまったことが悔しい。こんなくじょう、意地悪ジジイめ。

カメ達に街道の方へ行くように指示を出す。ついでにカメたちにミルクちゃんたちにもメッセージを伝えもらつた。ジジイはおやつを食べに村の人の家に遊びに行くと言つて通信を切つた。

当面の危機も去つたし一安心だと思った私は送られてきた映像に固まつた。

長く伸びる道は上空からしつかりと見渡せた。

そのどこにもあの小癩な勇者サマの姿は見えない。

ジジイに一杯喰わされたかと思ったのだが、ふと見知ったものが落ちているのに気付いて頭を抱えた。

勇者サマが腰にぶら下げていた水筒が道の端っこに投げ出されていたのである。先ほどまで勇者サマの腰についていたはずだ。すなわちそれは、勇者サマがこの道に転送された後、道以外のどこかへ行つてしまつたことを示していた。

「どうやら本格的に見失つたようですね……」
ジヨシュの言葉が重く響いた。

第10戦 勇者サマ発見せり（前書き）

以前書いたもので勇者の一人称が「俺」になっていた話がありましたが、正しくは「僕」でした。間違えていたところは訂正します。

今回はシリアルっぽい話。

第10戦 勇者サマ発見せり

日没まで探し回ったものの、勇者サマを見つけることは叶わなかつた。子供の足だからそつ遠くへはいっていなはずなのだが。

勇者サマを見失つた時点でウルフ以下鼻のきくモンスターを現場に送つたのだが、まだ到着していない。

だんだん暗くなつていいく様子に、私はじりじりとした焦燥を感じた。

カメは鳥型モンスターだ。モンスターゆえに多少自然の動物よりはましだが、暗くなると視界が利かなくなる。カメは夜目が利く鳥ではないのだ。

「どうなさいますか？」

ジヨシユが私の判断を促す。

勇者サマが迷子になつたのはアリギ村とツキバ村の境界あたり。ジジイの許可を貰つてているとはいえ、うちのモンスターを多数出動させることはよろしくない。余所の魔王が支配するとこりに配下のモンスターを多数動員すると魔王連盟の取り決めに違反することになるからだ。

となると、少数精銳を行かせるしかない。つまりすでに行かせている分以上の増員はできないのだ。

この時ばかりは広範囲の探索魔法を使えるようになつておけばよかつたと思う。現在私の使える探索魔法は部屋の中のどこにある鍵やら耳かきやらを探す程度の能力しかない。便利だが範囲が狭いのだ。

映し出される画面はすでに影絵状態となつており、カメも森の中を飛び回れない状態だ。

「あと十分探して、見つからなければ私も捜索に行つてくる」

私は勇者サマが迷子になれば面白いとは思っていたが、それはあくまでこちらが把握した上の迷子を期待していた。さすがに私は一人で子供を森の中に放り出すような鬼畜ではない。娯楽に他人の命をかけてどうする。

焦りつつも画面を切り替えていると、モンスターのうちの一体が制止を掛けた。2カメの時に勇者サマの声が聞こえたというのだ。言われたとおりに2カメ切り替えると、確かに子供の泣き声が微かに聞こえた。

私は2カメにそちらに向かうよう指示を出した。

映し出される画面はほとんど黒で埋め尽くされている。得られる情報は音声ぐらいなものか。

しかし画面が真っ暗なのは暗いからというだけでなく、勇者サマがいる場所にも原因があった。

なんと勇者サマは地面の裂け目に落ちているらしい。子供が登るにはちょっと難しい深さだそうだ。

「うう……うう……」

暗闇からすすり泣くような声が聞こえる。不気味だ。

「もう、泣くなよー 男だろー！」

……ん？

「だつて……だつてえ……！」

「僕が大丈夫だつて言つてるから大丈夫なんだ！」

「一体どうこう状況なんだらうか。

「どうやら誰かと一緒にいるようですね」

ジヨシユが眼鏡を指で押し上げた。先ほどまでの威圧感が嘘のように消えている。やれやれだ。

「一緒にいるのも子供みたいね」

驚いたことに、泣きじやくつている子供を励ましてるのが勇者サマなのである。てっきり勇者サマが真っ先に泣き出すと思つてたのだが。

ともかく、発見できたのはありがたい。しばらく様子を見て、適宣フォローしよう。

私は聞こえてくる会話に耳を傾けた。

「でも、おこりのせいで兄ちやんまで落つこりちやつて……」「めんね、」「めんね」

子供が泣きながら謝つている。

「僕、勇者だからな！ 困つてゐる人を助けるのは当り前だ！ 気にするな！」

ああ、きっと勇者サマはいつものごとくふんぞり返るように胸を張つてゐるんだろう。いつも通りの生意気なガキンチョに少しばかり安堵した。

「でも、おいらたち助かるのかなあ」

不安そうな声が響く。

「大丈夫だ！」

根拠もなく勇者サマが言つ。いや、一応あるのか。

勇者サマは私のおつかいでアリギ村を訪れた。となると、帰つてこない勇者サマを私が探しに来るという可能性はすぐに思い当たるだろうから。

が、勇者サマは私の予想斜め上をいった。もちろん、悪い意味で。「明るくなつたら僕がちゃんと上まで登つて引つ張り上げてやるから！」

なんでそうなる。

あれか、あの常々鳥頭の勇者サマは自分が魔王からのおつかいでここに来たということも忘れているのか。つていうかせめて普通に大声出して助け求めろよ。もしかしたら通りかかった人が助けてくれるかもしれないだろ。いや、結構森の奥深くらしいから難しいだろうけど。

でも、なんか腹立つ。

子供は大人しく大人に頼れっての！

しかしここは迷うところだ。

すでに日は落ちていて。そして勇者サマがいるのは結構人里離れた場所みたいだ。街道からも離れている。ということは、一般人が通る見込みはないと見ていいだろ。助けを期待するのは止めといった方がいい。

ならば人を呼ばせるべきか？ しかし今勇者サマの近くにいるのはモンスターのみ。たとえ常日頃モンスターに襲われていないアリギ村の人たちだつて、いきなり知らないモンスターが尋ねてきらびっくりするし、怖くなるだろ。モンスターが来たら歓迎する上に食べ物を与えるなんてツキバ村くらいだ。うちの村民はどつかずれてると思う。ちなみにこのことはうちのモンスターであるウルフが太つたことから発覚した。あの食いしん坊め。つていうかツキバ村の人はモンスターが怖い怖くないの以前に、狼が怖くないのだろうか。うーん、ウルフが犬っぽいからかもしれない。あいつ狼としての威儀ないし。

ともかく、人を呼ばせる案は却下だ。そもそもこの場所からだと人のいる場所は遠い。アリギ村もツキバ村も。なにしろ人が住むには適していない場所だから。ってか、仮に呼んでも来るのに一苦労

するだろ？。

「どうじよ？。セーターに救出に行かせようか？」

私はジョシュに相談してみた。セーターたちは割と近くにいるはずだし大丈夫なはずだ。

「…………もう少し、様子を見た方がいいかもしません」

ジョシュが何か考え込むようにして言う。

「そりやまだどうして？」

私が尋ねると、ジョシュは眉間にしわを寄せた。

「すぐに助けに行けば、」こちらが様子を見ていたというのがばれるかもしませんし、彼の男としてのプライドといつのもありますがないえ、なんでもありません」

中途半端にジョシュは言葉を濁した。

男のプライド、ねえ。

確かにそれは厄介だ。下手に傷つけると変に歪んでしまう時があるし。過去、幾度となく男のプライドをズッタズタにしたことのある私からすると非常に面倒くさい。最近で言えば、ヤトとおしゃべりしているときに「真央はうちの兄さんよりも男前ねえ」と言われているのを聞かれ、ヤトの兄がマジ凹みしていた。申し訳ない。

困難な状況にあっても、人間なかなか自分のプライドを捨てるとは難しいものである。子供であれ、というか子供だからこそ勇者サマには難しいだろ？。

となると、プライドを捨てざるを得ない状況、すなわち状況が絶望的になるか、はたまた勇者サマが悟りを開くか、勇者サマと一緒にいる子供がのっぴきならない状況になるのがいいのかもしれない。そうすれば、勇者サマは助けられることにプライドを傷つけられることもないだろ？。

個人的には、あの傲慢とも思える勇者サマの鼻つ柱を一度へし折

つていてもいいと思つ。己の出来ることの限界を知れば、今後の成長にもつながるだろ。何しろ奴は勇者。無限の成長の可能性を秘めた存在だ。

そうでなくとも、一晩ぐらは放つておいて勇者サマがどう行動するか見てみるのもいいかもしない。困難に立たせてこそ人は成長すると言つし。それに彼は一応真正銘の勇者。困難な事態の解決が通常の人間よりも楽にできるといつ勇者特有の謎の能力があるなんとかなるかもしれない。

そこまで考えて、ふと私は思った。

もしかしてジョシュも似たようなことを考えたんじゃないだろうか、と。

現在の勇者サマを見るに、彼を立派な勇者にするには一度手痛い失敗をしてそれを乗り越えて成長する必要があるように思える。ならば今回のこととは絶好の機会だ。

が、そのことを口に出せばどうなるか？ 周囲にいる勇者サマに對して過保護かつ甘いモンスターたちは文句を言つことは火を見るよりも明らかだ。ひどいだの何だの言われるはずである。

下手に身内で争うよりは、勇者サマのためといつ建前を押し出しておくのが無難だと判断したのだろ。

……しかし、教育係なんだから憎まれ役ぐらに買って出ろよ、ジョシュ。私は憎まれ役なんてご免こうむるなどね。

とにかく、私はジョシュの言い訳をまるつと引用し、現場にいるモンスターたちに伝えた。セーター や ミルクちゃんたちは不満そうではあったが、ジョシュが口ハ丁で丸めこんでしまつた。さすがは腹黒。ちょっと意味違うかな？

モンスターたちは勇者サマたちが野犬に襲われないよう、寝ずの番をすることになった。モンスターが自然動物に警戒するつていうのもおかしな話だが。

勇者サマに意識を戻す。彼らの頭上での状況は変わったが、地面の裂け目の底にいる彼らの状況は変わっていないようだ。子供が解決するには難しい状況で、自分以外の人間がいる状態。さて、そんな状況で勇者サマは一体どんな活躍を見せてくれるのだろうか。

第10戦 勇者サマ発見せり（後書き）

勇者サマは地面の裂け目に落ちた後、しばらく気絶していた模様。

第1-1戦 任務完了

私は考えた結果、彼らを一晩放置することにした。

といつても、助ける手段を一つも残さないといつほど鬼ではない。セーターに指示を出し、勇者サマ達が落ちた割れ目の斜面の一部に上から下まで届く丈夫なツタの植物を生えさせたのだ。子供の体重ぐらいならば耐えうるはずである。明るくなれば勇者サマもそれに気付くに違いない。

季節は初夏。さすがに夜は冷え込むが、それでも凍死するほどじやないから大丈夫だろう。

当初はずつと泣いていた子供も泣きやみ、勇者サマ達は星明かりのもとで語り合っていた。ここだけ見るとなんかロマンチックな響きだ。

「兄ちゃん、怪我してない？」

「僕は大丈夫だ。鍛えてるからな！」

「兄ちゃんは勇者なの？」

「そうだぞ。アリギ村とツキバ村の勇者だ」

「え、一つの村の勇者なんだ。強いんだね」

「うん。僕は勇者だからな」

「モンスター倒したり、魔王倒したりするの？」

ポンポンと質問に答えていた勇者サマが、初めて言葉に詰まつた。

「…………悪いモンスターは、僕が退治してやる。魔王もだ」

その言葉にはどこか、不機嫌な感情がこもっているように思えた。

「意外だわ。勇者サマなら『どんな奴でも僕がケチヨンケチヨンにしてやる』くらい言いそうなのに」

それはもう、普段の恩義なんてきれいにぱぱり忘れて。

ジョシュは小さくため息をついた。

「いくら彼が幼いとはいえ、三食おやつ付きの至れり勿くせりの状況でモンスターを遠慮なく倒すという風に思わないでしょ？」

そうなのだ。あのガキンチョ勇者サマはさうじに早朝から来て夕方まで残る。そのため三食プラスおやつという破格の待遇を受けている。正直、勇者がそれでいいのか疑問だ。一度勇者サマを夕食前に追い出したことがあるのだが、怒ったモンスターにより私の夕食が抜きとなつた。私は魔王のはずなのに。

とはいって、ある程度妥協してしまえば悪いことばかりではない。あいつら勇者サマに甘いから、特におやつが今までにないくらい手の込んだものになってきてるので私もちよつとだけ嬉しい。しかし同時に勇者サマでおやつを奪われる可能性もあるとこもろ刃の剣。

食べ物の恨みは深いんだぞ勇者サマ、覚えとけ。

まあ食べ物以外でも勇者サマはかなり甘やかされていふるといふが、ある。この前など食べすぎでお腹が痛いと泣いていたのだが、モンスターたちがあれやこれやと世話を焼いていた。世間一般では人間に害をなすと恐れられているモンスターたちが小さい子供のために薬を調合して飲ませたりお腹をさすつてやつたりと甲斐甲斐しい世話を焼いていたのである。世の勇者が見たら卒倒しそうだ。

「至れり勿くせり、ねえ。それを当然と受け止めてる節があるようにも見えるんだけどね」

勇者サマは当初、お礼を言ひとつ簡単なことすらできていなかつた。私に対してだけといのなら、まあ腹は立つが納得はできただろ。しかし彼はモンスターたちに対しても当初はお礼を言わなかつた。ジョシュに注意された時にはきょとんとした表情をしていたつ。

私が苦虫をかみつぶしたような顔をしているのを見て、ジョシュは何かを言おうと口を開いたようだつたが、結局何も言わずに口を閉じたのだった。

「お前はどこから来たんだ？」

唐突に勇者サマは話題を変えた。

「おいらはアリギ村に住んでるんだ。父ちゃんが鍛冶屋で、母ちゃんが機織りしてて、おいらは父ちゃんの手伝い。妹は母ちゃんの手伝いしてて。兄ちゃんは？」

少年は無邪気に尋ねた。

「へ？」

勇者サマは短く変な声を出して言葉に詰まつた。しかしすぐにそれを誤魔化すように咳払いをする。

「ぼ、僕は――」

ギュルギュルギュル、と大きな音がした。

私にとつては馴染みのある音だ。

「ごめん兄ちゃん……」

少年が情けない声で咳く。

「おいら、おなか減つた……」

ま、本来の夕食の時間はとつぐに過ぎてるわけだし。

「そりや腹も減るよねー」

空腹であるう勇者サマたちの会話を聞きつつ私は夕食を優雅に味わっていた。今日のメインは鶏の香草炒めだ。

人でなしどか冷たいとか言うなれ。腹が減つては戦は出来ぬ。

つていうか、私が食べないと勇者サマにいいことがあるわけでなし。

もしもの時に万全な対策を取るためにも夕食は必須である。

私の名誉のために言つておくと、ちゃんと勇者サマの分の食事は確保してある。勇者サマが帰つて来た時すぐに食べられるようじだ。まあ一部モンスターは欲しがりません勝つまでは状態で勇者サマが帰つてくるまで食事を我慢するつもりの奴もいるようだが、その辺は好きにさせていろ。よくもまあそこまで義理堅くなれるものだ。

さて、勇者サマはちよつとばかり苦笑していたようだが、やがて何やらじりじりとしだした。

「ほら、これやる」

「え、いいのー!？」

少年の声がぱっと明るくなつた。

そういえば、おつかいの帰りにヤトが勇者サマに食べ物を土産に持たせていた気がする。

「うん。ヤトさんに貰つたんだけど、お前にやる。大事に食べよ」「ありがとうございます、兄ちゃん!……でも、兄ちゃんはいいの? おなか減つてないの?」

「この子いい子だな。お礼もちゃんと言えてこらし気遣いもしつかりできている。なんて出来た子だ。勇者サマとは大違いだ。この子の爪の垢でも煎じて勇者サマに飲ませたやりたい。

「僕はここに来る前にたっぷり食べてきたからな。全然お腹すいてないから大丈夫だ」

勇者サマはえくんと威張るよつに言つた。

さすがの勇者サマも、自分より小さこ子供の前ではやせ我慢するらしー。

私が感心している後ろで、モンスターたちがまたぞろ感涙していた。駄目だこいつら早くなんとかしないと。

「このひとはさておいて、少年は逡巡した末に一つの提案を口

にした。

「兄ちゃん、半分こしよつ?」

私は感嘆した。

「偉いなあ、この子。まだ小さいだらうに」

勇者サマを兄ちゃんと呼んでいたところとは、勇者サマよりさらに幼いということだ。声から判断するにしてもせいぜい十歳からこらだらう。

「魔王様なら確実に一人占めするでしょうね」

ジョシコもうなずきながら言つた。

「失礼な。こりこり素直なよい子にはあげるわよ。……自分の分を確保してから」

勇者サマにだつたら確実にあげたりしないが。

理不尽と言つたが、世の中には優しくしてあげたい相手と優しくしたくない相手がいるのだ。

予想外の提案をされた勇者サマはしばらく拳銃不審な感じにあだのううだのうめいていたが、

「わかった。半分こだ」

と、怒つたみたいな声で言つた。

「うーむ。自分の提案が通らなかつたから怒つてゐるのか？ それとも……照れ隠し？ お子様だし、あり得ないことじやないよなあ。実際問題、大人でも照れ隠しで怒る奴いるし。

「うん！ 一緒に食べると美味しいんだよ！」

この子供、なんとも育ちがいい。素直で優しい子供だ。勇者サマは素直だが、可愛げがない。

しばらく一人でもしゃもしゃ食べているかと思つたが、その時間は短かつた。

それもそのはず、ヤトが渡したのは勇者サマ一人分の食べ物、しかも時間的に考えて夕食の邪魔にならない程度のおやつだろう。そんなものを一人で分けたたらすぐになくなるに決まつてはいる。ま、一晩ぐらいならなんとかなるでしょ。

それからもぼつぼつと一人は他愛のない話をしていたらしいのだが、お腹が膨れた私はうつかりうた寝をしてしまつたために一切合財聞きそびれてしまつた。モンスターたちに爆笑会話はなかつたかと尋ねたら白い目で見られた。ちえ。

私が目が覚めたころに夜もとつぱり更けており、良い子はとつくに寝ている時間だつた。ソファで寝たせいで微妙に節々が痛い。いつの間にやら掛けられた毛布をどかし、私は依然として黒い画面に意識をやる。物音らしい物音はしていない。背後を振り返れば、モンスターたちも寝入つてゐようだつた。うちのモンスターは夜行性の奴が極端に少ない。モンスターの癖に早寝早起きなのである。ゆえに本能故でなく急け癖で遅寝遅起きの私はモンスターたちに小言を食らつ。くそ。宵つ張りの朝寝坊は引きこもりの特権なんだからな！

とかく、観察対象が寝てゐる以上、起きてまで見続ける意味はないだろう。今度はしつかりとソファに横になると、再び毛布をかぶつて眠りについた。

朝、仏頂面のジョシュに起された。

「あと五時間……」

寝ぼけながらのお願いは当然の」とく却下された。
どうやら勇者サマたちも起きて、急斜面に根を張ったツタに気付いたらしい。明るくなつたのでカメの視界も回復し、映し出される画面には一人がうんじょうんしようと登つている姿が見える。ふと後ろを見ると、モンスターたちが横断幕やら旗を持つて勇者サマを応援していた。あんたたち、いつ作つたのその応援グッズ。

途中ちょっと足を滑らせた勇者サマにひやりとしたが、一人は無事に地上に戻ることができた。

二人は登頂記念ではないだろうが、思い切り万歳をしてから地面にへたり込んでしまつた。さすがに疲れたらしい。

「ごめんね、兄ちゃん。迷惑かけちゃつて」

少年が申し訳なさそうに言う。朝田の中で見れば、どうしてなかなか、柔和な顔つきをした可愛らしい子供だった。金色の癖つ毛で色が白く、見ようによつては女の子にも見えるぐらいだ。

今にも泣き出しそうな少年の方を、勇者サマは豪快に叩いた。
「氣にするな、失敗なんて誰にでもあるんだから。お前は僕に感謝すればいいんだ！」

何その超理論。

しかし少年は何やら感じるものがあったようで、ふわりとほほ笑んだ。

「うん、ありがとう兄ちゃん」

少年の素直な謝辞に、勇者サマは顔を赤く染めた。やたらと頬を搔きながら視線をあちこち彷徨わせている。

「う、うん。大したことないぞ！」

どこかはにかみながらもしっかりと威張るところは威張るよいつで、勇者サマはえへんと言わんばかりに胸を張っている。

少年は楽しそうに笑った。

「おいら、ピールって言つんだ。兄ちゃんの名前は？」

驚いたことに、この二人は互いに自己紹介をしていなかつたらしい。一晩語り合つてたんじやないのか。奥手だな勇者サマ。

「僕はオキだ！」

どちらともなく差し出した手を硬く握り合つている。なんかモンスターたちが後ろでハンカチやら手やらで田元拭つてんだけど、そんな感動的な場面なのか？

「」の時の私は知る由もない。

「」のピール少年こそ、勇者サマの生涯で無二の親友となる人物であるところである。

昼前に勇者サマははづびて帰ってきた。

「戻つたぞ、魔王。ちゃんとヤトさんに届けてきたからなー。」

勇者サマは多少汚れてはいるが、元気いっぱいだった。

私はあぐびを噛み殺しながらうなづく。

「そう。御苦労さま。何か変わったことはなかつた?」

日帰りで戻つてこれる距離なのに日付が変わつているのだ。どんな言い訳を言うのだろうとほくそ笑んでいたのだが、

「友達が出来たぞ!」

返つてきたのはそんな言葉だつた。もつと切実な問題があつたと思つただけど。やはりあれか、鳥頭だからか。喉元過ぎれば熱さ忘れるつてやつか。はたまた勇者サマにとつちや穴に落ちたことも野犬に追いかけられたことも大したことじやないのか。

全力で突つ込みを入れたかつたのだが、特に一部メスモンスターから脅迫染みた視線を向けられたので止めておいた。ここで下手に突つ込んで泣かせたら後が怖い。

「そう。他には?」

スルーして尋ねると、勇者サマははつとしたよつて自分の荷物を探つた。

中から取り出したのは、昨日カメの映像で見たものだ。

「これ、ヤトさんが魔王たちについて!」

中身はクッキーかと思いきや、パンケーキだつた。彼女の十八番だ。

私は中身を取り出して、おやと思つた。

ヤトからお菓子を貰うことは珍しくないので、特に彼女の十八番のお菓子などはすつかり見慣れている。このパンケーキの場合、型を使って焼いているので、サイズが決まつていいのだ。大きさが変わつていれば気付く。

恐らくヤトがあらかじめ切つておいてくれたのだろう、綺麗に分けられているパンケーキは一切れ分だけなくなつていた。

勇者サマが帰つてくるときはずっとカメを通して観察していたし、食べたとしたら昨日の内だらう。

私は軽く息をついた。

「せっかくのヤートの心遣いだし、みんなで食べようか。勇者サマもね」

気のないふりをしながらもチラチラとパンケーキを見ていた勇者サマの頭を軽く叩く。

勇者サマはしばらく田を白黒させていたが、やがて怒ったような口調で言つ。

「魔王がそこまで言つたら食べてやつてもいいだー。」

なんともはや、分かりやすい子供だ。

私が呆れる横で、セーターやミルクちゃんを筆頭にモンスターたちが勇者サマを甲斐甲斐しく世話している。もはやこれが日常風景として定着しつつあるのだから恐ろしいものだ。

こつもなればつい田くじらを立てるそれらも、今日だけは許しておこう。何しろ勇者サマは初めてのおつかいをじにかやり遂げたのだから。

その寛大な気分は私の分のパンケーキを勇者サマに取られた時点で消え失せたのは言つまでもない。

第1-1戦 任務完了（後書き）

この間にもやもやお気に入り登録が100件に！ ありがとうございます！

8・19追記 単語のミス直しました。ご指摘ありがとうございます。単語間違いのせいでもうつかり魔王城が大惨事になつてゐるところでした……

第1-2戦 希望を無視したトントン拍子

勇者サマが初めてのおつかいを成功させた翌々日。

私は頭を抱えていた。

「どうしたんだ、魔王？」

勇者サマが不思議そうな顔で私を見ている。

どうしたもこうしたもあるか！

「うちは子供の遊び場じゃない！」

私が吠えると勇者サマでなく、彼が連れてきた少年が身をすくめた。

「う、ごめんなさい……」

「君じやなくて謝るべきは勇者サマでしょうが！」

私が再び言うと、少年ことペールがますます困り顔になつた。勇者サマに助けを求めるような視線を向けている。

いつもより遅めにやつてきた勇者サマは、なぜか先日の一件でお友達になつた少年をしつけに連れてきたのである。

事の原因はまったくもつて悪びれた様子がない。

「別に謝ることなんてないぞ！」

言ひながら仁王立ちする勇者サマの頭を私は叩いた。

「あんた自分が何しにここに来てるか分かつてないでしょ！」

つていうか、曲がりなりにも魔王の住処に友達連れてくるなよつていう話。食われても知らないぞ。食つ奴いなけど。

「分かつてゐぞ。勉強しに来てるんだ！」

「お、オキ兄ちゃん……」

自信満々な勇者サマとは裏腹に、ペール少年はオロオロしている。どうこう風に言われて勇者サマにここまで連れてこられたのか気になるところだ。

ああもう、頭が痛いったらない。

しかし私の態度とは裏腹に、モンスターたちは歓迎ムードである。歩いてきて疲れているであろう一人にジュークを渡したりお絞りを渡したりしている。窓の外ではモンスターがピール少年用の子供椅子作ってるし。あなたたちすでにこの子供が常連になるのは決定事項なのか。

とりあえず勇者サマを木から吊るして反省を促すか、と考えていると、意外なところから仲裁が入った。

「いいんじやありませんか、魔王様」

いつもの無表情が微妙に企み顔に見えるジョシュが言う。

「一緒に学ぶ友達がいればやる気も上がるでしょう。切磋琢磨させてみては？」

なるほど、一理ある。勇者サマは絶対に負けず嫌いだろうし、競う相手がいれば伸びること間違いなしだ。勇者教育と言つても勉強以外に体術なんかもあるし、組み手の相手には同年代の子供は打つてつけだらう。

でも、ちょっと待て。

「この子にも都合つてもんがあるでしょーが。おひさの手伝いとか学校とか！」

このテスハという星では、ある程度田舎でも学校に通っている子供がいる。一応貴族から農民まで大体学校に行つてているのだが、頻度や時間が違う。金持になればなるほど学校に通えるが、貧乏人は短い時間で簡単な教育を受けるだけである。

ツキバ村もアリギ村もそこそこ田舎なのでそれほど教育は重視されていない。それより家の手伝いや奉公に出る方が大切なのだ。

私としてはそのうちジョシュのような教師モンスターを量産して、貧乏人でもタダで授業を受けられる学校をツキバ村に作りたいなどと考えているが、実際にできるかどうかはまだ分からぬ。だつて

現在いる教師モンスターはジョシュだけだ。こんな嫌味野郎がたくさんいる学校なんて嫌過ぎる。

しかし私の心配をよそに事態は進んでいく。

「えつと、おいらは前は学校行つてたんだけど、今はちよつと行つてないんだ。だから平氣」

「おいおい、少年。何言つてんだ。

「おうちのお手伝いは？」

遊んで暮らせるほど余裕のある家はこの辺にはないはずだ。しかしピール少年は首を振る。

「勉強するのも大事だつて父ちゃんが」

なんてこつた。さりげなく乗り気じゃないか少年。そしてなんて理解のある父親だ。くそつ、忌々しいほど素晴らしい人格者だ。

「オキ兄ちゃんが一緒に勉強できるつて言つたから……」

小動物のように小さく震えながら言つ少年に、僅かばかりの罪悪感を覚える。つていうかこの子は悪くない。悪いのは考えなしの勇者サマだ。

そもそもの大前提として、確認したいことがある。

「少年、名前は？」

知つているが一応尋ねておく。

「ピールだよ」

「じゃあピール。ここがどこか分かる？」

私の質問にピールが不思議そうな顔をした。

「ツキバ村、だよね？」

私は大きくなずいた。

「そう、ツキバ村。でもさりに具体的に言おつか。ここは誰が住んでるか知つてる？」

何を隠そう、つていうかそもそも隠してないけど、ここは私こと空の魔王の住居である。普通、魔王の住居に近付こうと考へる奴は

いないだろう。この近辺で考えてみても、魔王と住民が魔王の住処で頻繁に交流をしているのはうちと北の馬鹿ツブル魔王のところぐらいなのだ。

しかしピールはきょとんとして言ったのだった。

「ソラノマオさんだよね？」

「…………は？」

予想外の答えに私は固まつた。

私の様子を見たピールが不安そうな顔をする。

「えと、おいら間違つた？」

間違つてない。それは紛うことなき私の本名だ。間違つてないからこそおかしい。

「…………ピール、その名前誰から聞いたの？」

「ヤト姉ちゃんから。ヤト姉ちゃんの友達なんだつて

何の曇りもない瞳に私はがっくりとうなだれた。

そういえばピールつてアリギ村の子供だつたもんね。そりやヤトと知り合つてもおかしくないよね。ヤト姉ちゃんつて呼ぶぐらいだからそこそこ仲はいいんだろうし、私の話を聞いてもおかしくはないよね。

そこまで考えて私は首を振る。色々突つ込みどころが多すぎてもうどうしたらいいのか分からない。

「この前オキ兄ちゃんが薬用酒届けたつて言つてたの。ヤト姉ちゃんに薬用酒を届けてるのはマオさんだつて聞いたことがあるから、すぐに分かつたよ」

「…………」と笑う少年に頭痛を覚える。

わあ、なんて察しのいい子供なんだろ。どうせならそのまま私がツキバ村の魔王だつて察してくれたらよかったです。

私は諦めずに質問を重ねる。

「ピールは今周りにいるこいつらのことをどう思つ？」

そう言って私達の周りにいるモンスターを指さした。

人型のジョシュならともかく、それ以外はモンスターとまる分か

りな容貌である。野生動物に比べて大きいし、爪が長く尖っていたり牙が鋭かつたり目つきが悪かつたりする。まあ尖った爪は絨毯に引っ掛かるからちゃんと切つっているが。前に間違えて血管まで切つて泣かれた。

それはさておき、モンスターたちは勇者サマが友達を連れてきたというので、いつもより五割増しの数がいる。私の部下だから知らないが微妙に迫力がないが、それでも魔王になる前の私だったらこれだけの数のモンスターに囲まれば腰を抜かしていたかもしない。

が、

「すつごくかっこいい。それに優しいね」

類は友を呼ぶという言葉をその時私は痛感した。

なんだこのど天然。ヤトだつて初めてうちに来て歓待したがるモンスターたちにうつかり囲まれた時には顔色変えてたぞ。当然その後モンスターたちを私が殴り倒したけど。

なんだろう、答える求めが返つて来ないとこんなにも脱力するものなのか。もうちょっとジョシュの授業中真面目に取り組んであげよう。これは切ない。

「うん、かつこいいかどうかは個人の感性だけど、ピール、こいつらモンスターだつて分かる？」

「うん」

良い子の返事だ。

よし、この調子で行こう。

「このモンスターが私の言ひことを聞くつてことも分かる？」

「うん」

「じゃあ私の正体分かる？」

「うん」

ピールは無邪気に言つ。

「ソラノマオさんだよね！」

そうだけど違う！

「ピール、何言つてるんだ。魔王は魔王だろ」

今初めて勇者サマの尊大な態度をありがたいと思った。そうだよ
私は魔王だよ。人々から恐れられる魔王だよ。支配下の住民とは友
好的だけどね。

「うん、でもヤト姉ちゃんの友達だよね？」

…………もうなんか色々面倒くさくなつてきた。こちらを信頼し
きつた顔に勝てる気がしない。

「そう、ヤトの友達だよ」

ため息をこらえて私は返事をする。

するとそれまで静観していたジョシュが眼鏡を押し上げながら言
つた。

「お茶の準備が整つたよつですでの、一息ついてから勉強をしまし
ょうか」

人数分用意された茶器を見て私はたそがれた。

そうか、人数分用意してることとは端っから私の考えが通る予
定はなかつたつてことか。あれ、なんだか目から汗が出てくる。お
かしいなあ。あはははは……

「ひじりの日からピールも一緒に勉強することになつたのだつ
た。

ああ、すぐに終わると思つていた勇者サマの教育係。なぜか教え
る生徒が増えたつてどりこりことだ。一体どいで間違つたんだろう。

第1-2戦 希望を無視したトントン拍子（後輩たち）

多分最初から間違つてましたが。
今後はペールも出張つてきます。

今までの主要な登場人物を振り返るだけなので、飛ばしても大丈夫です。

友達である人魚魔王の「ディーネから面白い話を聞いた。

なんでも最近、都会の方では紹介文を書いて交換するのが流行っているのだそうだ。家族や友人、恋人などの紹介文を互いに書いて交換するのだそうである。交換した紹介文を読んでその人と知り合いになりたいと思えば、仲介を頼んだりもするのだそうだ。ディーネに要請されたので、私の周囲の人や人以外について紹介文を書くことにする。

＊＊＊

紹介文

ヤト

アリギ村に住んでいる私の友達。金茶の髪に青い目。ちょっと病弱だけど、とても明るくて優しい。お菓子作りや裁縫など、女の子らしいことがとても上手。

年離れたお兄さんと一緒に暮らしている。ヤト本人は気付いてないけど、結構同じ村の男の子にはモテているみたい。ただ、ヤト

のお兄さんが影でこいつそり排除している。私も協力しているのでそのことはヤトには言えない。

勇者サマ

パークーロの勇者サマ。名前はオキ。現在はツキバ村にも所属している。

十歳ちょっと? 茶色い髪に茶色い目。チビ。生意氣。自ら中心的。食い意地が張っている。とにかくすぐ調子に乗る。自信過剰。礼儀知らず。いつか徹底的に泣かしたい。

何故かモンスター受けが良い。モンスターと結構円滑に意思疎通を図っているようだけど、モンスター言語を理解しているのではない様子。野生の勘?

どんだけ暇なのか知らないけど、毎朝うちに来て朝食を食べ、夕方まで居座つて夕食を食べてから帰る。

ピール

アリギ村の子供。勇者サマの友達。

金髪の癖つ毛。色白。女の子みたいな柔軟な顔つき。勇者サマより年下のよう。十歳くらい?

どこかずれまくっている子供。両親は理解があるのかはたまたちやんと現状を理解していないのか、勇者サマと一緒にうちに勉強に来ることを賛成しているらしい。本人も勉強したがっているので一緒に勉強させている。

気が弱いようにも見えるのだが、うちのモンスター相手に全く怯

えない。

ジョシュ

勇者サマの指導を押し付けようとして私が合成した人型モンスター。どこかで色々間違つたらしく、私に対してもスバルタ教育を施そうとしてくる。

私と同じくらい非力だが、私の五倍は嫌味でひん曲がった性格だと思う。ものすごい鉄面皮で、滅多に表情を崩さない。しかしため息の種類だけは無駄に豊富。いつかあいつの髪の毛むしってやりたい。

トウイ

私にとつては先輩魔王かつ後見魔王。私が魔王試験を受けることになった原因。無精ひげを生やしたおっさんにしか見えない。本性なのか擬態なのかは知らない。

結構いい加減でルーズなところがあるけれど、そこそこ面倒見はよい。何故かツキバ村の村長と知り合いで、ツキバ村はトウイに紹介して貰つた。結構偉い魔王らしい。

たまにうちに来ると、だらだらとソファに横になりつつ酒とつまみを散々飲み食いして帰る。

ハゲ

本名はオレン・トライスト・テキシ、みたいな感じだつたはず。私の支配するツキバ村の村長。トウイの知り合い。ハゲ。面と向かつて言つと落ち込んで鬱陶しいので、本人に対してはオレンと呼んでいる。

不思議なことに奥さんは日茶苦茶ナイスバディな美人。家族間の愚痴をなぜかうちに言いに来る。私は相手にしていないので、モンスターに話を聞いてもらつてはいる。

まあ村長としては悪い人間ではないと思つ。

ジジイ

アリギ村の魔王。本名不明。初対面の時に聞いた時は「天上天下唯我独尊」と名乗っていたし、違う時に聞いた時は「チョー・カッコ・イーウ・エオチャメ・ナオ・ジサマ」とかぬかしていた。ぶつちやけそれが名前でいいなら、ジジイの名前は「イロボ・ケスケベ・ジ・ジイ」とかでいい氣がする。

常に人間に擬態してあちこちふらふらしている。本性はドラゴンという噂だが、確認したことはない。人をからかうのを至上の樂しみとしている。

たまにうちにお茶を飲みに来る。私の胸を見ては必ずため息をつくのでそのたびに掴みあいの喧嘩になる。

オセロや将棋などの卓上ゲームを好むが、めちゃくちゃ弱い。そのくせ長考するし負けず嫌いで何度も勝負を挑んでくる。最終的にジジイが噴いた火によつてゲームが灰と化したこともある。

* * *

自分で書いたものを読みなおして、しみじみと懸つ。
ヤト以外、まともな知り合いが少ないなあ、と。
なんで私の周囲はろくでもなし人口が多いのだから。田の行
いだらうか。

…………うーむ。心当たりが多くて、その行動を改めたらいいの
か分からぬ。
まああれだ、明日から頑張るわ。うん、やつこよ。

話してみると勇者サマのお友達、ピールはいい子だつた。頭は悪くないし、自分の意見も弱腰ながらちゃんと言える。その上礼儀正しいし素直である。ラボー、どこかの勇者サマとはえらい違つた。

性格もいい上に見た田がそこそこ愛らしことあつて、うちのモンスターたちの間では勇者サマ派とピール派が出来そつた勢いである。あんたたちホントに何なの。

ちなみに色々と話しあつた結果、ピールは朝食を自宅で取つてからうちに来ることになつた。アリギ村からこちらまで来るので空き腹を抱えてくるにはキツいからだ。隣村とうちはのじとく、ぶらり散歩気分で来れるほど甘い道のりではない。

帰る時はその逆で、うちで夕食をとつてから帰る。空氣の腹を抱えて以下略。

もともと勇者サマもうちで三食食べているし、今更子供が一人増えたところで大差はない。ピールの帰る時間が遅くなりやしないかとちょっと気になるくらいである。

それにしても、私はまだ一応十代だといつになんで私は保護者みたいなこと考へてるんだろう。どれもこれも、ガキンチョ勇者サマとハゲブラザーズのせいだ。くそう。

まあそいつらに對する報復は今度にしよう。

結局のところ、ピール少年はつちが魔王城だと理解したようだつた。私がツキバ村の魔王だということも。

しかしそれで怖がるかというとまたそれはそれ。この幼い少年は

頭のネジが何本か抜けているのか、はたまた類稀なる性善説の持ち主なのか、私やモンスターたちが自分たちを害するとは一向に考えていいようである。多少脅してみたが、怯えるそぶりもない。この子供の危機管理能力は大丈夫かと心配になる。

尾を振る犬は打たれないと言つたが、まさに至言だ。ここまで無警戒に信頼されるとそれに報いようと思つてしまつのだ。

……私ではなくモンスターたちが。

ピール少年来訪初日ということである程度の今後についての取り決めが終わると、モンスターたちはここぞとばかりに張り切り、ピールと、そして遅くなつたが勇者サマの盛大な歓迎会を開催した。せめて私に許可を取つてからにしてほしいと思うのは間違いだろうか。豪華に飾りつけられた居間と豪華な食事を見て乾いた笑いが浮かぶ。

つていうかお前ら毎日勇者サマ歓迎してるじやん。別に勇者サマの歓迎パーティーはいらなくないか？

ま、酒がたつぶり出てきたので私としてもそれほど文句はないんだけどね。私のご機嫌取りのためだと分かっていても酒が出てきたらまあいいかなと思つてしまつ。ちょっと情けない気がしてきた。

ま、とにかく歓迎会なのだ。

本来、主賓は子供一人でもてなすのは家主である私の役割なのだが、何が悲しくて子供二人を歓迎せねばならんのか。個人的な思いとしては、さつさと家に帰つて親の手伝いでもしてろと思う。ま、邪魔をするつもりはないが、好意的に迎え入れる謂れもない。

私は歓迎会のすべてをモンスターに丸投げし、ローテーブルにいくつかのつまみをおいて、ソファで酒を飲むことに徹した。ジョシュを始めモンスターたちには呆れた顔をされたが、知ったこっちゃない。

歓迎会と称するだけあって、テーブルの上には子供が好みそうな食べ物が目白押しだった。ハンバーグだのフライドポテトだのパスタだのコロッケだの、脂っこいことこの上ない。いや、私も好きだけどさ。デザートはプリンにケーキにショーケーキ。一体いつの間に用意したのか。

つていうか、もしかしてピールが来るつてモンスターたち分かつてたんじやないか？ そういえば今朝はカメを見なかつたし。あいつらこじうこうところは無駄に手回しがいい。

関係ないが、この前厨房につまみ食いに侵入した際、勇者サマ専用なる戸棚を発見した。魔法で鍵がかかっていたためぶつ壊して確認したのだが、中身は勇者サマの好きな料理のレシピや、勇者サマの苦手な食べ物とそれをいかに克服させるかの試行錯誤を記したノート、それに色々なお菓子の材料が入っていた。お前らは勇者サマの母親か！ と突っ込みたくなつたのは記憶に新しい。

酒を飲みながら勇者サマ達の様子をちらりとうかがう。モンスターたちに囮まれた子供二人はジョシュの通訳を介して和やかに会話をしているようだつた。会話というか、勇者サマとピールの会話にモンスターがやんやんやんやと言つてているという方が正しいかもれない。

ピールはこちらを気にしているようだつたが、私は知らないふりをした。まあその辺はジョシュが上手いこと丸めこんでくれるだろ。子供は子供同士で仲良くやつてればよいのだ。

そもそも私は魔王。勇者サイドの人間と仲が良いのはよろしくない。下手に情が移つていざといつ時に殺せなくなつたら困る。

その後、ちょいちょいにけらにけりかいを出してくる勇者サマを適当にあしらいつつおつまみを死守しつつ歓迎会は進んだ。なんであの馬鹿勇者サマは自分の分があるのに私の皿から取ろうとするのか。謎だ。

＊＊＊

日が沈む前に歓迎会はお開きとなつた。お子様一人はお土産も持たされて元気に帰つていぐ。私はそれを見送らずに私室へと引っ込んだ。

しばらくしてノックの音がした。入ってきたのは予想通り、ジョシュだつた。

「で、どんな感じ?」

私が問えば、ジョシュはくいつと眼鏡を上げた。

「使えると思いますよ。もともと勉強熱心なようですし」

「そう。体の方は？」

「少し小柄ですが健康ですし、家の手伝いをしていることもあります。それなりに筋肉はついているようです。体力には自信があると」

主語を省いた会話は、先ほど家路についたピールのことだ。歓迎会の最中、ジョシュが熱心に通訳していたのも今後どのくらい使えるか探るためだと睨んでいたのだが、どうやら当たりのようだ。

ピールには悪いと思うが、私は魔王。使えるものは親でも使う。

……いや、自分の母は怖くて使えないかも。

とかく、今後の勇者サマ教育にどれくらいピールが役立つかを調べておくのも大事なのだ。それによってジョシュのスバルタ加減も違うだろうし、巻き込まれる私の苦労も違う。特に後者は重要だ。ピールが優秀なら私はまるっと彼に投げたい。

と、思っていたのだが。

「もちろんお分かりでしょうが、魔王様には明日からも引き続き彼らと一緒に授業を受けてもらいますからね？」

ジョシュが聞き捨てならないことを言つた。

「『^{ビル}学友がいたら十分じゃないの？』

言外にサボりたいと主張してみたのだが、ジョシュは無慈悲にも首を横に振つた。

「敵を知り、己を知らば百戦危うからずと言いますし」

兵法なんて私にはどうでもいい。平和に魔王してたらそれでいいのだが。

ふとジョシュの目つきが厳しくなつた。

「そもそも私は魔王様の助手として造られたモンスターです。まさかお忘れじゃないですよね」

なんか『そもそも』以降の部分をめちゃくちゃ強調された。そう

いえばそうだつたなあ。すっかり忘れてたけど。

「ベンキョウジヨシュモンスターだもんねえ」

略してベンジヨ、と言おうとしてジョシュの殺氣を浴びた。怖っ。ジョシュつてばそんなに嫌だつたのか。いいじゃん、ベンジヨ。レトロで。私は願い下げだけだ。

それはさておき、私はジョシュの氣迫に負けずに言に募つた。

「勉強の助手つていうのは、あくまで勇者サマの勉強の助手であつて、私の助手としてつていう意味じゃなかつたんだけど」

「勉強の助手なら、彼の勉強を魔王様が教えて下さるんですか？」

「まさか」

「ですが勇者教育を受けたのは魔王様です」

「配下のモンスターに仕事を割り振るのも魔王だよね」

「こればっかりは配下に任せきつにしていいものではあつませんよ」

「配下を信用してるのはよ」

「その信用に答えますからぜひとも間近で見ていて下せりなこと」

お互に相手の台詞に食い込むよつて言葉を投げかけ合つ。無言で睨みあうが、やがて私はため息をついて両手を挙げた。まあ、仕方ない。今回は譲つておこい。

それにしても面倒くさこ。心の底から面倒くさこ。

「授業に参加してもいいけど、ソファの上で寝つ転がつて見ていい？」

本読んだりしながら、と言つて終わる前にジョシュの鞭が唸つた。痛い。

「私のモチベーションが下がるので却下です
ジョシュのかよ。

「もちろん、彼らのモチベーションも下がるでしちうね。そもそも魔王様は、自分より幼い子供たちが一生懸命勉強に励んでいるのこ、

自分一人がその傍で遊んでいて心苦しくならないんですか?」「

ジョシュが実にトゲトゲした口調で言つ。

私はジョシュの言う様子を想像して首を傾げた。

何かしら小難しいことを喋るジョシュ。一生懸命ノートを取る子供一人。その後ろでソファに寝つ転がつて雑誌を読む自分。その状態は、

「すつごく気分いいけど?」

直後にジョシュの教育的指導が飛んだ。

その後、一時間ほど正座させられ説教を受けた私は勇者サマ達と一緒に勉強することを約束する羽目になつたのだった。

前途洋々過ぎて涙が出そうだ。まつたぐ!

第14戦 敵を知り己を知らばスバルタ（前書き）

今回は世界観とか勇者サマたちの属性とか能力値とかその辺の話です。

第14戦 敵を知り己を知らばスバルタ

ピールが一緒に勉強（というか正しくは勇者修行？）をする」となったので、一度勇者サマとともに一人のレベルと能力値を計測しようということになつた。

ここで簡単に説明をしておくと、個人のレベルと能力値というのは計測せずともある程度自覚できるものである。ちなみに私の母は「分かるわかるか！」とよく言つていた。異世界人である母には関知できないもののがある。

当初、勇者サマの口から聞こつとしたのだが、彼奴は自分のレベルを999とか嘯いたので詳細は不明だつた。なんでそんな分かりやすい嘘をつくのかあのガキンチヨめ。

レベルの上限は1000だと言われているが、生きているうちにレベル800を超えることができた人間はそれこそ伝説の勇者ぐらいなものである。伝説によるならその勇者がいたのは混沌とした暗黒時代、一步町から出れば凶暴なモンスターが際限なく襲つてくるような状況だつたらしい。その当時は普通のモンスターが弱めの魔王ぐらいの強さ、すなわち最低でも私以上に強かつたらしい。平和な時代に生まれてよかつた。

現在レベル500を超えている勇者は旅の扉で繋がつていて、星すべてを合わせても、数えるくらいしかいない。一般的な勇者は300前後、400を超えるれば大体敵なしと言われる。弱めの勇者でも200ぐらいはあるんじゃないだろうか。一般人のレベルは大体二桁、屈強な町のおっちゃんなんかだと100から150の間くらいだろう。冒険者などは200ぐらいが平均である。

冒険者と勇者の平均レベルに差があるのは、勇者という職業特有の事情がある。

概して勇者は「こき使われる。何しろ勇者は死んでも生き返る。つまり何度もリサイクルできる。弱い勇者も何度も死ぬくらいの経験をしたら強くなる。一般人なら一回死んだら即終了である分、修行の仕方や経験の積み方にも自ずと差が出てくる。」

で、勇者特有のアドバンテージがある分、普段ですら修行をしているというのに、ひとたび困難が起これば事件解決に駆り出される。それにより、あらゆる無理難題に挑む勇者たちの獲得経験値はちょっととしたものになるのだ。無論、かなり辛い日には遭うだろうが、勇者に依頼をする一般人にとつては他人事なので痛くもかゆくもないものである。

さて本題に戻ると、このガキンチョ勇者サマは新米勇者。経験つつつたつておつかいと日々の勉強ぐらいなもんである。レベル999どころか、100あるかも怪しい。適性やら属性やらもチェックしておくことで今後の修行に生かすこともできるだろ？

と、いうわけで。勇者サマの実力や武器の適性をみるためにも、私は測定石を使うことにした。

測定石というのはその名の通り、指定した相手のレベルなどを調べる一種の魔法道具である。魔法を使えるなら同じ効果の魔法があるのだが、測定石を使った方が確実で精密である。私も疲れないしね。

測定は鍛錬所で行うこととした。勇者サマの測定結果を見ようとモンスターたちが詰めかけた結果である。

瞳を爛爛と輝かせて集まつてくるモンスターたちは正直キモい。私は近くにいたピールに尋ねてみた。

「ピール、こいつらどう思つ?」

「みんなオキ兄ちゃんのこと好きなんだね!」

そうだね。君に一般的な感想を求めるのが間違つてたね。

勇者サマが鍛錬場の中心で測定石を握る。測定石はこぶし大の水晶つぽい鉱物である。握つてしばらくすると、測定石の中から緑色の光が浮かび出でてくる。やがてそれは上空に浮かびあがり、意味ある文字となる。

勇者サマは測定が初めてなのか、魂が抜けてるみたいな表情になつていて。いつそのまま成仏したら私としても楽なんだけど。

私は浮かび上がる文字に目を移す。

運	魅力	賢さ	素早さ	力	守備力	攻撃力	魔力	体力	種族	性別	レベル
1	5	2	8	2	3	1	7	0	3	男	8
3	4	6	2	2	1	3	0	5	人間	2	2
2							3	0			0

思ったより、っていうかかなりレベルが高い。勇者サマぐらいの年齢ならレベルは50ぐらいかと思っていたが。それに能力もなかなかのものだ。魔力と賢さが低く、攻撃力と力がやや平均より低いが、それ以外は平均以上のいい感じになつていて。あれか、もやしつ子かつ馬鹿だけど逃げ足は速いんですけどみたいな。

っていうか、運いいなこのガキ。

ちなみに能力値の上がり方というのは、体力魔力は別として、1レベル上がるごとに全体で1～7値が上がる。子供のころはによきによき伸びるが、大人になると伸びにくい。勇者サマのレベルならば能力値が大体50前後ぐらいが普通である。やっぱ勇者だからだろうか。でも勇者にしちゃ魅力が低いな。勇者の売りは異様なまでの運の良さと魅力の高さのはずなのだが。

さらに緑色の光は文字をつづる。

属性 光・火・雷

いかにも勇者かつ隣村の人間らしい属性だ。
属性というのは大別して八つある。

火 水 雷 地 風 星 光 閻

属性はいくつか持つことが出来て、勇者は必ず光属性であり、魔王は必ず闇属性である。

そして両親の属性もさることながら、生まれ育った土地を支配する魔王にも属性というのは左右される。

何故かといふと、魔王といふのはいるだけで魔力がある程度、ばらまいてしまうからである。成長する際に周囲の魔力を吸収して属性がある程度決まると言われており、そのためその地域を支配している魔王のばらまく魔力に影響されやすいということだそうだ。

私の母に言わせると、「普通信仰する神様とか守護神とかに影響受けるもんじゃないの?」らしいが、そもそも神と呼ばれる存在が人間の近くに姿を現すことは滅多にないのだから仕方ない。

そういうわけだから、勇者サマの出身である隣村はの大蛇魔王ミーミーヤンジャの属性（雷）の影響をかなり受ける。

火の属性は両親からの遺伝だろうか。それともご近所であるツキバ村の先代魔王か、はたまたアリギ村のジジイの影響かもしれない。ジジイは確かに火の属性が強かつた。当人もたまに火を噴くし。

さて、属性自体にはいくつかの特性がある。

まず、魔法関係。

適性のある属性の魔法だと、上達が早く威力が強い。また、属性同士の相性によって効果的な魔法とか無効になる魔法とか色々ある。ややこしいので割愛。

次に精霊関係。

私は見えないので何とも言えないが、世には精霊というものが存在するらしい。で、その人の持つ属性によって契約が結べるとか結べないとか。ぶつちやけ結ぶ気はないのでどうでもよい。

さらに装備関係。

レアではあるが、魔法具というものが世の中には存在する。魔法具と一口に言つても測定石のような魔法道具から魔法の属性を帶びた武器防具などの装備まで色々である。その中にはある一定の属性

を持つ人物でなければ使用・装備できないというものもあるそうだ。ケチ臭い。ついでに言うと、世間一般で言われる勇者の装備って要するに光属性の人間しか装備できない道具だったりする。まあ勇者は必ず光属性だからあながち間違いでもないかも知れない。

そして最後に、性格。

まあ誕生日占いばかりのこじつけだとは思うが、属性とは性格に影響を及ぼすというので属性による性格診断というのがある。

ちなみに勇者サマの属性で言うと、

光は正義感が強く、純粹なタイプ。

火は情熱的、プライドが高い、突っ走るタイプ。

雷は目立ちたがり屋、瞬発力が強い、飽きっぽいタイプ。

という感じになる。

光の項目の『純粹』を『単純』に置き換えるとまんま勇者サマだ。属性診断も捨てたもんじゃないな。大蛇魔王のミーミーヤンジャもアリギ村のジジイも性格占いにはこれっぽっちもかすっちやいないけど。いや、ミーミーヤンジャは飽きっぽいしじジイはエロにかけては情熱的だな。突っ走るし。エロ方面だけだけど。一部は当たってるのだろうか。

そんなことをつらつら考えていると、測定石から放たれた光は徐々に霧散していった。

「次はピールですね」

それまで熱心にメモを取っていたジョシュがピールに測定石を渡した。

ピールは緊張した面持ちで測定石を握つて鍛錬場の真ん中に立つ。

再び測定石から緑色の光が現れた。

種族	人間
性別	男
レベル	64
魔力	110
体力	220
魔力	110
体力	220
攻撃力	48
守備力	42
力	52
素早さ	28
賢さ	52
魅力	37
運	18

こちらも思ったよりレベルが高い。それに魔力もたくさんある上に賢い。ピールは思っていた以上の逸材だったようだ。勇者サマと組み手をさせてかなりいい勝負になるだろう。

……運が悪いのは、勇者サマに振り回されてる辺りで察しがつく。
どんまい、ピール。

ありや、意外だ。アリ、ギ村の子供なのにピールには火の属性がない。むしろ水属性がある。

正直予想外だったが、地も水もどちらも回復魔法が使えるはずなので、大いに活用させてもらおう。それに相性悪い属性も試していなかったほうがいいだろ？

ちなみに性格診断で行くと地はマイペースで楽天家タイプ、水は癒し系かつ穏やかなタイプらしいがこちらもやはりまんまである。

測定石の光が収束する。

ピールは満足げな表情で測定石を持っていたかと思つと、私のところにトテトテと歩いてきた。

そして小首を傾げて、

「はい、次はマオさんの番だよ」

「…………は？」

言われたことが分からなくて首を傾げる。するとピールはきょとんとした顔をした。

「だって、マオさんも一緒に勉強するんでしょ？」

「そりだぞ、僕たちだけ測らせて自分は秘密にするなんてずるいぞ！」

勇者サマがピールの尻馬に乗つて言つ。黙れ猪突猛進イノシシタイプめ。

私はやれやれとため息をついた。

「私は自分の属性ぐらいは知つてるからいいの。それに魔王の能力値なんて極秘事項に決まつてるでしょ」

そりや近隣魔王の」とく強大な力を持つならいくらでも教えてやつてもいいが、私は弱小魔王。日々己の弱点を隠して防衛するしかないのだ。

「ずるいぞ魔王！ ヒミツシユギなんて生臭いぞ！」

「当初から私の能力値測定するなんて言つてないでしちゃうが！」

つていうかなんだ生臭いって。それを言つなら水臭いだろ。私はナマモノか。

「せっかく測定石があるんだし測るつよ。ね？」

「口と笑つてピールが言つが、そんな笑顔にほだされるほど私は甘くない。でも私の後ろで悶えてるモンスターたちが無理やり測定してきそうでやや怖い。

どうやつてこいつらをかわそつかはたまた逃げ出そつかと考へてゐるとき、ジョシユがこほんと咳払いをした。

「魔王様の能力値は私が責任を持つて測つておきますので、お一人は休憩してきて下さい。お茶の準備が整つています。休憩が終わつたら今日は体力づくりをしますのでそのつもりで」

威圧感たつぱりに言えば、お子様一人はよい子の返事をしてうちに戻つていつた。先生の言つことは素直に聞くらしい。あいつらの中で私の位置づけがどうなつてゐるかちょっと気になる。知つたら多分へこむだらうけど。

「ジョシュ、ありがと。助かった」

去つていく一人を見送つてお礼を言つと、ジョシュは田を瞠つた。

「何をおっしゃつてるんです、魔王様。測定はしてもらいますよ」

「え」

逃げようとするとそれを読んでいたかの如く腕を掴まれた。これだから頭のいい奴は！

「教育するのは勇者サマでしょ！？」

私が身をよじつて逃げようとすると、ジョシュは相変わらずの無表情で私を見た。

「ええそうですとも。ですが魔王様が彼よりレベルが低くなつては大変でしちう？ そのためにも魔王様のレベルも把握しておかないと」

もつともな意見ではあるが、なんか私もスバルタでしごかれることになりそうで怖いんだけど。つていうか絶対しごかれる。

「大人しくなさつてくださいね」

そう言つと、ジョシュは私に無理やり測定石を握らせた。淡い緑の光が浮かび上がる。

種族	半有翼人
性別	女
レベル	168

属性	闇・風・星
力	6
守備力	102
攻撃力	51
素早さ	96
賢さ	122
魅力	77
運	30

ああもう、いやだいやだ。久しぶりに見る自分の能力値はやっぱ
りあまりよろしくない。宵つ張りの朝寝坊をし続けたせいかレベル
の割に力と攻撃力が一向に上がっていない。まあこれはぐーたら生
活になる前からそうだったんだけど。それに体力もない。

他の項目は平均値より低めだし、なぜか昔から運が悪い。運が悪
いからこそ魔王にまでなっちゃったのかもしれない。

属性の風は父親譲り。有翼族は基本的に風属性だ。星属性は生ま
れ育つたところの魔王の影響だ。

性格診断によるならば、闇は偏屈、狡猾、自己中心的なタイプ、
風は気まぐれで社交的かつ面白がりなタイプ、星は大雑把、ロマン
チスト、面倒見が良いタイプ、らしい。性格診断は当たらずとも遠

からず、か。

ちょっとと話はそれるが、この診断だと魔王になつた奴は全員閻属性を持つわけだから、魔王は全員偏屈で狡猾で自己中心的な奴らだとこうになると。思い返すと實にその通りである。ちょっと悲しい。

「……レベルが168ですか」

私が現実逃避に走つていると、地を這う様なジョシュの声が聞こえてきた。

「普通の冒険者でもレベルは200くらいありますよね？」

「し、四捨五入すれば200でしょう」

十の位をだけど。

私が屁理屈をこねると、ジョシュは深々と、そりやもう深々とため息をついた。

「今後の体力作りには、魔王様も参加していただきます。異論はありませんね？」

「冷え冷えとした声で言われて、否やを言える奴がいるだろ？ か。いやいない。

こうして私もジョシュによるスバルタ特訓の生徒になることが決定したのだった。

第14戦 敵を知り己を知らばスバルタ（後書き）

補足説明

レベルによる平均能力値の出し方としては、体力魔力を別にして、

20歳まで レベル × 4 ÷ 7

20歳以降 レベル × 3 ÷ 7

のようになると平均能力値になります。

体力については20歳まではレベル × 4 くらいが目安です。

魔力は適性によります。

まあ今後この能力値が活躍する話はほとんど出でこないのでご安心ください。

第15戦 本氣の遊び パーティング

早いもので、ガキンチョ勇者さまと初めて会った日からすでに一ヵ月が過ぎようとしている。もうすぐ夏本番がやってくる。ピールはともかく勇者さまは今や私以上にうちに馴染んでいる気がする。ちょっと、いやかなり図々しいぞ勇者さま。

それはさておき、ピールが来てからも復習を兼ねて勉強をやったりと最初からやつてみたのだが、ピールが賢いこともあってあつとう間に終わってしまった。

深く学問を究めるのもあつちやあつだと思つが、勇者に必要なのはじつちかつて言つと腕つ節である。それにいつまでも勉強を続けるなんて退屈すぎる。私が。

何しろ何故か勇者さまと一緒に勉強することを強制されている私である。あんまり深く掘り下げた内容になるといけない恐怕も出てくる。ジョシューはちょいちょい確認テストなるものをして、その点が悪いと勇者さまの場合はおやつ減、私の場合はおやつ抜きになる。私の方が大人だから、という理由らしい。差別だ。まあこれでも母から色々無駄知識込みの英才教育を受けた身である。ペナルティの割合は一割を切つていた。

だがしかし、それでも毎日勉強漬けだとうんざりしてしまうのが人情つてもんだろう。

せつかく能力値の測定もしたんだし、魔法とか体術とか教え込みたいと思つじやないか。もちろん私は見学で悠々と高みの見物だ。

先日のジョシューの説教などきれいさつぱり忘れていた私は暢気にそんなことを考えていた。

そして現在私は子供一人と鬼ごっこの真っ最中だったりする。

「魔王！ 逃げるなー！」

「待つてよー！」

待てと言わられて待つ馬鹿はいない。

私は背後から聞こえてくる声でお子様一人の位置を把握すると、彼らの死角を目指した。

体術を教えるにしろ、まず基本は体力作りである。全身運動の一環として採用されたのがこの鬼ごっこ（正しくは勇者ごっこ？）だ。

鬼ごっこルールは至って簡単。

彼らが私を捕まえられたら勝ち。制限時間まで逃げ切つたら私の勝ち。ちなみに制限時間は一時間。地味にキツイ。

現状レベルの差があるので、圧倒的に私の方が有利なはずである。そのハンデを埋めるためか、お子様一人はいかな手段を用いてモノKというお達しが出ている。

ちなみに、負けると地獄の宿題三倍増量が待つている。私は嫌だ。絶対に嫌だ。この年で宿題とかありえない。

身体能力は私の方が上だし経験の差が物を言はず、と思つていたが甘かった。

一対一は思いのほか厳しい。

まず勇者サマは異様にすばしっこい。気を抜くとすぐさま追いつ

かれる。それにピールも洞察力に優れているのか、私が死角に隠れた後もすぐさま居場所を突き止められる。その上粘り強い。勇者サマの追跡をかわしたところにピールが待ち構えているんだからたまたもんじゃない。

鬼ごっここのフィールドが限定されているのも面倒なものだ。

鍛錬場を中心には、端から端まで一辺が一百歩程の五角形に結界が張られている。それより外には逃げられない。隠れる場所は少ない上に狭い。

「ほらほら、鬼さんあっち行け」

私は一応魔王。それなりに魔法も使える。私に半分流れている有翼族の血が潜在的に高い魔力を持つているのだ。

というわけで、背後に迫ってきた初步的な幻惑魔法を勇者サマに掛けた。

勇者サマは呆気なく魔法にかかつたが、次の瞬間にはすっ転んで地面とこんにちは、すぐさま正気に戻ってしまった。ちっ、しぶとい奴だ。鼻赤くなってるぞ。

一瞬そんなことを考えていると、ふと背後に入の気配を感じた。さつと脇に避けると、後ろから近付いていたピールが見事に空振つた。

「あ！」

ピールが残念そうな声をあげる。

「気配の消し方はあと一步、かな」

背後を取るまでは良いが、獲物に近付いたせいで緊張して呼吸が荒くなつては意味がない。

ん？ っていうかもしかして呼吸が荒いのは単にピールの体力がつきかけてるだけか？

距離を取つてから一人を見てみると、どちらも肩で息をしていた。

開始からすでに四十分だ。私は途中で魔法使つたりしていた（見物していたモンスターにブーリングを飛ばされた）から体力の消耗はそれほどでもないが、翻弄されまくりのお子様一人はすっかり疲れているのだろう。

もはやこの勝負は私が勝つたも同然だ。

「そろそろ降参しどく？」

私は闘技場の中心でニヤニヤと笑っていた。我ながら大人げない。いや、でも私魔王だし。

「するわけないだろ！」

私の言葉に勇者サマがムキになつて突っ込んでくる。
私は背後の木立に逃げ込もうとしたのだが、

「そろそろ頃合いですね」

ジョシュの言葉とともに、さつと結界の範囲が狭まつた。
私達のいた修練場の周りを結界が囲む。驚いた勇者サマが固まつている。ピールはのんびり周囲を見渡していた。マイペースだな、相変わらず。

「ちょっと、ジョシュどうこうこと！？」

私が思わず振り返ると、結界の外にいるジョシュはしれつとした様子で言った。

「ええ、残り一十分弱ですので、範囲を狭めてみました」
「みました、じゃない。いくらなんでも狭すぎる。端から端まで五十歩くらいしかないと。」

「あ、それから魔王様はこれ以降魔法を使わないでくださいね」
「はあ！？ そりやないでしょ、ジョシュ。あんたは私に負けるつていいたいの！？」

いくらなんでも一十分もの間、魔法なしで子供と追いかけっこ出

来る自信はない。すでに明日は筋肉痛だらうと確信してゐるほど動いてゐるのに。

「いえ、是非勝つていただきたいですよ」

ジョシュの声は嘘臭いぐらい爽やかだ。表情が相変わらずの欠如しているが。つていうかそれ皮肉でしょ。絶対に皮肉でしょ。

「頑張つて足搔いてください」

……ここつ、後でぶん殴つてやる。

三分としないうちに私は結界の際に追いつめられていた。勇者サマとピールがじりじりと近付いてくる。なぜ一人が慎重なのかと言うと、さつき一人同時に飛びかかったのを私が避けたせいで頭突きあいになつたからである。かなり間抜けだつた。笑つたらモンスターから非難轟々だつた。いいじゃん別に。

ゆつくりと距離を縮めてくる一人に焦る。山もりの宿題なんてしたくない。

「ふん！ ここで会つたが百年目だ魔王！ 観念しろ！」

勇者サマが高らかに宣言するが、多分その慣用句の使い方間違つてるから。会つてまだ一ヶ月だから。

「えつと、恨みはないんだけど」めんね

ピールが申し訳なさそうに言つ。しかし彼も宿題をやりたくないのはば」「同様らしい。

近付いてくる一人を見ながら私は脳内で計算する。

そして即座に結論を出した。

「悪いけど、私も捕まる気はない」

にやりと笑つて私は体に力を込めた。
そして力強く空へと飛翔する。

「なう！」

お子様一人が呆然として私を見上げている。ふふん、いい気分だ。

「するいで、魔王！」

勇者サマが喚く。

「魔法は使っちゃ黙呑つて言つたけど、空飛んじゃ黙呑となは言われてないしー」

これでも私は有翼族のハーフ。普段は羽を体内に収めているが、その気になれば空を飛ぶことが出来るのだ。

これぞ切り札。高みの見物だ。

「ほつほつは、私を捕まえられるもんなら捕まえてみたら?」

上機嫌で笑うと、モンスターたちから大人げないという声が上がる。いいじゃん、魔王なんだから。獅子は兎相手でも全力出すつていうし、魔王が勇者相手に全力を出すことの何が悪いのか。いや、むしろ全力を出すことこと礼儀！ 決して自分がペナルティ食らいたくないからとか宿題面倒くさいとかそんなもん子供にやらせるべきだろとかそういう理由ではない。ないつたらない。

当初は飛び回る私を追いかけまわしながら喚いていた勇者サマだが、残り時間が十分を切った時点で癪癩を起して地面に寝転がってしまった。

卑怯だなんだと言つているが、そもそも彼の戦う相手であるモンスターやら魔王やらが正攻法で来てくれると思つてゐる時点でおかしい。つていうか、空を飛べるモンスターや魔王が不利な地上戦を続けるわけがないだろうに。

逆に粘り強さを見せるのがピールだ。先ほどから修練場に転がつてゐる石やら木製の武器やら投げつけたりしてゐる。

全部かわしているが恐ろしい。ピールは意外と手段を選ばないタイプのようだ。誰だあいつを優しいとか言つた奴。それとも小さい子供が虫の羽をむしるのと同じ感じなんだろうか。どっちにしろアレだな。

「オキ兄ちゃんも手伝つてよ。手が届かないなら届くようにしよう?」

眉を下げたピールが言つているが、やるうとしていることを考えると空恐ろしい。癪癩を起こしている勇者サマは嫌そうな顔をして断つていたけれど。届かないんならう知らない! だそうだ。ホント、お子様だな。

そういうえば昔、母に似たような話を聞いたことがある気がする。なんだつて、ホトトギスつていう鳥が鳴かない時にどうするかみたいな話だつた。ピールは鳴かせてみせようの人のタイプだな。勇者サマは殺してしまおう、のタイプか。きっとその言葉を残した人は勇者サマに負けず劣らず我がまだつたんだろうなあ。

残り時間が三分を切つた。

以前として勇者サマは地面に寝転がっており、ピールは私を落とすと物を投げつけてくる。いい加減、ピールの腕も痛いだろう。出来ることならそういうものが絶対に届かない場所を飛んでいたかったのだが、結界に天井があつた上にもう一つ切実な問題が浮かんできていた。

飛ぶのに疲れてきたのである。

通常の有翼族にとって、空を飛ぶというのは歩くことと同じだ。運動不足でなければ大抵は何時間だって飛んでいられる。

だが、半分人間の血が流れている私にとって、空を飛ぶというのは走ることと同じくらい大変なのである。奇跡的にい条件が重なれば一時間ぐらいは飛べるかもしぬないが、普通は一時間くらい。それも普通に飛んでいて、だ。

さつきからひつきりなしにピールが物を投げつけていたせいで結構な体力を消費している。例えるならばそう、障害物競争と走り込みを一緒にしているようなもの。ばれないように必死で平静を装っているが、体力が底を尽きかけている。

徐々に高さを保てなくなつていた。今は私の身長一一つ分くらいの高さをギリギリ保つていて。残り三分なので何とか切り抜けたいのだが、ピールの追撃の手が緩まない。

「マオさん」「めんなさいーー」

申し訳なさそうな顔をしながらポンポン物を投げつける少年にちよつと殺意が芽生えた。

「ごめんで済んだら魔王はいらなーいっつーのー」

いや、別に魔王はトラブル収束をせるための存在じゃないけどね。

そして残り時間が一分を切つたとき、一瞬気が抜けた私は高度が下がり、ちょうど勢いをつけてジャンプしたピールに足首を掴まれ

てしまった。

「やつたあ！」

ピールが歓声を上げる。

「うげ」

私は潰れた力エルよろしくぐもつた声を上げた。ピールに足首を掴まれたせいでバランスを崩し、地面に墜落したのだ。痛い。

「やれやれ。どうやらピールの粘り勝ちのようですね」

「見りやわかんでしょう！」

半ばハツ当たりで言えば、ジョシュは鼻で笑った。

「ええ、改めて言われると反骨精神が沸くかと思いまして」
こいつが笑うときつて大概ろくでもないなこんちきしう。

そして奴は悪魔の宣告を下した。

「それじゃあ、ピール以外の二人には宿題を出しますから、明日には提出すること、いいですね」

なんてこつたい。

私は疲労困憊で立ちあがらることすら出来ない。体中が痛いし、ペンを持つのだつて苦労しそうだ。ジョシュをぶん殴つて逃走するのは言わずもがな。

しかし元気な奴がいた。

「なんでだ！？ なんで魔王は捕まつたのに僕も宿題があるんだ！？」

先ほどまで地面と仲良くしていた勇者サマがジョシュに猛然と抗議している。

「それはあなたが魔王様を捕まえようとしていたからです。棄権していたのだからペナルティは当然でしょ」

ジョシュが呆れたように言つ。今回もジョシュと同意見である。つていうか、私一人でペナルティ食らひとかいやだ。死なばもろとも、旅は道連れ地獄行き。

ジョシュの言葉に勇者サマはぐつと言葉に詰まった。

「ピールは諦めずに色々試して魔王様を捕まえられたのです。普通

の子供なら癪癩を起して諦めてもいいでしょうが、あなたは自分が勇者であるということをお忘れなく

勇者が背負う使命は、往々にして重大な使命だ。

私が知っている猛者で言えば、穴が開いて今にも決壊しそうな堤防を自分の体で半日近く塞いだとか、男手が所用でいなくなつて、村を襲ってきた盗賊を一人で討伐したとか、はたまた村にいきなり開いたとかいう大穴（結局巨大モンスターの巣だった）に一人つきりでもぐりこんだりとか。一般人なら到底耐えられるものじゃない。肉体的にも、精神的にも。

「困難にぶつかつてしまつたら簡単に諦める、そんなことでは何もできないということを肝に銘じておくことです」

そう言うとジョシュは見物していたモンスターたちを解散させて去つていった。

後に残されたのはオロオロとしたピールと、悔しそうに唇をかみしめている勇者サマと、微妙に決まりの悪い私。

「…………オキ兄ちゃん、大丈夫？」

ピールが心配そうに勇者サマの顔を覗き込んでいる。

勇者サマはぱつと顔をピールから逸らした。

「大つ嫌いだ！」

誰に対しても言つた言葉かは分からぬが、勇者サマは言い捨ててジョシュが去つて行つた方向とは反対に駆けだした。おお、青春チックだ。

「兄ちゃん、待つて！」

「待つもんか！」

ピールの制止にも関わらず、勇者サマは我武者羅に走つて行つた。

そして思いつきり結界にぶつかつた。

どうやら結界を担当したモンスターが解除するのを忘れていたら
しい。今回の結界は壁タイプだったので、かなりいい音がした。だ
からピールも止めたのに。

勇者サマは気絶したのか倒れたのちはピクリとも動かない。やっぱ
死んだか？ 村に送り返した方がいいもしない。触るの嫌だしピ
ールに任せようかな。

「オキ兄ちゃん！」

ピールが慌てて勇者サマに駆け寄っている。

私は面倒事になつたら即座に逃げられるよう、結界解除の魔法を
使つた。私は関係「ザイマセンって奴だ。

「よかつた……寝てるだけみたい」

勇者サマの安否を確認したピールがホッと息をついている。

ピール、それ寝てるんじゃないから。気絶だから。もじくは意識
不明だから。

私は顔を引きつらせつつ周囲を見渡した。こんなことが勇者サマ
大好きな過保護モンスターにバレたらひどい目に合つこと請け合い
だ。私は悪くないのに監督不行き届きだなんだと言われるに違いな
い。あのモンスター・ペアレンツともめ。

周囲にモンスターがいないのを確認してから私は勇者サマに近付
く。勇者サマはそりやもう見事に目を回している。

「ま、マオさん。どうしよう……？」
ピールが今にも泣きそつた顔でじらじらを見ていた。
ので、

「おやすみ」

魔法でピールを眠らせた。

子供一人を抱えて移動するのは骨だったが、数分後には一人を下生えの草が柔らかい木陰へと移動させることができた。これで勇者サマとピールを仲良く並べておけば、激しい運動の後に疲れて昼寝をするお子様の図の出来上がりである。

うむ。あくまで子供たちが疲れて寝ただけだ。勇者サマが気絶したとか知らない。私のせいじゃない。全部夢だ夢。

子供だし、起きたら寝ることなんて忘れてるだらう。うふ、完璧な証拠隠滅だ。

しかしさすがに疲れた。二十分も飛んだ挙句に子供抱えてえっちらおつちら歩いたのだ。すやすやと眠っているピールを見ると眠気が襲ってくる。

五分だけ寝ておこつ。どうせ後は宿題地獄だし。

一時間後、一向に戻らない私達を探しに来たジョシュに見つかり、私と勇者サマの宿題の量はさらに増えたのだった。

第16戦 ローレンハルトの悲劇

ローレンハルトの悲劇といつのを「存じだらうか。

ローレンハルトの悲劇、それはかつて勇者たちに震撼を与えた事件である。

+++

昔々、ローレンハルトといつ少年がいた。

ローレンハルトは美丈夫で、腕の立つ剣士だつた。

彼には美しい幼馴染のマリーといつ少女があり、その少女と結婚を約束していた。

ところがじつに、結婚を半年後に控えたある日、彼は突然勇者になってしまった。

この場合の勇者になるといつのは、思春期特有の自分は特別であるといつ考えにとらわれたとかそういうわけでなく、単純に勇者の職業に任命されたといつことだ。

基本的に勇者といつのはある日突然正体不明の何者かによつて任命されるものであるから、彼はその何者かのお眼鏡にかなつたのだ

るつ。

おりしも、彼らの住む地域を支配する魔王が暴れまくって被害が目に余るようになったころ。彼は当然のことく魔王討伐に駆り出された。

帰つたら結婚しよう、と恋人に約束して。

さて、彼は討伐に向かう途中、ある酒場で情報収集をしていた。と思つたら翌日、彼は見知らぬ女とベッドで素っ裸で一緒に寝ていた。

見知らぬ女はひどく醜い顔つきだったが、ローレンハルトに無理やり襲われたと言い、ローレンハルトに責任を取るように迫つた。その事実は瞬く間に広まり、ローレンハルトはその女と結婚せざるを得なくなつた。

愛し合つた恋人にも別れの手紙を送つた。

信じられないような現実から逃れたいのもあつて、とにかく使命が先だと魔王を倒しに向かつたのだが件の女のことで散々魔王にからかわれ、動搖した挙句に死んでしまつた。かなり間抜けだが、勇者も人間なのだという証拠だらう。

教会で生き返つたローレンハルトの目の前にいたのは、手紙と行き違ひ彼を心配して駆け付けた恋人のマリーだつた。この時にマリーに事情を打ち明けられていたならば、ハッピーエンドもありえたかもしけない。

が、事実上彼の妻となる女はマリーを押しのけローレンハルトにしなだれかかり、熱烈なキスをマリーに見せつけるようにしたとい

う。

当然のことながら、ローレンハルトは振られた。
さらに悲惨なことに、その翌日には彼は勇者でなくなっていた。
唐突に勇者としての資格がなくなつたのだ。恐らくローレンハルト
は勇者の資格を与えた何ものかに見放されたのだろう、というのが
一般的な見方である。

そうして彼は仕事も信頼も愛する恋人も失つたのだった。

その後、ローレンハルトが討伐する予定だつた魔王は、なんとマリーを口説き始めた。マリーさえ妻になれば暴れないと言い、何がどうなつたのかマリーもそれを了承した。

その噂を聞きつけたローレンハルトが魔王の元に乗り込んだところ、すっかりラブラブとなつた魔王夫妻によつてコテンパンにされ追い返されたのだそうだ。殺されなかつたのは魔王夫婦の慈悲だつたのか、はたまた生き地獄を続けさせるためなのか。

結局ローレンハルトに残されたのは妻だけだつたが、この女が醜い上に実に悪妻だつた。

そのためローレンハルトのその後の人生は、そして最期は実に悲惨だつたと言われる。

これがローレンハルトの悲劇だ。

+++

この話にはいくつかの裏話がある。

有名なところでいえば、ローレンハルトに襲われたというのが狂言だったということ。適当に酔いつぶしてそれらしく装つたらしく。勇者というのは概して生活が保障されるので、妻となつて一生安楽な暮らしをと期待してのことだ。

もうひとつ有名なのは、魔王は元々ローレンハルトの恋人であるマリーに懸想していたということ。これは結婚後のろけ話でその魔王自身が語つたことである。マリーの結婚が嫌で暴れていたのだとか。といっても件の女はその魔王が仕掛けたわけではないが。

当時この話は勇者たちを震え上がらせた。

勇者というのはどこかの村でも確保しておきたい人材である。その上将来がかなり保障されている上に死んでも帰つてくるし生き返るしで配偶者としてはなかなかの好物件である。ゆえに、どの勇者たちも多かれ少なかれ、その手のお誘いを受けたことがある。権力者の娘だの普通の村娘だの枚挙に暇がない。遊びから本気まで、そういうお誘いに乗る勇者も少なからずいることは事実だ。

しかしその責任を取られた挙句勇者としての資格を失うなどという恐ろしい事態は、空前の出来事だったのだ。

逆に学者たちは非常に興味を持った。どういふ要素が彼から勇者の資格剥奪に至らしめたのか。常に幸運に見舞われるはずの勇者がこのような悲劇の主人公となつたのはなぜなのか。ローレンハルトが死んで一般人の記憶からこの悲劇がすっかり風化してしまっても、学者たちの間では今なお激しい討論がなされている。

学者たちの探究心はローレンハルト本人からしたら余計なお世話に違いない。というか、古傷をフォーアでえぐられてる気分だろ？いや、本人もう他界してるけど。

ちなみにこの逸話は、魔王の間では抱腹絶倒の笑い話として広まっている。勇者を殺すには刃物はいらぬ、醜女一人がいればいい、と魔王総会の後の酒盛りなんかでは今でも言われているくらいだ。

で、そのローレンハルトの悲劇をなぜ今さら書いつのかといつと、

「ある程度女性あしらいが出来ない」とこよひにけむりかわせりと思つ
のよね。あとそういう知識

「まだ彼らには必要ありません」

「いや、でも世の中には小さい男の子が好きつていつ趣向の女性も

いるつて言つし。Hンガチヨ」

「なんですかその『えんがちよ』といつのは

「どうでもいいでしょ、んなこと」

勇者サマの教育プランについてジョシュと話しているからだったりする。

「大体ローレンハルトって女性経験がなかつたからその女性の言つたことをうのみにしちやつたわけでしょ？ ちょっと経験だか知識だかがあればやつたかヤつてないか

「魔王様。女性がそのようなことを言つるのは感心しませんー。」

私が皆まで言つ前にジョシュが遮つた。別に女性だらつと言つときや言つうんだと反論しようとしたが、

「……ジョシュ、顔赤くない？」

「幻覚です」

「いや、赤いよね」

「魔王様の目に赤い紗がかかつてているだけです」

「こいつ言い訳のセンスないな。っていうかうるたえ過ぎだらう。」

目が泳いでる上に普段の鉄面皮がいささか崩れている。

私はジョシュが顔を赤らめているのを見ながら驚いていた。まさかこいつにこんな弱点があるとは。でもまあ納得できるところはある。見た目だけは大人だし知識もあるが、年齢的にまだ生殖も必要ないし。モンスター間では若い女の子やら男の子同士でやるような猥談もしないに違いない。形態が違うすぎるし。

「ジョシュもまだ若いもんねえ」

「若いつていうかまだ0歳だけど。今で0歳1ヶ月か。若いつてレベルじゃないな。」

「…………魔王様の品性が低いだけでは？」

ジョシュが不機嫌に私を睨んでくる。

しかし赤い顔で睨まれたところで怖くもなんともない。むしろ一ヤニヤしながらジョシュの顔を覗き込む。ジョシュはものすごく嫌そうな顔をして顔をそらした。

「そうかな？ 実際問題勇者はあちこちから引く手あまたでしょ。強硬手段に出ない人間がいないとも限らないし」

それぐらい勇者という存在は一般人にとつては欠かせないものなのだ。あと必要性云々の前に、勇者は美形が多いっていうのも理由にあると思われる。うちに来てる勇者サマは微妙だが。いやでも成長期前だしな。

「ですがまだ早いと思いますよ。少なくとも、まだ彼は勇者として使える段階ではありません。最低でもあと一年は勇者として必要な技量を仕込む必要があります」

きりっと顔を引き締めたジョシュが言う。

……個人的に、勇者には女に限らず人をたらしこむ技術も必要だと思うのだが。そして適度にいらないものは受け流す技術も。もしかしたら成長する中で勝手に育つかもしれないけど。

だが、

「それもそうだね」

私は軽くうなずいてジョシュに同意した。

なんとなくだが、これ以上言い募つたら藪蛇になりそうな気がするからだ。逃げ道は適度に残しておいてやろう。

それに今回はジョシュの弱みを握れたのだ。大収穫だらう。私なんぞに言われたくないだろうが、心中でこっそりつぶやく。

ありがとう、ローレンハルト。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？（前書き）

能力値出でこないとか言つてましたが運の項目についてだけ若干補足的な話です。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？

それは勇者サマの素朴な疑問だつた。

「能力値の運つて、どういう意味なんだ？」

勇者サマの言葉にピールが首を傾げた。

「運つて、そのままの意味じゃないの？ ついてるかついてないか
つてことでしょう？」

「でも変じやないか？」

勇者サマがなおも言い募る。

「レベルが上がれば能力値は上がるんだりう～、つてことば、レベ
ルが上がれば上がるほど運が良くなるつて変じやないか？ 運が良
いって、幸せになるつてことじやないのか？」

「別に変じやないと思うけど……？」

ピールはいまいち理解できていないよつだ。能力値は生まれたと
きから馴染みのあるものだから疑問に思つたことがないのだりう。

ちなみに私は勇者サマの言つことが理解できた。

「どうか、その疑問は母が昔幾度となく口にしていたものなので
ある。

「つまり勇者サマは、なんで経験積んだだけで他の人より『運』つ
ていう身体能力じゃないものが良くなるのかつて不思議なんじょ
う？」

私が言い直すと、勇者サマは大袈裟にうなずいた。

レベルが上がるところのを言いかえると、経験を積む、修行する

とこうことになる。

修行することによつて攻撃力や守備力、力や素早さが良くなるのは当たり前だ。

経験を積むことによつて賢くなつたり、人間が磨かれて魅力が増すのもまあ納得できる。

が、運といつのは能力云々が関係ない。人力が及ばないからこそ運なのだ。

とはいへ、「日本の科学力は世界一いい!」と言つてゐた母からすれば、筋肉量でなく能力値で強さが決まるということ自体が非科学的でおかしいと言つていたがそこは深く考えないようにしてゐる。その辺は学者の仕事だ。

能力値について言えば私も色々な見解を持つてゐるが、ここは先生に任せらるべきだらう。

ジョシュへと視線を送ると、奴は真面目腐つた顔でうなずいた。

「そもそも、運の項目が良いとなる状態といつのお教えしましょう

そいつでジョシュは黒板に文字を書いた。

エイサ	レベル100	運50
ホイサ	レベル100	運100

書き終わるとジョシュは小さく咳払いをした。

ちなみにエイサもホイサも過去の比較的有名な勇者の名前である。

「この二人がこれ以外の能力値が同じとき、レベルを上げるために

珍しい薬草を取つて貰ふことになりました。さて、どうなるでしょうか

「う

あ、なんとなく想像ついたぞ。

「ホイサは見つけるのに苦労するけど、ホイサはすぐに見つかると思つ」

ピールが答えると、ジョシュが満足そうにうなづいた。
「その通り。しかし得られる経験値は一人ともほとんど変わりません」

「ええ！？ なんだ？」

勇者サマが不満そうな顔をした。

気持ちは分かる。が、勇者サマは勇者である限りホイサ側の人間なのである。魔王がやさぐれて勇者に冷たくする理由も分かるというのだ。

「やることの難易度は変わらないからです」
「事実とくのは時に冷酷である。

「要するにー、苦労するのはこっちの勝手ってこと？」

私がげんなりしながら言つと、ジョシュはうなづいた。

「この場合はエイサとホイサが運以外は同じ能力値という仮定です。で、苦労の有無にかかわらず同じ経験値になります。逆にホイサが足が悪い、目が悪いなどの条件があれば簡単に発見出来ようと経験値が多くなります」

「するくないかそれ！」

勇者サマは憤然としている。

「運とくのはそういうものです」

「それじゃあ、レベルが上がると運が良くなるつていうのはどうしたことなの？」

私は話を戻した。個人的に運の能力値が低い人間としては気に入るとこりうだ。

「人間といつのは、生きているのが幸運であるといつ前提があります」

……なんか哲学的なのが来た。

「レベルが上がるといつことは、それだけ経験を積んでいるといつことになります。レベルが上がれば上がるほど、より多く、より重い経験を積まなければなりません」

確かに子供のこりはともかく、大人になつたらレベルが上がりにくいよなあ。昔はちよつと体を鍛えたくらいでレベルが上がつたのに。

「レベルがたくさん上がるほどどの経験をしても生きている。それこそ運がいいということです」

「もーちよつとギタイテキに説明してほしいぞ」

「それを言つなら具体的、です」

律儀にもジョシュは勇者サマの間違いを訂正していた。さすが腐つても嫌味でも陰険でも先生だ。

「そうですね、先ほどのハイサ達の話で考えてみましょうか」

そう言つてジョシュは黒板に人間らしきものとモンスターらしきものを書いた。ジョシュを今度から画伯と呼ばうかどうか迷うくらいの素晴らしい出来だ。なんだろう、アバンギャルドな抽象画？

「…………先生、それ何だ？」

「オキ兄ちゃんつ、そういうのは言つちや駄目だつて！」

実際に正直な疑問を口に出した勇者サマの口をペールが慌てて塞ぐ。ちよつと遅いけど。

「……仮にエイサとホイサが同条件下で強いモンスターと戦つ」とになつたとします」

なんとかスルーしたジョシュだが、心なしか元気がないようだ。どんまい。

「運のよくないエイサは自分より強いモンスターに負けて死んでしまつことになります。運のないエイサの場合は自身の経験や力に大きく頼ることになるからです」

そう言つてジョシュはエイサの絵の上から大きくバツ印を書いた。「しかし運のいいホイサは『運よく』攻撃を避け『運よく』モンスターの急所を突くなどして、『運よく』モンスターを退治することができます」

「言いながらモンスターっぽいものの絵の上にバツ印をつける。そしてホイサの上に花丸を書いた。」

「普通なら命が危険な経験を積んでレベルを上げる。レベルが高いほど運がいいというのは、そんな経験をして生きていることが幸運だからです。死んでもおかしくないのでですから」

「でも、運が悪くてもレベルが高い人つて結構いるよね？」

ピールが首を傾げた。うん、知らないだらうけど私がそうだね。そして君も将来的にはそのうちの一人になると思うよ。

「その場合は死なないというだけで、それ相応の苦労はするでしょうね」

「運がないって救われないなあ。

つて、待てよ？」

「それってさ、例えば同じモンスターと戦つて勝つたとしても運が良ければ軽傷、悪ければ重症つてこと？」

「その通りです」

うへ。嫌になるなあ。つていうか経験値が一緒なのがとても腹立たしい。つていうか私もそうなるのか。能力値的に見て、私が一番運がないし。

「でも細かいシチュエーションの違いとかあるじゃん

「その辺はまだ学者にも解明されていません。そもそも、経験値といつものが主觀に頼るところが大きいので」

ジョシュの言つよひ、数値で分かる能力値と違つて経験値といふのは数値化されない。なんとなく体感で『経験値を得られた』と知るのだ。ついでに次のレベルに上がるまであとどれくらいの経験値をというのも体感でしか分からない。

どこぞのすごい神殿の神官なんかは分かるという噂だが、本当だらうか。

「最後に簡単にまとめましょうか」と、ジョシュが言つ。

三対の目がジョシュに注目するのを確認してからジョシュは実にあっぱりと言い放つた。

「運も実力のうち、ということです」

「つてことは、僕は実力があるってことだな！」

間髪いれずに私が勇者サマを殴つてしまつたのはしじうがなかつたと思つ。

第17戦 運はいいけど頭は悪い？（後書き）

調子に乗った人間は殴りたい、それが魔王クオリティ。

魔王の回想 ～魔王試験（前書き）

真央たちのいる世界で話されている言語は限りなく日本語に近いナ
ニカといつゝことで認識しといてください。

魔王の回想 ～魔王試験

夏が来れば思い出す。

遙かな故郷や遠い空ではなく、魔王試験のことだ。

あれは三年前の、割と冷え込んだ夏のことだった。春過ぎに母を亡くした私は住んでいた家も追い出され、さらには所持金も底をついて木の根を食べたり草を食べたりしてなんとか食いつないだ。

正直な話、当時の記憶はおぼろげである。母の死がショックだったといつもあるかも知れない。しかし一番の原因は空腹というか飢餓だらう。当時空腹のあまり幻覚が見えた。綺麗なお花畠と流れる川の向こうで手を振っている母が見えたこともあった。マジでくたばる5秒前的な状況の連續だったのだ。つくしなんかを食べると当時のショッピング記憶が沸き上るので一度と食べたくない。私は調理済みの食材しか食べないのだ！ あと果物ね！

それはさておき、空腹のままに食物を求めてさまよっていた私は、気付けば『やまよう扉』をくぐっていたのだった。

空腹のあまり歩けなくなつた私は地面に倒れ伏し、何か食材が口の中に飛び込んでこないかなと考えながらぼんやりしていた。そしてその視界の中に、一本の足が見えた。

「おい、どうした？」

上から声が振ってきたが、その時私が考えていたのは「革靴つて茹でたら食べられるかな」だった。飢餓に極まり。

「おー、お前名前はなんて書つんだ？」

問われた私がなぜ名乗ったのかと言えば、多分条件反射である。思考回路はショート寸前。つていうか燃料切れでストップ寸前だつたのだ。

「わー、の……ま、お……」

喉がからからだつたせいで名乗りがえらい切れ切れになつてしまつた。

それを聞いた男　ええい回りくどい。実はトウイだつたのだが、しばらく黙つていたかと思えば弾けるように笑いだしやがつた。その時私が考えていたことと言えば、やはりお腹空いたの一語に及ぶ。笑うなら飯をくれ。

私の考えていることなど知る由もなく、トウイはしばりくして笑いが治まるど、私を抱きあげた。

「よしよし、本来ならあまりよろしくないが、お前さんの心意気に免じて特別に会場まで運んで行つてやろう。こやあ、そんなボロボロのなりでも虚勢はるた面白いじゃねえか」

力力力と笑いながらトウイの肩に抱かれた私が考えていたことと言えば、やはりお腹空いたの一点張りだつた。

もし」の時にトウイが私の名乗りを「空の魔王」と聞きちがえていた上、彼の言つ「会場」というのが、魔王試験の受験会場だと知つていたら私は全力で拒否していただろう。

が、空腹のあまり思考が鈍つていた私は食物以外に关心がなかつたので気付かなかつた。貰すれば鈍する。つていうか後の祭り。

魔王試験会場についた後、トウェイは会場のスタッフ（いるのだ。不思議なことに）にある程度の食べ物を用意させた。食べ物が視界に入った瞬間私はそれをかつさらつて食べた。飢餓で死にそうだったのだ。割と本気で。

それをトウェイは笑いながら見ていた。試験の説明などは一切しなかつた。

よつて、胃の中に物を納めてひと心地ついた私はいきなり魔王試験の試験官たちの前に引きずり出されていた。

「えつと……」

私は絶句した。

目の前には私の身の丈よりはるかにでかい凶悪な面構えの魔王たちがずらりと並んでいたからである。その数、十五人。試験官はベテラン魔王の持ち回り制である。私は向こう百年は担当しなくていい。ラッキーだ。

ところで魔王試験に筆記試験はない。後に知った私は地団太踏んだ。筆記があればあんな寿命が縮むような思いはしなかつたのに、と。つていうか合格すらしなかつただろうけど。

とりあえず見ず知らずの（知ってるわけがない）魔王たちに囲まれた私は恐慌状態に陥った。つていうかそもそも魔王試験の存在すら知らなかつた小娘である。トウェイも何も説明しなかつた。トウェイは私が魔王試験に参加希望だと思つていたからである。しかし単なる行き倒れだつた私は倒れてたと思つたらどこかに連れていかれてご飯を貰えただけど目の前に魔王がいる状態でしかも魔王だと知らなかつたので凶悪なモンスターがいるとしか認識できなかつたため、すわ餌として用意されたのかと疑つたのも当然のことだ。

そういうわけで、私はかなり怯えていた。というかテンパっていた。

「名前は」

重厚な声を発したのは赤い鱗を持つ巨大な半魚人だった。ドラゴンではない、半魚人だった。何でこんなのが陸上にいるんだといふかる間もなく、またしても私は反射的に答えていた。

「空野、真央つ」

語尾が震えてしまったのは仕方がないことである。何しろ当時私は単なる有翼人のハーフだったのだから。

で、何が起じるのかと戦々恐々だつたのだが、唐突に空気が震えた。

それが魔王連盟でも随一の笑い上戸、ボシユヘルの笑い声だと知つたのはかなり後のことである。

何も知らなかつた私は、何やら衝撃波が体を襲つてきたのでついに自分が食われるのかと思い、なんとか逃げようとした。

魔王試験の会場はちょっととしたコロシアム風になつてあり、青空が見えていた。

一か八かの可能性にかけて、私は大きく自分の翼を広げた。のだが、

「つく」

誰かが噴き出すのを皮切りに、

「あーはつははははははー！」

「さやはははは」

「ひつひつひつひ」

とまあ、色々な笑い声が試験会場に響き渡つたのだ。

「おまつ、どんな翼の色だよそれ」

腹を抱えながら言つたのはトウイだつた。

「まだ魔王にもなつてないのに一つ名決めてるわ、変な翼の色だわ、おいしそうぎるやろ～」

ニヤニヤ笑いながら試験官の一人が言つ。

未だこの時の勘違いが残つてゐるせいで私は他の魔王から一つ名として「空の魔王」と呼ばれてゐるのである。本名だというのに。つていうか魔王じやない一般人が魔王名乗るわけあるまいに。私はそこまで向上心豊かじやない。つていうか魔王目指すつてむしろ下降してゐる氣がする。

ところで、有翼人の翼は大抵が美しい色合いをしてゐる。有翼人にとっての翼は、異性を引き寄せるチャーミングポイントの一つであるからだ。

ところがどつこい、なぜか私の翼の色は絵具バケツの水のような、もしくは土留め色のような、とかく微妙な色合いになつてゐる。地球人の母とのハーフだからかもしれない。こんな色の翼に惹かれる人間がいたら私が引く。自覺しているので普段翼を出すときは魔法で色を変えている。が、その時はそんな余裕はなかつたので地の色を見られてしまったわけだ。

色が変なのは自覺してはいることだったが、他人に言われると腹が立つ。

「うるさいつー！」

無謀なことに、私は件の試験官に向かつて攻撃魔法を放つた。普通なら擦り傷ができるであろうその魔法は、私が極限まで弱つていたせいでひょろひょろと地面に墜落した。弾けた色は私の翼と同じ色だった。ついでに言うと私の人生と同じ色である。バラ色ではない悲劇。私以外には喜劇だろう。ちくしょう。

そのことが駄目押しとなつたのか、試験会場は笑いの渦に飲み込まれた。

そして笑いが治まつた後に一番偉い試験官はこうのたまつたのだ。

「面白かつたから君、合格ね」

それでいいのか、魔王試験。

ちなみに、年に一回開催される魔王試験には本来魔王連盟に加盟している魔王から情報を聞き出し、試験会場まで自力で行くものらしい。基本的に五割は道中で死ぬというハイリスク。

私の場合、さもよう扉で行きついた先が魔王試験会場のすぐ近く（ついでに言うとトウイのサボリ現場近く）だったので参加できたのは100%運である。幸運か悲運かは判断がつけがたい。

こんな馬鹿げたノリで魔王試験に受かるのは一年に一人くらいらしい。合格枠としてお笑い枠が設置されているに違いない。毎年出るのかよこういう合格者という突つ込みは無粋というものだ。

とにかく、こうして私の魔王人生の幕が開けたのである。魔王ってどうやつたらなれるの？ というお子様の純粋な質問に心が痛むのは私だけのせいではない。

魔王の回想 ～魔王試験（後書き）

お笑い枠でない魔王候補たちはガチバトル必至。そもそもたゞり着くまでがかなり強くないとミッショングインポッシブルという難易度だつたりします。

第1-8戦 魔法の練習

筋肉痛とはお友達となり一週間ほどが過ぎた。いい加減筋肉痛とは疎遠になりたいものだが、スバルタ陰険教師がそれを許してくれないのでマブダチ状態が続いている。くそ、日ごろの鍛錬って大事だったんだな。

時に勇者サマと張り合いつつ、時にずるをしつつ（そしてばれてジョシュに怒られつつ）修行した結果、お子様一人はレベルが上がった。ピールについては近日もう一つぐらいは上がるのではないかと睨んでいる。

で。体づくりと並行して勇者サマたつての希望で魔法の訓練も始めることにした。

原因はというと私である。修行の最中私が魔法でずるしているのを見て羨ましくなったそうである。勇者サマがそれについて熱弁をふるつたせいでかなり説教をされる結果となつた。本当に疫病神だなあの子供は。

するをする私が悪いなどと言われたが、適度な手抜きも人生には必要なのだということをあいつらは分かっていない。いつでも全力投球なんて疲れてしまふじゃないか。そんな熱血おバカは勇者だけで十分だ。

鍛錬場にお子様二人と私とジョシュが。その周囲には暇なモンスターたちが見物している。一ヶ月以上続くこの見世物状態にもはやすつかり動じなくなってしまった。慣れって恐ろしい。

「なあ。こんな杖で大丈夫なのか？」

勇者サマは小指程度の太さしかない杖を振り回して首を傾げる。
「ええ、初歩ですから。予備はないので壊さないよつにしてくださいね」

ジョシュが私達に渡してきたのはいわゆる初心者向けの杖だ。壊れやすさはぴか一、安さもぴか一という品物である。といっても、うちのモンスターが作ったものだからただなのだが。ほんのちょっと魔力を込めているだけの簡易杖である。初心者が上等な杖を使うトラブルを巻き起こすことが多々あるので、最初はこういうものから始める。

ちなみに私は杖を使うのは初めてではないが、普段は全く使わないでなんとも違和感がある。

「魔王様は魔力を込めすぎないよつにしてくださいね。折れますので」
「はいはい」

私は適当に返事を返した。

有翼人にとっては魔法を使うのは呼吸をすると同じぐらい当たり前のことである。ハーフではあるが私も簡単な魔法なら楽にできるので今更練習どころのも実に面倒くさい。

つていうかなんで私が一緒に練習する羽目になつてるのか疑問だ。

「それじゃあ一番初歩の魔法から始めましょ。杖の先に体の中の魔力を集めるよつにイメージしてください。そして燃える炎を強く思い浮かべるよつに」

ジョシュがくいっと眼鏡を上げた。

「魔王様、お手本をお願いします」

「へいへい

あらかじめ打ち合わせしてあつた通りに私は魔法を使つ。ジョシコはあくまで先生なので口を出すだけである。

「『焰よ、燃えあがれ』」

唱えて杖の先に魔力を集中させれば、小さな炎が杖の先に灯る。正直、呪文を唱えなくてもこれぐらいなら無詠唱で簡単にできる。

そもそも学者によれば、呪文というのは思い込みの集大成らしい。「この呪文を唱えるとこの魔法ができる」ということを大勢が信じ、その思いの集大成が魔法発動の補助をするようになつたのだとか。みんなが白と言い続ければ、いつかは黒も白として認識されるだらう。たとえそれが徹頭徹尾黒だったとしても。

つまるところ呪文も同じで、本来ならばなかつた呪文と現象の発現になかつたはずの因果関係が長い年月と強い思い込みでもつて出来てしまつただけなのだ。

で、この呪文の何がいいつて、

「やつた、できたよ！」
「僕も出来たぞ！」

思い込みの強い子供には効果できめんなところである。杖の先にできた小さな火球にお子様たちは目を輝かせていた。

水属性であるピールと魔力の少ない勇者サマが成功するとは、いやはや、呪文恐るべし。

「二人とも、よくできました」

ジョシュが手を叩いて二人を褒める。

……いつも思うがせめて褒めるときぐらい笑ってやればいいのに。もしかして表情筋が未発達なんだろうか。

相変わらず無表情で声だけに感情が込められたジョシュの褒め言葉に、それでもお子様二人は嬉しそうな顔をしていた。

「ではそれを、あちらの的に向かってぶつけてみましょう」

ちらりと目線を向けられて私はうなずく。

「『疾く飛べ』」

火球はまっすぐに的に向かって飛んでいく。
見事的中した火球は小さな爆発を起こし、木と藁でできた的を黒焦げにした。

お子様二人から歓声が上がる。

「『とく飛べ』！」

「『疾くとべ』」

お子様二人の詠唱に従つて火球が飛ぶ。

ピールの火球はゆっくりだが的に向かって飛び、的にぶつかって弾けるように燃えあがつた。及第点だ。

問題は勇者サマである。

「あ、なんでそっちに行くんだ！？」

本人は不満そうに声を上げているが、彼の視線の先では悲鳴が上がっている。勇者サマの性格同様無鉄砲に飛び出した火球は目標か

ら逸れ、観衆であったモンスター達の間に飛び込んだのである。嗚呼、飛んで火が来る夏の昼下がり。南方であるという花火大会の事故のようだ。

「コントロールに問題があるようですね」

ジョシュが納得したかのようにうなずいていた。仲間の心配しろよ。

その点ピールは大慌てで火球の飛んで行つた先に走つていつた。いい子だ。もうこの子が勇者でいいんじゃない？

「もう一回だ！　『焰を燃えあがれ』！」

勇者サマが呪文を唱えれば、再び火球が現れる。

「『とく飛べ』」「

勇者サマが的に向かつて放つた火球は、なぜかぐりっと曲がつて私の方に飛んでくる。

狙つたわけではなかろうが、勇者が魔王に対して攻撃を仕掛けてきたならやることは一つ。

「おととい来やがれ」

片手で火球を払う。

跳ね返された火球は狙い違わず勇者サマの手にぶつかつた。私の放つた火球ならばそこそこの威力だらうが、流石は魔力の低い勇者サマの放つた火球、当たつた途端しぼむように消えた。

「あつ、あつ！」

それでも熱かつたのか、勇者サマが手を振つてはふうふうと息を吹きかけている。

「魔王様、大人げないですよ」

ジョシュが咎めるように呟つ。

「やられたらやり返す、これ当然」

私は舌を出した。

が、そつは思わなかつたのが他のモンスターたちである。思いつきり白い目で見られた。いつの間にか戻ってきたピールもジトリとした目で私を見ている。どうやらモンスターたちに怪我はなかつたようである。ま、あんなしょぼい魔法じゃね。

モンスターはわざわざ回復魔法で勇者サマの手当をしてくる。あんなもん、舐めときや泣くでしょう。

その後も何度も火球を飛ばしたが、ピールはともかく勇者サマのは逸れに逸れた。

何やら考え込んでいたジョシュが、何かを思いついたような顔をした。

そして私に向かって呟つ。

「魔王様が的になればいいのでは？」

「は？」

眉を寄せて呟つ私に、ジョシュは悪びれもせず説明する。

「標的を魔王様にすれば、彼も集中力が高まるのではないでしょか。魔王様なら彼の魔法を無効化できますし」

すると勇者サマもぱつと顔を明るくさせた。

「そうだぞ、魔王になら絶対当たられるぞ！」

勇者サマはやる気満々だ。あんなへなひょこ魔法に負けることはずあり得ないんだけど。

そもそもノーノンの勇者サマがいくら頑張ったところで私に魔法を当たられるとは思えない。立ってるだけと思えばいいだろう。私はその役目を引き受けた。

「魔王、覚悟しろー。」

「はいはー」

勇者サマが杖を構えるのを私はのんびりと眺めていた。勇者サマの魔力と今まで使った回数からすると、魔力切れも近い。少ない回数で私に魔法が当たるとは思えなかつた。

といふがどうしたことか。

「『とく飛べー。』」

勇者サマの杖から放たれた魔法は、十歩ほど離れた私のところにまっすぐ飛んでくるではないか。

危うく顔面に当たりそうになつたそれをかき消すが、勇者サマはすでに次の魔法を放つていた。

私は次々に飛んでくるそれをうち払つ。さつきまでの逸れっぴりが嘘のように、正確無比に私めがけて飛んでくる。

「あんた絶対狙つてやつてんでしょうー。」

「当たり前だろー。魔王は的なんだからなー」

そういう意味じやないつづーのー

その後、魔力切れまでの短い間、勇者サマの攻撃はことごとく私に向かつて飛んできたのだった。翌日以降の的が私に決定したことば言つまでもない。結界の使用は不可らしい。こんなひどい話があ

つていいものだらうか。

『勇者』は人々に安寧を『与える』といつ。

しかし魔王である私にとっては、疫病神以外の何物でもないとつ
くづく感じる今日この頃だ。

第19戦 勇者にはペンより剣

初めての魔法を発動してから、お子様たちの間では私に攻撃魔法をしかけることがブームになつたようである。なんというクソガキども。

腹が立つたので、攻撃をされはじめて三日目に勇者サマ達が持つ杖を一本とも破壊しておいた。私が海のように広く寛大な心を持っているからこそこの優しい処置である。もちろんお子様たちに一発ずつげんこつを食らわせることも忘れなかつた。うん、我ながら最近丸くなつて気がする。

杖を壊したことはすぐにモンスターたちにばれたが、今回ばかりは軽く注意を受けるだけで済んだ。さすがにこれで説教されたら自稱穩健派の私も切れる。

それとお子様たちはジョシュを始めモンスター数体にお説教を受けたようである。例えるならばあれだ。授業中他の子に消しゴム投げちゃいけません！って感じ。多少不服ではあるが、お子様たちの魔法程度ならば私が食らつてもダメージにはならないからじょうがない。実際問題、消しゴム程度の破壊力なのだから。

さて、話は変わるが最近ある問題が浮上してきた。

正直に言うとジョシュを作つて三日後くらいには気付いていたのだが、私もジョシュもお互い問題を先送りしていたのだ。

勇者サマに武術を教えられる人間がいないという問題を。

いや、人間でなくていい。モンスターでいいのだ。

しかし考えても見てほしい。私の配下のモンスターはほとんどが獣型である。人型はジョシュが初めてで、人型っぽいモンスターといえばセーターだけだ。どちらも武闘派ではない。あとはミルクちゃんのどぐく獣型だけど一足歩行可、といったモンスターたちばかりである。

ツキバ村はかつて先代魔王が大暴れをしたせいで荒れていた。だがしかし、そうなる前までは至つて平和な村だったのだ。よつて、モンスターたちの攻撃スキルは至つて拙い。まして剣を持って戦うなどと。

人型であるという点で考えるとジョシュが最適でないのかと思うのだが、奴の体力のなさは可哀想になるくらいである。ちょっと前から私が鍛錬を始めて筋力を取り戻したことによって、今や圧倒的にジョシュより腕力面では私の方が強くなつた。それでもジョシュの振るう鞭に勝てないとは世の不条理を感じずにはいられない。技術力と体力は異なるとは知つても、

＊＊＊

「名選手じゃなくても審判は出来るつて言葉があるでしょ。剣が使えないくとも指導はできるんじゃないの？」

勇者サマが帰つた後、私とジョシュは話し合つていた。

「こちらにある書物ではその方面についてくわしく記されたものはこれしかありませんでした」

そう言ってジョシュは一冊の本を差し出した。

表紙には『調教用鞭講座』と書かれている。

「…………あんたの得物が鞭なのつて」

「これを読んだからですが何か？」

「何か？　じゃない！　誰だこいつに書庫の本読んどけとか言つた奴。つつかマジで先代魔王はどんな本を収集してたんだ。趣味なんか、先代魔王の趣味なのか。

「彼に鞭について教えるのはやぶさかではありませんが……」

「やめときなさい」

そんな勇者ヤだ。しかも調教用つてなんだ調教用つて。

「うーん……じゃあ徒手とか」

「モンスターと人では骨格からして違います。魔王様が教えてくださいますか？」

「なんで手の内見せなきやなんないのよ」

私が出来るのは母から教わった地球流合氣道と棒術。人間にはかなり有効だが、勇者が相手をしなくちゃならないようなモンスター相手にするには圧倒的に力不足だ。工夫次第で強くなるかもしれないが、それほど強くもない私が自身の手の内をさらす愚を犯すわけにはいかない。

「ではやはり、誰か講師を呼ぶべきでしょうね」

私は頭を抱えた。

仮に勇者サマの魔力が高ければ魔法中心として鍛えることができる。しかし現時点での能力値から見るに、勇者サマは魔法使いよりは戦士タイプ。素早さを生かすべく双剣や短剣、細身の剣なんかで戦う方がいいかもしない。もやしつ子だし。それに加えてあの猪突猛進目立ちたがりの性格だ、弓使いとして後方で待機なんかできないに違いない。銃は可能性としてはありだが、殺傷能力が高すぎるので却下である。ある程度私が防げるものでなくてはいけない。魔法を使えるようになつたときと同じく、試し打ちで撃ち殺されではたまらない。

なんにせよ、この村にいる人間でそれらを教えられる人間がいない。モンスターもいない。

しかし武器が扱えない勇者など役立たずも甚だしい。勇者に押し付けられる問題というのは少なからずモンスターや賊の討伐というものがあるのだ。知恵で乗り切るという手がないでもないが、あのお子様勇者サマではまず無理だろう。だつてガキだし。

教師役が見つかるまでは、もつじょりく体力づくりを中心にならうだ。

勇者サマもピールも素直なお子様である。

素直であるがゆえに、自分の欲求にも正直だつたりする。

「なあ、明日ヤトさんの家に行つていいか？」

と、若干もじもじしながら勇者サマが言つ。トイレなら済らす前に

に行つてね。

「あ、おいらも行きたい！」

ピールもそれに賛成した。

ジョシュは私の方に目で問い合わせた。

私自身も最近疲れてるし、久しぶりに友人に会いたいと思つていたところだ。否ではない。

「じゃあ今日の内にヤトに手紙届けておくから、了承もうえたら明日行こうか」

お子様たちが表情を明るくさせた。

そしてふといこいとを思いついた。

「ヤト兄^あがいるじやん」

私の発言にお子様たちが首を傾げた。

「ヤト兄？」

「ヨト兄ちゃんの」と、

ピールの言葉に私はうなずいた。

ヤトの兄ヨトは剣術が得意だったはずだ。今でこそアリギ村で武器や金物を扱う仕事をしているが、昔は冒険者を目指していたといふし、ちょっと前には近所の子供に剣術を教えていたはずだ。お子様たちの教師役としては適任だろう。

そうと決まれば善は急げ。

私は大急ぎでペンを取ると、ヤトに宛てた手紙を書き始めたのだった。

＊＊＊

翌日、私とお子様一人に加えてジョシュと一緒にアリギ村にあるヤトの家を訪れた。勇者サマの足だと時間がかかるので、鳥モンスターに運ばせた。足で掴むか嘴で加えたらしいんじやないのと言つたのだが、モンスターから可哀想だと断固拒否された。勇者サマは普通に背中に乗つていた。残念だ。ついでに言つどジョシュも勇者サマと一緒に方法だ。私は普通に転移魔法である。遠いのにわざわざ飛んでいくなんて面倒くさい。

玄関の扉を叩くと、ヤトが出てくれた。ヤトは私達を見るとにっこり笑う。

「いらっしゃい、みんな。さあさあ入つて」

ヤトの言葉に私を先頭にぞろぞろと家の中に入る。お子様たちは元気よくお邪魔しますと挨拶をしていた。

ちなみに他人の家を訪れる際のマナー云々は昨日ジョシュがお子様たちに教えていた。勇者教育つていうか幼児教育じやないのそれ。

それはさておき、通された部屋にはヤトが昨日約束してくれた通り、ヤト兄がいた。

ヤト兄は身長が高く、体格もがつしりした屈強そうな見た目の男である。ヤトと同じく明るい金茶の髪と青い瞳の持ち主だが、肌はヤトと違つて日焼けしている。そしてさも自分は眞面目ですと言わんばかりの眞面目腐つた顔をしている。

「こんにちは。お久しぶり」

私が挨拶をすると、ヤト兄は露骨にこちらを嫌そうな顔をした。

「ヤト、密というのはもしかしてこの女のことか？」

「兄さん、この女だなんて失礼な」と言わぬいで頂戴。真央は私の友達よ」

ヤト兄の失礼発言にヤトが怒る。そつだそつだ、もつと言つてやれ。兄さん嫌い！ とか言つてやれ。絶対へこむからそいつ。

「騙されてるに決まつてるだろう。相手は魔王だつて分かつているのか？ 性悪で狡猾で怠惰な奴に決まつてる」

「悪うございましたね、性悪で狡猾で怠惰な魔王で。残念ながら私は勤勉な魔王になるつもりはないからね」

急け者上等。楽隱居上等。大体アリギ村の魔王だつて似たようなもんじやないか。

早くも険悪な雰囲気になる私達の様子に、お子様たちやジョシューが田を丸くしていた。

何を隠そう、このヤト兄とは私がツキバ村の魔王だとバレる以前から仲が悪いのである。

見ればわかるだろうが、ヤト兄は考えていることが顔に出やすく、ついでに口にも出やすい。実直かつ直情型でクソ眞面目な正義感の強い男なので魔王かつ急け癖のある私とは反りが合わないのだ。

それともう一点、

「うちの妹に迷惑をかけるのは止める。お前の性悪が可愛い妹にう

つったらどうしてくれる!」

この男、結構なシスコンなのである。もしくは妹命。両親がなくなつてから他に身寄りがない上にヤトは病弱。それゆえヤトは世間知らずな面も多々あり、ヤト兄は過保護なのである。

「つづるわけないでしょ。何を根拠に」

「お前は魔王だろうが。勇者ならともかく、魔王をつむげに招き入れるなんて……!」

「はい、言質とつた、つと。もうひと押ししこうかな。

「ねえヤト兄。ちょっと剣術教えてくれない?」

ヤト兄の言つことをさうじつと流して言えれば、不審そうな顔で見られた。

「お前にか? 何をたくらんでるんだ?」

「いや、剣術教えてほしいんだよね」

「魔王なんかに教えられるわけないだろ!」

「魔王なんかに教えられるわけないだろ!」

「ああ、勇者ならな!」

私はにやりと笑った。

「なら勇者サマの方よろしくね、ヤト兄

「は?」

ヤト兄は間抜けた顔で私を見る。私が後方にいる勇者サマを指し示すと、ますますわけが分からぬといつた顔をした。私はにやりと笑う。

「この子、ツキバ村とバーク 口の両方に所属してる勇者なの。村長たちから教育係任されてるんだけど、剣術教えるのをどうしようかって言つてたとこなんだよね」

「こんな子供が? それに魔王が教育係つて……」

信じられないものを見るような目でヤト兄が勇者サマを見た。そりやそうだ。私だって最初は信じられなかつた。

「子供じゃないぞ!」

勇者サマが憤然として言つ。やつやつてムキになる辺りが子供で

ある。

「あー……悪い。失礼なことを言つた」

クソ真面目なヤト兄は律儀にも勇者サマに謝つている。私は未だかつて謝られたことはないのだがなんだこの差別。

「悪いと思つんなら、勇者サマの剣術指導やつてくれない?」

私がそつと言つと、ヤト兄は改めてぎょっとしたように私の顔を見た。

「なんで俺がそんなことを……」

「だつてさつとき言つたでしょ。魔王は駄目だけど勇者なら教えてやるつて」「そ、そつは言つたが」

「何? さつきの嘘だつたわけ?」

たたみかけるように言えれば、ヤト兄は分かりやすくつたえてくれた。真面目な奴はこうこうとこじらに弱い。

「だが俺にも仕事がある」

「何も毎日つて言つてるわけじゃないのよ。週に一度でも基本を教えてくれれば反復練習をこつちでわせることはできるし」

模擬演習をカメにでも記録させておけばこいつのものである。それを見つつ反復練習させればいい。

そういうえば、武術での反復練習の大事を母は熱弁していく私にもそうさせたが、魔王になつてからほとんど鍛錬をしていない。死んだ母がそのことを知つたら何と思つだらうか。確実に木に一晩ぐらいたるされそつな感じがする。

私はちよつとつすら寒い気持ちになりつつ考えを田の前のことこ集中させた。

私の言葉にヤト兄は言葉を詰まらせた。さうにたたみかけようと田で合図をする。するとヤトは心得たとばかりにヤト兄の腕に手を置いた。

「お願い、兄さん」

じつと見上げてくる妹の視線に耐えかねたのか、ヤト兄の視線が泳ぎだした。あとちょっとだな。

そこで空氣を読んだのがお子様たちである。

「ヤト兄ちゃん、おいらも剣術習いたいんだ。だめかな？」

「僕、勇者だから強くならないといけないんだ！ 教えてくれ！」

妹プラス見た目いたいけな子供一人から迫られ、ヤト兄はすぐに白旗を上げた。

こうして、週に一度はアリギ村でヤト兄から剣術を教えてもらうことになった勇者サマだった。何故かピールにも教えてくれるらしい。魔王こと私には教えないということなので、私は勇者サマ達が頑張っている間ヤトとお茶をする約束をしたのだった。監督係としてジョシュが傍にいるので無責任でもないはずである。何かあったらそれはヤト兄とジョシュのせいだ。きっとそうだ。

家に帰ると、モンスターたちが楽しそうに勇者サマたちの修行用木剣を作っていた。ここから根本的に間違ってる気がする。

第20戦 進歩はもう刃の剣

早いもので、私が勇者サマの指導を引き受けたから一ヶ月がたつ。長いようで短い一ヶ月だった。もう七月である。暑さで茹だる時期だ。

が、子供にとつて暑さなんぞ関係ない。

「魔王、覚悟ー！」

「邪魔」

木剣で切りかかってきた勇者サマを魔法で返り討ちにする。剣術を習い始めた勇者サマはヤト兄にそそのかされたらしく、隙あらば私に切りかかってくる。お子様ゆえにその行動はバレバレで、日々私が返り討ちにしているといった具合だ。ヤト兄の所業は今度ヤトに言いつけるつもりである。

勇者サマに対し、食事時に切りかかってきたらおやつ抜きと宣告してあるので今のところ食事時は平和である。あと授業中に木剣を振り回すとはジョシューの鞭が飛んでくるのを五度目の鞭を食らつた辺りから学習したようで血濡している。もうちょっと早く気付け。

暑さのせいで私のやる気は右肩下がりだが、ジョシューのスバルタっぷりなどはむしろますます磨きがかかっている気がする。鞭さばきが一ヶ月前よりも圧倒的に上達している。鞭が振るわれる主な相手が私と勇者サマだという事実は非常に不本意である。

暑さで気が滅入つてきたので、勇者サマをピールが止めているのを確認して簡易結界を張り、その中に魔法で冷たい木枯らしを吹かせた。熱い空気と適度に混ざり合って、心地よい温度になった。

「魔王様、その魔法をこの部屋全体に掛けただけませんか？」恨みがましい目でジョシューが言つ。根性で顔には出していないようだが、ジョシューも相当参つているようだ。

「これ、部屋の中でしか使えない魔法だし、疲れるからあと一回ぐ

らいしか使いたくないんだけど」

嘘である。比較的簡単な魔法なので連発も可能だ。が、何故私が

他人のために自分の魔力を使ってやらねばいかんのか。

今日の予定は午前中は座学、午後からは外での鍛錬。体づくりと魔法の練習のために夕方まで外にいなければならぬ。さらに言うなら今日は雲ひとつない快晴だ。対策をしないのではかなりきついだろう。

「…………」

ジョシュが無言で私を見る。私もジョシュを無言で見返した。そして、

「……分かりました、魔王様がその魔法をこの部屋全体に使ってくださるなら、今日一日は座学にしましょう」

「明日からも外での鍛錬は涼しい朝夕にしてね

「前向きに検討します」

「確約しなさい」

「三日は確実に」

む。微妙な返答だがまあまあの成果が引き出せただろう。そろそろ他のモンスターたちの視線が恐いし。一人だけ涼んでるのが駄目らしい。

つか、空気冷やす系の魔法が使えるモンスターは複数いたはずだが、あいつらどこに行つたんだと考えて思い出す。ツキバ村の方で新しく灌漑工事をするとかで作業効率を上げるために貸し出したんだつけ。くそつ、お酒を献上するなんていう甘言に釣られて全員貸し出すんじゃなかつた。お酒はしつかり受け取つちゃつたけど。

閑話休題、ジョシュから座学の約束を取り付けたので私は結界を解き、室内全体に木枯らしを吹かせた。

「すつごいや！ マオさん、おいらにもこの魔法できる？」

ピールが目をキラキラとさせながら私に尋ねてくる。私は首を振つた。

「出来なくはないけど、ピールなら水属性の魔法を覚えた方が楽し

やないかな

氷や水が部屋の中を動く、だけでも涼しくなるものだし。多少家が傷むから除湿もしつかりすることはもちろん大事であるが。

「僕もできるのか！？」

勇者サマも期待に顔を輝かせて迫つてくる。鬱陶しい。

「冬場には活躍できるでしょ」

勇者サマの質問に素っ気なく返す。火の属性の魔法が使える奴がいればそれだけで新しいらすだ。冬場にはたっぷり働いてもらおう。そう考えてからふと考えなおす。

出来る限り、勇者サマには魔法道具を使わせた方がいいのではないかと。

魔法は実に便利なものである。

が、実際に魔力を持ち、なおかつそれを使える人間というのは割と限られている。一般人ならお子様たちが使つた火球に毛が生えたくらいの魔法がせいぜいだろう。

そのためそこそこ高度な魔法が使える人々はいわゆる人間の魔法使いか、もしくは高レベルの冒険者、私有翼族のような人間とは異なつた種族、そして勇者や魔王、モンスターぐらいたものだ。

魔法道具はそういう魔力が使える人間が作った道具で、その名の通り道具に魔力とそれを発動する魔力が込められている。大抵は日常生活に有用な魔法である。魔力を注げば繰り返し使うこともできるが当然ながら値段が高い。ぼつたくりと称して言いほど高い。

そのため私が初めて魔法を使えるようになつた時、それを知つた母が言ったことは、

「まあ便利。じゃあそれで洗濯物を乾かしてちょうどいい」

だつた。我が母ながらひどい。

私がいろんな魔法を覚えるたびに、母はそれを家事に応用するよう言いつけた。小遣いやおやつにつられてそれを了承した私も悪い

のだが、母と子だけで生活していた時だったので日々の節約はとても重要だったのだ。

地球生まれ地球育ちを自称する母は、家事が不得意というか嫌いだった。特に洗濯と料理。前者は「洗濯機も乾燥機もないのが信じられない!」後者は「水道も冷蔵庫もIHも電子レンジもないのが信じられない!」という理由だ。何やら話を聞くと、魔法道具のようなものがあつたらしい。しかも魔法道具を動かす魔力の代わりとなるものを各家庭に常に供給できていたのだと。それに水も。それらを国中に張り巡らせていたというのだから日本という国は実際に便利で快適な国だったのだろうと思う。

しかしあなたを作った技術力がこの世界にはことないといふ欠如している。鋼の星とも呼ばれる工業惑星ハリッシュならある程度それに近いものが作りだされているのかもしない。行つたことがないから分からぬが。

とかく、今は技術を羨んでも仕方がない。自分たちで実現可能な範囲で生活を向上させていくべきだ。

というわけで、私は私の魔法と配下のモンスターたちの魔法を生活向上に役立てているというわけだ。

夏は魔法で空気を冷やし、冬は魔法で空気を暖める。家事全般にも魔法を活用しているし、照明器具も基本的にモンスターたちが作った魔法道具だし、それ以外にも日々魔法道具を使っている。ツキバ村の人たちに魔法を使うモンスターの貸し出しも行つている。もちろん有償で。

こういった魔法の使い方を勇者サマに教えるかどうかは悩みどころである。あんまりやりすぎると勇者サマが所帯染みてしまう。それに勇者サマの魔力から考へるに、それほど魔法を覚える容量がなさそうだ。家事向けの応用魔法は魔法道具で代替し、本人には勇者向けの魔法を覚えさせた方が無難だろう。炎も雷も攻撃向けだ。

「……まあ魔法にも適性があるからね。勇者サマは難しいんじゃないかな」

「ええー！ なんだだ！？」

「なんでもよ」

私は勇者サマの抗議を適当に流すと、もう一度部屋の中に風を巻き起こした。適度に冷えた風が部屋の中をめぐる。汗が引いたところでジョシュが無情に告げた。

「では、勉強を始めましょうか」

そういう約束だったんだんだけ改めて聞くとやる気が下がるな。

お茶の時間にペールが言つ。

「この家にある魔法道具つて、誰かに売つたりしないの？」

その質問は少なからずされたことがあるので私はいつも通りの答えを返す。

「売らないよ。ここ以外じゃ使えないから」

「どうして？」

「ケチ臭いぞ魔王」

子供は好奇心旺盛だ。そして勇者サマは失礼だ。

私はため息をついた。

「あのね、世間一般で流通してる魔法道具にどんな魔法が掛けられてるか知つてる？」

私の問いにピールは首を傾げた。

「うーんと、すつじい魔法とか？」

「かつこいい魔法！」

「うん、この子らは子供だ。

まあ今回に限っては私が分かりやすく解説してやろう。

私は紙とペンを用意すると、空野真央と漢字で書いた。母から教えられた日本の文字である。やたらと線が多いので、こちらの人間からすると絵のようだ。

「何だそれ。絵か？」

「何かの字？」

お子様たちが首をひねる。

「日本って国の文字。で、このペンを呪文、インクを魔力、紙に描いた文字が魔法の発動した効果とするでしょ？ で、魔法を使える私からすると、すぐそばで魔法を発動するのは非常に簡単なの。自分の手を動かせばいいんだからね」

そしてその紙とペンを勇者サマに渡す。

「でもこいつやつて呪文と魔力が魔法を使える私から離れると、魔法の発動は難しくなるの。私の手から離れたペンで同じ字を描くことはできないからね」

ペンを握りしめた勇者サマが私の字を真似て書こうとしているが、謎の文字となり果てている。諦めたのか最後に魔王のバカという文字を書き加えた。そういうことする子が馬鹿だ。

「同じ魔法を発動するためには、誰が使つても同じ効果をもたらす方法が必要になる。私の字を真似て書けつつても誰でもすぐにできるわけじゃないみたいにね」

勇者サマは文字を睨んで不服そうだ。

ピールはふんふんと興味深げにうなずいている。

「そこで魔法使いの人たちはやり方を変えるわけよ

私は印章を取り出した。普段、魔王同士のやり取りで使う名前入りの印章だ。文字はそれぞれの魔王が自由に決められるので、私は日本語の名前の印章にしている。

私は勇者サマの手元にある紙を引き寄せ、その上に印章を押した。

空野真央という文字が紙の上に現れる。

「こんな風にあらかじめ形を作つておけばインクさえあれば誰でも同じように魔法が発動できるつてわけ」

「僕も押したい！」

「却下」

「ケチ臭いぞ魔王！」

「ケチで結構」

大事な印章を人に渡してたまるか。

と、それまで話を聞いていたピールが口を開く。

「つまり、普通の魔法より、魔法道具で発動する魔法の方がずっと手間がかかるってこと？」

しばしば思うのだが、こういうときピールがいてくれてよかつたと思つ。勇者サマだけだと際限なく話が逸れてしまうのだ。

「そういうこと。手間の他に普通の魔法とは違う技術も必要になるの。その上壊れにくくするにはさらに手間がかかるしね」

言つなれば魔法道具は飴細工で作った印章。簡単なものでも回数を使えば壊れるし、高度で細やかな魔法であればある程壊れやすい。「でもここにあるのは魔法道具なんだろ？」

勇者サマが不思議そうに首を傾げた。

私は肩をすくめる。

「うちは魔法道具より魔法を使う方が多いよ。魔法道具も一応あるけど、手入れ出来るモンスターたちがいっぱいいるからね。モンスターが毎日調整をする前提で作つてるので。普通の人に売つても、その人がそこそこの魔法を使えなかつたら全然使えない代物なの」

「……よく分からぬぞ」

勇者サマが小さく唸つた。分からぬことを分からぬと言えるところは勇者サマの数少ない美点である気がする。

「うちの魔法道具は毎日作り直してること」

私がかなり噛み砕いて言つと、勇者サマはつやつやく合点がいったようだ。

「つまり作るのが下手なんだな」

「……」のクソガキ。

私が思わずこぶしを握り締めたとき、ジョシュが咳払いをした。

「魔法道具を作っているモンスターたちも日々研究しています。そのつけ既製品に負けないくらいの魔法道具を作れるようになるでしょう」

毎日仕事してる方が急け癖がつかなくてよ」と思うのだけれど。とか言つたら私が毎日仕事をさせられそうなので黙つておく。沈黙は金だ。

まあどの道うちのモンスターたちはやたらと工作が好きだし凝り性が多いし、いいものが出来たら他の魔王たちに賄賂として渡すもよし、名義を隠して売り払つもよし。

実はうちのモンスターたちのレベルからすると、たとえポンコツであろうと魔法道具を作れること自体がすごいということを私が知るのは結構後のことだつたりする。日々の努力と根性と粘り強さの勝利らしい。随分と汗臭いイメージのモンスターたちだ。でも有能な配下つていいよね。手柄はおおむね私のものになるわけだし。外道？ だつて私魔王だし。

「そしたらそれがツキバ村の名物になるかもね」

ピールがニコニコと笑う。

魔王印の魔法道具？ 誰が買つんだそんなもん。

「そついえば、現在修行用の魔法道具を開発している最中だそうですよ」

ジョシュが思い出したかのよつて言ひ。そついえばそんな話があつたなあ。

「面白そうだな。完成したら僕が一番に試していいか！？」

勇者サマが楽しそうに言ひ。

「ええ。あなたのための道具ですからね」
ジョシュは相変わらずの無表情で答えた。

勇者サマの言葉にやる気をみなぎらせたモンスターたちによつて、修行用魔法道具は一週間後に完成した。

その頃には村に貸し出したモンスターたちが一部帰つてきていたので、私の「冷房が欲しけりや座学にしろ」という脅しは効かなくなつてしまつた。無念。

さて、鍛錬場に運び込まれた魔法道具だが、ぱっと見はカカシだつた。それが十体程ある。

「これが修行用の秘密兵器なのか？」

勇者サマが首を傾げる。おい、誰がいつ秘密兵器だなんて言つたんだ。

「さつそく動かしてみましょうか。魔王様、試されますか？」

「……いい。勇者サマからでしょ」

「分かつてゐるな、魔王！」

勇者サマが胸をそらす。

いや、別にあんたのために断つたわけじゃないし。むしろ言つたい。ジョシュの後ろにいるびしょぬれな上にボロボロな姿になつてゐるモンスターたちに疑問を感じないのか、と。

「まずは準備体操を兼ねてやりましょうか」

ジョシュがそう言つと、勇者サマを鍛錬場の真ん中に立たせた。

そして彼の背後に長い仕切りのようなものを立たせる。さらに勇者サマの前方、五歩程離れた場所に少しづつ間隔を開けてカカシを設置する。空から見ると勇者サマを頂点にして内角100度程の扇形になつてゐるはずである。カカシの顔はすべて勇者サマの方を向いているので、カカシたちの視線の焦点に勇者サマがいるとも言える。カカシ VS 勇者サマ、といった見た目である。設置されているのは五体だけで、どうやら残りは予備らしい。もしかしたらレベルが上

がるごとに使用する数が増えるのだろうか。

そして設置が終わつたところでジョシュが咳払いをした。

「では、開始します。飛んでくる攻撃をすべて避けてください」

ジョシュの合図とともに。力カシたちの口に水球が出来る。水属性の魔法の初歩の魔法だ。

小さく空気を切る音がしたかと思うと、力カシの口からその水球が打ちだされた。それらは一直線に勇者サマに向かっていく。

「うわっ！」

勇者サマが小さく声をあげてそれらを避けた。

が、力カシ達はすぐに水球を作ると再び発射した。

勇者サマは思わず下がるが、背後に設置してある仕切りに触れた途端悲鳴を上げた。

「ああ、背後の仕切りに触れると雷魔法を食らうことがありますので、そこより後ろに下がらずに避けてください」

水に濡れた状態で雷魔法を食らうなど、かなりの痛手だろう。うわあ、スバルタ。実験台断つてよかつた。

「ひどいぞ！ 鬼！ 悪魔！ モンスター！」

「ええ、モンスターですが何か？」

ジョシュは相変わらず平然としている。まあジョシュだしな。

水球は一定時間ごとに発射される。勇者サマがその準備時間中に横に逃げようとするが、力カシが勇者サマを追いかけるようにグリーンと一緒に動いた。恐つ。

水球は勇者サマに容赦なく当たつた。水音というよりは肌を思い切り叩いた音と言つた方がいいだろう。見るからに痛そうである。

「ちゃんと攻撃を見極めれば避けられます」

ジョシュはあつたりとそう言つたが、今の勇者サマにそんな余裕があるのかどうか。

結局、力カシ達が魔力切れを起こした三分後（一度起動すると魔力切れになるまで止まらないらしい。迷惑な）には勇者サマはすっかりずぶ濡れになつていた。長袖長ズボンという格好なので分から

ないが、間違いなく手足にはあざができるだろ？

「……………これ、おいらもやらなきゃ 駄目？」

いつもおつとりしているピールには珍しく、思いつきり顔を引きつらせてくる。心なしか青ざめているようだ。

「あー……ピールは水属性だから、勇者サマよつはマシなんじゃないかな」

多分。きっと。多少は。

モンスターたちが力カシに魔力を注いでいる間に、勇者サマはぐずぐずと泣いていた。

「泣き虫」

小さく咳くと、勇者サマがきつとこちらを睨みつける。

「泣いてなんかいなぞ！ カカシの水だ！」

あなたの目から湧いて出るわけないでしょ。

しかしそんな突っ込みを入れると勇者サマの頭を甲斐甲斐しく拭いているモンスターたちから非難されそうなので口をつぐんでおいた。

さて、この修行、ピールの次は私の番なんだけど、どうやって逃亡しようかな。ピールはすでに刑を言い渡された囚人のごとくうなだれでいるので、逃亡騒ぎなどを起こすとは考えられないだろ？ 私が修行の脱走常習犯なのは皆の知るところなので逃亡防止措置がされていると思つていい。

いつそカカシを破壊してしまおうか。しかし怒られるのは田に見えている。というか、下手に壊したらグレードアップした状態で返つてきそうだ。

私が悶々と悩んでいる間にピールが特訓を終わらせたらしい。気付けば全身水まみれでぐつたりとしたピールが地面に倒れ込んでいた。余所の街から走ってきた伝令を迎える人のごとくモンスターたちがタオルやら飲み物やらを持ってピールに殺到している。

「では次は魔王様ですね。魔法で結界を張つたり飛んで逃げたりしないでくださいね」

ジョシュが無情に告げる。

私は半ばやけっぱちな気分でカカシの前に立つた。

勇者サマの特訓を見ていたから分かる。カカシ達は発射の寸前まで目標の方に姿を向ける。が、発射の段階になつたら一瞬だけ動きを止める。水球が放たれるのはどのカカシも同じタイミングだ。ならばかわせないこともない。

などと考えていた私だが、次の瞬間にはその認識が甘かったこと悟つた。

風を切る音がした。かと思えば続けて一度二度四度五度。

「ジョシュ！？ なんで私だけ時間差なのよつー！」

「魔王様の方がレベルが高いので」

やつぱこいは陰険だ！ きつとこの前ジョシュが寝てる時に顔に落書きしたこととかジョシュに無理やり絵を描かせて笑つたこととか愛用の鞭をこつそりツタにすり替えたこととかに対する報復に違ひない。

しかし今そんなことを考えても仕方がないので、目の前の攻撃をかわすことに専念しよう。かわせてないけど。痛いけど！

この時嫌な予感がした私はこの特訓用魔法道具の開発を中止するよう言つたのだが、ジョシュにより却下された。部下に提案を却下される上司つてどうなんだろつ。

その後ますますバージョンアップしていく特訓用魔法道具は、対象者が攻撃を避ける様子から『地獄の舞い』と名付けられることがある。姉妹版に『剣の舞』が生まれるのもそれからすぐのことだつたりする。内容は字面で察してほしい。

魔法というものは便利なものである。魔法道具もとても便利なもの

のである。しかし使い方を一步間違えると非常に危ないものになるのだ。どうせなら上質お酒醸造魔法を開発してほしいものだ。

一日の暮、とこりとわざがあるよつて、その道の先達には教わるところが多いものである。

それは恐らく、勇者でも例外じゃあるまい。

「魔王様は勇者の知り合いはいらつしやらないのですか？」

ある夜のジョシュの発言に私は顔を引きつらせた。

「ジョシュ、私を誰だと思ってんのよ」

「魔王様です」

ジョシュは当然のよつて言い放つ。そんな初步的なことを聞いたいんじやないつつの。

「魔王と勇者は基本的に敵対関係にあるもんなの。友好関係築く魔王がいると思う？」

私が不機嫌な声でそう返すと、ジョシュは一つ瞬きをした。それから背後の壁の方を振り返る。その壁をいくつか越えた部屋には、時間が遅くなつたのでピールともどもせつちに泊まることになつた勇者サマが寝こけていはるはずである。

ジョシュは背後をしばらく眺めてから再び私に視線を戻し、物言いたげにこちらを見ている。言いたいことは分かるけど言わなくていいからね。言つたら殴る。

しばらく黙つていたジョシュだが、わざとらしく咳払いをして口を開いた。

「ツキバ村とバーク 口に勇者が今までいなかつたことは聞き及んでいますが、アリギ村には勇者が在籍しているのですよね？」

私はその言葉に眉をしかめた。

アリギ村の勇者。知つてゐる。知り合ひではないし、話したこともないが話には聞いたことがある。

「いるよ。超ベテランが」

「なら彼に教授を請うてみるのも一つの手では？ 我々では教えられないこともあるでしょうし」

ジョシュが言つ。

勇者教育を始めて一ヶ月以上が経つてゐる。何しろ勇者サマが物を知らない子供だったということもあり教えることはまだ多いが、ジョシュが教えられるのは知識だけ。それも ジョシュが生まれてからもそれくらいしか経つていないのでしょうがないことだが 本から学んだ知識がほとんどである。剣術や体術は現在アリギ村のヤト兄に教わつてゐるが、それ以外が意外と難関である。戦術論は教えられても、実戦経験がない。さらに言えば、私含めうちのモンスターたちも勇者特有の現象に遭遇したことがないのだ。私だってちゃんと勇者に会つたのはあのガキンチヨ勇者サマが初めてだ。

だからこそ、先達である他の勇者に教えを請うた方がいいとは思うのだ。思うのだが。

「…………アリギ村の勇者が何歳か知つてる？」

私の心底嫌そうな声にジョシュが不審げな顔をした。この様子では知らないのだろう。

「ベテランと言うなら…………四十代ですか？」

私は首を横に振る。

「三十代？」

私は首を再び横に振つた。

「…………五十代？」

ジョシュが愕然として呟いた。

しかし甘い。

「アリギ村の勇者サマはね」

言つたんそこで言葉を区切る。口にするのに抵抗がある年齢なのだ。ヤトから最初に話を聞いた時は冗談かと思つたくらいだ。

「御歳八十一歳だよ」

ジョシュが動きを止めた。元々表情がない奴なので分かりづらいが、一分経つても口を開かなかつたのでジョシュの目の前で手をひらひらと振つてみる。

うん、こいつ固まつてゐる。さすがに思考停止したか。

「……………申し訳ありません、魔王様」

なんとか石化が解けたらしいジョシュがぎこちなく言つ。

「どうやら聞き間違えたらしいので、もう一度言つていただけますか?」

諦めが悪い奴だ。

「だーかーら、八十一歳! 勇者歴六十年!」

一般人なら隠居していてもおかしくない年齢だ。つていうかその歳で勇者をしてるのがおかしい。全力で間違つてゐる。

「何か人間以外の血が混ざつてゐるとか……?」

ジョシュは耳にした事実が信じられないのであらう、目を白黒させてゐる

「交じりつ氣なしの人間だよ。見た目だけで言つならアリギ村の魔王と遜色ない老け具合。多分勇者サマと並べたらおじいちゃんと思つて感じじゃない?」

多分アリギ村の勇者は人間では最年長勇者じゃなかろうか。大抵の人間は歳を食つて体力が落ちると勇者としての資格を喪失してしまう。誰が判断しているのかは当然謎である。

「その歳まで勇者資格がなくならないといつことば、相當に強いんですねか?」

知的好奇心がわき上がつてきたのか、ジョシュの目がきらりと光る。思わず乾いた笑いが浮かんだ。

「強いらしいけどね。先生にはしたくないなあ

「それはなぜですか?」

私は肩をすくめた。

「明日にでもアリギ村にカメをやつて自分の田で確かめてみたら?」

この時、私は別に他意があつてこう言つたわけではない。百聞は一見にしかずというし、私にアリギ村の勇者のこと教えてくれたのが魔王ジジイだつたということもあるので、もしかしたら違つてゐるかもしれないと考えたからだ。

翌日の夜、真つ赤な顔をしたジョシュから猛抗議を受けた。

どうやらアリギ村の勇者サマはジジイから聞いた通り、ジジイの同類だつたらしい。

ま、要するに色ボケジジイという奴だ。若い女性の湯あみをのぞいたり、若い女性に抱きついたり、そうでない時は普通のご老人よろしく日向ぼっこをしたりしている。都合の悪い時はボケ老人のふりをして誤魔化すのだからタチが悪い。

で、アリギ村の勇者の一日をしつかりと記録したカメが、しつかり記録しすぎたせいでうら若きお姉さんたちのあられもない姿も映していただしい。鳥型モンスターであるカメはともかく、人型モンスターかつ低年齢であるジョシュには刺激が強すぎたようだ。低年齢つつか初心? しかし初心にしろ低年齢にしろ恐ろしくジョシュには似合わない言葉だな。

ジョシュの抗議は「ぐくぐく適当に受け流したのだが、アリギ村の勇者について「破廉恥だ」と評したのはなかなかに面白かった。破廉恥て。お前は神に仕えて禁欲を貫く神官か。

そういえばアリギ村の勇者は傍田から見れば魔王ジジイと同類なのが、同族嫌悪といつやつか両者はひどくがみ合つてゐる。うつかりジジイに勇者の話題を振つてしまつと、それだけで最低でも小一時間

は勇者の悪口を聞くことになつてしまつ。

アリギ村のジジイとも友好関係を崩したくない私としては、これ以上勇者たちに肩入れをして立場をまずくするのは避けたいところだ。

「アリギ村の勇者はなしとして、もう少ししまともな勇者をこ存じないんですか？」

ようやくジョシュの気が済んだらしく、まだ声が微妙に刺々しいが違う質問をしてきた。

それにしてアリギ村の勇者が勇者の癖にまともじやないとかひどい言いようだな。アリギ村の勇者は男としては間違つてないってうちの村長が言つてたぞ。ハゲが同じことしたら間違いなくタコ殴りだらうが。

そもそも自己犠牲の精神にあふれた勇者たちがまともな人間と言えるのかどうか私としては疑問である。勇者に面倒事を押し付ける気満々の（そしてそれを当然と思いこんでいる）連中のために死ぬような目に遭うのを覚悟で困難に挑むなど、正気の沙汰じやない。これが魔王ならば無理な仕事はしないし、命の危険があるならば高額な報酬を確約させなければ絶対にそういうた話は受けないに違いない。

話が逸れた。

「アリギ村以外の勇者ねえ」

私は頭をひねる。

私の支配しているツキバ村は規模の大きい村や町に囲まれている村である。

ツキバ村の東には勇者サマが住んでいる隣村^{バーカー}がある。魔王は大蛇。今まで勇者がいなかつたのでその線はなし。

西はジジイのいるアリギ村。ここに勇者はジョシュに駄目だしされたからもちろんだめ。

あとは北か南の一択である。

「南のチャーネはどうですか？」

チャーネといつのはツキバ村の南にある海沿いにある港町だ。規模が大きく、災害もそこそここの数見舞われたはずだが、勇者がなんとか解決してきた。

だが私は首を振る。

「チャーネの勇者は性格がちょっとアレだつてチャーネが言ってたから止めた方が無難じやないかな」

「チャーネ様……といつと、チャーネの魔王をされている？」

「そ。人魚の魔王」

数少ない女魔王仲間である。あちらの方がはるかに強いが。

「チャーネの勇者は見栄つ張りでカッコつけだから有事の際以外は役に立たないつてさ」

「例を言つていただいても？」

アリギ村の勇者の事があつたからだろつ、ジョシュはやけに慎重にそう言つた。

私はひょいと肩をすくめると、チャーネから聞いたことをかいつまんで説明した。

「割とチャーネがやんちゃで、商船から物資をちよろまかしたりするのね。で、それを退治に勇者が出てくるらしいんだけど、その勇者つていうのが水恐怖症で、チャーネが沖の方に行つちゃうと魔法を何発か放つてから『ふつ、今日はこのくらいにしておいてやろつ』って言つて帰つちゃうんだつて」

「…………使えないです」

ジョシュが眉間にしわを寄せた。

「ま、壊滅的被害じやないからねえ」

私は肩をすくめた。こんな話を聞けばやつと諦めるかと思つたが、思いのほかジョシュは諦めが悪かった。

「しかしチアーネなら水害も多いはずですよね。港町ですし、確かにジョシュの言うことは正しい。チアーネは過去数年で結構な回数水害に襲われた。

襲われたのだが、

「今チアーネにいる勇者は一年前に来たばかりだよ。前年までいた勇者は引退して、今は家族と一緒にもうちょっと南の方の島を買取つて余生を過ごしてゐる」

「では今水害が起これば？」

「勇者が死ぬ氣で頑張るんじゃない？」

仮にも勇者だ、恐怖のあまりの心臓発作で死ぬこともあるまい。ジョシュは私の回答を聞いて黙つてしまつた。無表情なその顔からは心中が読みとれない。ま、予想はできそうだが。

しばらくしてジョシュは氣分を切り替えたのか、眼鏡をすつと押し上げて口を開いた。

「では、北のクタカ村の勇者は？」

クタカ村か。あそこの魔王とは交流はあるが……

「無理だと思うなあ」

「なぜですか？」

関係ないが、ジョシュはもう少し柔らかな言葉づかいを学ぶべきだと思う。質問の前に一言「そつなんですか」というだけでも印象が違うといつものだ。質問ばかりされるどうんざりしそうだ。日々お子様たちから質問攻めされても平氣な顔をしているジョシュは心底すごいと思う。

ま、面倒くさくとも聞かれたら答えないわけにもいくまい。

「……あそこは勇者が巫女さんなのよ」

「巫女、ですか」

「んでもってご神木が魔王」

「…………はい？」

なんだ、誰か一人くらいモンスターがジョシュに説明をしてくれていると思ったのだが、思いのほかジョシュは周辺魔王について知らなかつたようだ。じゃあ普段ジョシュと他のモンスターはどんな話してるんだ？ ああ、勇者サマのことか。

いい機会だし、クタカ村の魔王についても詳しく教えておこう。

私はジョシュに對してクタカ村の魔王と勇者について説明することにした。

＊＊＊

クタカ村には代々ご神木信仰なるものがあつた。「ご神木は村の中心にそびえ立つている樹齢千年と伝わる大木である。それに祈りをささげる巫女の一族がいた。

先々代のクタカ村魔王はじく普通の魔王だつたと聞く。

普通の魔王というのも変な表現だが、うちの大陸では「むやみと支配下の人間を殺さない」という取り決めがある。大陸を統括する魔王の方針だ。支配というよりも共生・共存を目指している。それさえ守れば普通の魔王として認識される。ちなみにツキバ村の先代魔王はその取り決めに抵触していた。が、人死にが極めて少ないという理由で処分まではされなかつた。何より魔王を倒す勇者が存在しなかつたのは致命的だつた。

それはさておき、先々代の魔王が訣あつて死亡した後が問題だつた。

後任の魔王が女好きだつたのだ。いや、そこまでは問題なかつたのだが見始めた女が問題だつた。

ご神木を守る巫女さんだつたのである。

もちろん巫女さん以外にも先代魔王は村中の女に手を出したのは言つまでもない。しかし巫女さんは巫女さんであるがゆえに唯一魔王の口説きに応じなかつた。

クタカ村の教えによれば、巫女さんは巫女である間はご神木のみに尽くさなければならないのだという。ではその巫女さんはどうやつて決めるのかと言えば、ご神木からご神託が下るのだとか。巫女さんが自由の身となつた状態で魔王と恋をするのは構わなかつたかもしれない。だが彼女は巫女だつた。

簡単になびかない女を（しかもそれが美人となれば）どうしてもモノにしたくなるのが女好きといつものらしい。魔王の行動は日に日にエスカレートしていった。

それに痺れを切らしたのは誰であろう、ご神木だつた。正確に言つならば、ご神木に宿つた精靈だ。

村を支配する魔王は必要悪である。しかしこのままでは大事な巫女を魔王に手籠にされるのではないか。そう危惧を抱いたご神木は思い切つた行動に出た。

そう、魔王試験に挑戦したのである。

試験は一発合格だつた。しかも本体であるご神木はクタカ村に残した状態で、である。

さらに驚いたことに、彼はその後にある領地決めでクタカ村を支

配する魔王に勝負を挑み、見事勝利して支配権を奪い取った。

そしてそれと同時に、村に残っていた巫女さんである女性が『勇者』となつた。

そして現在、クタカ村の魔王は「神木である精霊、ククロであり、クタカ村の勇者は巫女である女性、リリなのである。

＊＊

一通り私が説明を終えると、ジョシュは首を傾げた。

「つまり魔王様は、クタカ村の魔王と勇者は元から親しい間柄だからこその参考にはならない、と？」

「違う」

ジョシュの言葉に食い込むように私は否定した。

「では……勇者が元巫女だといつのなら戦闘に慣れていないから、とか？」

「それも違う」

「勇者になつて歴が浅いから？」

「違う」

ジョシュの言葉を否定しながら口をとがらせた。

私の話を聞いたら少しは察してくれてもいいんじゃないかとも思うが、まあ無茶ぶりだと自覚しているのでこらえた。

「クタカ村の勇者と魔王はさ、仲がいいのよ。そりやもう熱烈に何しろ巫女さんのことを守るために魔王になるよつなん」神木の精靈である。

巫女さんも女だ。自分を守るために魔王を倒した相手を、しかも元々信仰の対象だった相手に対しても悪い感情は持たない。

だから現在は、

「大陸中に評判が轟くほどの馬鹿ツプルになつてゐるわけよ」
勇者と魔王、禁断の愛！ と一時期騒然となつたそうだが、現在はまあ落ち着いてゐる。何年経つても馬鹿ツプルが変わる気配がないからだ。

ふとジョシュの方を見てみると、まだぞろ固まつてゐた。頭の固い奴だ。

といふか、

「ジョシュ、あんたククロに会つたことあるでしょ？ 一週間くらい前に来てたじやん。散歩に一つて」

あの魔王は何が楽しいのかわざわざツキバ村に来て森林浴をするのである。毎度思うが自分の村でやれ。つていうかご神木が森林浴つてなんでなんだ。自分自身の森林パワー浴びりよ。

「……セーターを拉致していつた方ですか？」

思い当たつたらしいジョシュがはつとした様子で言つた。
「そ。定期的にリフレッシュしたいんだつて」

今まで何体のセーターが連れていかれたことか。連れていかれたセーターはそのままご神木専用の手入れ師にされている。

「しかし……勇者の方は？」

「会えるわけないでしょ。ククロの掌中の珠なんだから」

元々クタカ村の巫女というのは外部との接触が少ないので。ククロの伴侶となればなおのこと外部との接触は制限される。

「勇者サマも男だし、ピールも男だし、ジョシュも男でしょ？ 教えてくれつて言つてもククロに一蹴されるんじやないかな」

下手すりや痛い目に遭うかもしね。

私の言葉にジョシュは頭を抱えてしまつた。

「……つまりツキバ村の近隣にはまともな勇者がいないといふ」とですか？」

うめくような声に、私は肩をすくめた。

「うちの勇者サマ含めてね

いつそ近隣の変わり種勇者に教えを請うて、イロモノ勇者にしてしまっても手かもしれない、と考えたが、そうなった場合責任はどう考へても私に来るし、私の教育のせいで勇者サマがイロモノになつたという評判は不本意である。

その辺はジョシュも同じだったようで、周辺の先輩勇者に指導して貰おう作戦は企画段階で終了したのだつた。

まともな奴いないのかなこの辺。

第21戦 禁忌を犯すなら（前書き）

今回は虫ネタにつき苦手な方は注意。

第21戦 禁忌を犯すなら

よく晴れた日のことだった。

魂が抜けたような状態のお子様一人をモンスターたちが『そこ』から連れだした。家の中に入れるにはいささか汚れていたので、私は遠慮なく魔法で出した水球をお子様一人にぶつけた。

気付けになるかと思ったが、それでもなお、お子様一人は呆然としたままである。

「だから入るなって言ったのに」

私がため息をつく傍らで、モンスターたちは忙しそうに立ち働いていた。

やつてはいけないと言われるとやりたくなるのは人の性つてもんだろう。

けれどもやつてはいけないと言われるにはそれなりに理由があるわけで。

事の起こりは数時間前だ。

「なあ、あそこの小屋つてなんの小屋なんだ？」

修練が始まる少し前、勇者サマがそう尋ねてきた。

彼が指差しているのは魔王城からも鍛錬場からも微妙に離れた場所にある木造の小屋で、赤い屋根に白い壁、屋根には煙突と天窓がついている。出入口である扉は小さく、可愛らしいドアノックがついている。

ちなみにテスハにおいて一般的なのは石造りの家である。ツキバ村周辺も例にもれず石造りの家が多い。屋根には傾斜がある。また、かまどやら暖炉やらを使っているためほとんどの家には煙突がつい

ている。かまびはともかく、この辺は冬に冷え込むために暖炉は必須なのである。

それはともかく、石造りの家しか見たことのない勇者サマにとつて、件の小屋は珍しく感じたに違いない。この辺は物置ですら木造の小屋はない。

それにしても嫌なものに目をつけたなこのお子様。

「……あれはシルキーの家だから、入っちゃ駄目よ」

つていうかなるべくその話題には触れてほしくない。シルキーという単語を口にするのも個人的には嫌だ。ジョシュがいれば説明させたかもしれないが、ついてないことにジョシュは他のモンスターたちと次の鍛錬の準備のためにこの場にはいなかつた。つていうかジョシュもシルキーについて知つてゐがどうか怪しい。教えた覚えないし。

「シルキー？」

勇者サマが首を傾げてピールと顔を見合わせている。二人とも知らないのだろう。

さらに質問してきそうな気配を察して、私は一気にまくしたてた。「あそこは決まったモンスター以外入っちゃ駄目な場所なの。入る」と恐ろしい目に遭うから絶対に入っちゃ駄目よ！」

勇者サマが理解したかも確認せず、私はその場から逃げだした。シルキーたちのことは口にしたくもない！

よくよく考えなくとも、自分が勇者サマぐらいの年齢の時に、「絶対に入つてはいけません」と言われた場所に入らなかつたかといえばもちろん否なのである。むしろ危険とか恐いとか、そういうた言葉は自身の冒険心を刺激するに十分だつた。

まあそういうわけで数時間後、鍛錬と鍛錬の間の短い休息時間に、空気を裂くような子供の悲鳴が響いたのだった。

そして冒頭に戻る。

「……魔王様、彼らは何を見たのですか？」

ジョシュが不思議そうに尋ねてくる。私は肩をすくめた。

「シルキーに襲われたんでしょ」

「おそ、われた？ 彼らを襲う様なモンスターがいるのですか？」心底びっくりしたようだ、ジョシュには珍しく目をまん丸にしていた。

「まあ、襲うというかじゃれるというか……」

私はため息をついた。

うちのモンスターは凝り性が多い。よく言えば勤勉である。ただし自分の興味がある分野にだけ。

役に立つので言えば、魔法道具の開発、日用品の製作、料理、植物の栽培。役に立たないので言えばカタツムリレースの選手（現在第二十期生）育成、砂利で作つた芸術作品、骨の収集などなど。何故か酒の研究をする奴がツキバ村に貸し出した奴以外いない。もつと増えればいいのに。

とかく、そういう凝り性のモンスターたちは信じられないくらい己の見出した道に手を掛ける。

さて、日用品を製作することに熱中したモンスターたちはそれぞれのやりたいことに分化した。

そんな中、ヨータと呼ばれるモンスターは日用品の中でも布製品を作ることに熱中した。羊を育てて毛糸を作るというのはすでにやつているモンスターがいたので、ヨータが挑戦したのは絹糸、つまりは養蚕だった。

現在テスハに存在している蚕というのは人の手がないと成長でき

ない虫と言われている。餌も自分で取れないし、木にまともに止まることもできないのだ。よつて、人が小屋の中で餌を与えて育てなければならない。ついでに言つと、温度や湿度なんかも管理する必要がある非常にテリケートな虫なんだとか。

そういうわけで、養蚕に初挑戦だったヨータは非常に苦戦した。温度の調節を間違えて蚕が全滅したときもあるし、餌が足りなくて蚕が飢え死にしたときもあった。ヨータが蚕の数を増やした時には餌となる木が丸裸になつてしまつとセーターと対立して熱いバトルを繰り広げたこともあつた。

けれども苦心の結果、ヨータは無事に蚕を繭になるまで育て上げることができたのだつた。

苦心の末だつた。

苦心の末過ぎて、ヨータは蚕にかなり愛着を抱いていた。そりやあもう、「こんな可愛い子たちを蓋ゆでになんて出来ない！」と言ひだすくらいに。本末転倒である。

結局、周囲からやこのやこのと言われながらも、ヨータは蚕たちをペットとして育てることにしたのだった。蚕は羽化すると割と早くに産卵して死んでしまうので、蚕一世、蚕三世などどんどん世代が変わつていつた。それでもなお、ヨータの熱は冷めることなく、蚕たちを可愛がつたのだった。蚕専用の可愛らしい小屋を作り、専用の餌用林をつくり、甲斐甲斐しく世話をした。

結果、ある時から蚕たちがモンスターになつた。

これにはみんな驚いた。前代未聞である。

とはいゝ、モンスターになつた蚕たちは普通の蚕とさほど変わらなかつた。違いと言えば、体のサイズと、繭をつくる前から太い絹糸を口から吐き出すようになったことと、寿命ぐらいなものだ。

名前について私はキヌちゃんで良いじゃないかと言つたのだが、

ヨータにより却下され、可愛いからという理由でシルキーという名前になつた。可愛らしい名前とは裏腹に、シルキーは元が蚕なのでかなり見た目がグロテスクである。名前詐欺もいいところだ。

で、そこまではいいのだが、問題はシルキーたちの習性だつた。

幼虫の時はまだ動きが鈍いからいい。

けれども、成虫になつたシルキーたちは（ヨータ曰く）甘えん坊なので、近付いてきた人やモンスターたちにじゅれつくのである。想像してほしい、手のひらよりも大きい蛾が顔面めがけて飛んでくる様を。

それも一匹や二匹ではない。ヨータの丹精込めた世話により、シルキー達は常時成虫だけでも百匹近くいる。そのどれもが甘えん坊（あくまでヨータの言）なので、人でもモンスターでも小屋に入つてくる気配があるとそちらの方に一気に群がるのだ。幼虫のシルキーもシルキーで甘えん坊（個人的には認めたくない）なので、成虫よりはゆっくりだが這つてきてはこちらにべたりと体を寄せてくる。想像しなくていい。気持ち悪いから。

知らずにシルキーの小屋に入つてしまつた私は彼らの熱烈な洗礼を受けてしまい、絶叫した。半狂乱になりながら逃げだしたのだが、一週間近く悪夢にうなされた。未だにシルキーという名前を聞くと鳥肌が立つくらいの恐怖だつた。

だから私は誓つたのだ。シルキーの小屋には近付くまい、と。

「とまあ、そういうわけだから、勇者サマたちもシルキーに思いつきり甘えられたんでしょ」

未だ鱗粉が取れ切つていない勇者サマ達はシルキー達に耐性がなかつたらしい。あんな巨大な虫に平然としている子供も少ないだろうが。

「な、なんか、なんかペタつて！ ペタつてしたの！」

ピールがガタガタと震えながら叫ぶ。血の気が引き廻わたせいで
もはや土氣色だ。

「遊ぼうって言いながら襲つて来たんだつ！」

勇者サマも震えながら叫んだ。

「襲われちゃいないでしょ。噛まれてもいみたいだし」「
多少体に生糸や鱗粉がついていたりはするが、二人とも怪我はし
ていない。

涙ぐんでいるお子様一人に私はやれやれと肩を落とした。

「要するに、あれよね」

「あれ、とは？」

ジョシュが私の方へ視線を向ける。私はひょいと肩をすくめた。
「事前の情報収集つて大事だよねつてこと。行くなと言われる場所
に行くなら。分かつた？」

私の遅すぎる忠告に、ピールはふんふんとうなずき、勇者サマは
恨めしげに私を睨んできた。

「つ。恨むなら自分の軽率さを恨むことだ。十歳かそこらのお子様に言つのも酷な話だが、まあ私魔王だし。
それに勇者なんて何歳であるかと高潔で清廉で正義に則った行動を
求められるものだし構わないだろう。」

余談だが、チャレンジ精神なのか何なのかその後にジョシュもシリキーの小屋に入った。

十分後ぐらいに、いつも通りの無表情のジョシュが出てきたのだが、小屋から三歩離れたところで立つたまま氣絶してしまった。
どうやらモンスターであるジョシュにもシリキーの洗礼はきつかったらしい。

その日の勉強などはすべて中止となつたので私としては万々歳だ。

とまあこんなわけで、お子様一人とジヨシュは好奇心は猫をも殺すということとわざの意味を痛感したのだった。

これからは行動を自重してほしいと願う。あいつらの性格からいって無理だろうが。

基本的に自己中心的かつ団体行動に向かないな魔王たちも、魔王になる限りは魔王試験に合格して魔王連盟に加盟しなければならない。

試験に合格せずとも勝手に魔王を名乗ることもできるが、その場合勇者以外からの攻撃でも死ぬし、歳も普通にとる（魔王になると老化しにくくなる）。また、試験合格後に魔王連盟に加盟しないでぶつちぎる選択肢もあるにはあるが、その場合支配する村が正規の手段で得られない。自力で他の魔王を排除して余所の町や村を支配するといつとも可能ではあるが、その代わりにこれ幸いと他の魔王から袋叩きにされる可能性がある。「他の魔王の領地を侵略してはならない」という取り決めは、魔王連盟に加盟しているときのみ有効だからだ。

どれだけその野良魔王が強かろうが、個人主義の魔王はそういう時に限つて一致団結するため負けは必至である。過去の例を聞いてみると、一対百なんていうのもあつたそうだ。いじめかつこ悪いといつ考えは魔王の中には存在しない。だって魔王だし。卑怯で何が悪い。

話が逸れた。

とにかく、魔王連盟に加盟している限りは様々な権利が保証される。それと同時に義務も発生するわけだ。

夕方、自室のソファに座る私の前に四つの幻像が浮かびあがつていた。

「今年の魔王試験と総会のうちの地域の役員は嬢ちゃんで決定じゃな」

「賛成っ！」

「そうだな」

「ん」

「……今年のつていうか三年連續なんだけど私

私の前に浮かび上がる四つの幻像、そこにはツキバ村の近隣の四人の魔王が映っていた。通信魔法の一種だ。上記の台詞は上からアリギ村のジジイ、チアーネのディーネ、クタカ村のククロ、バークロのミーミーヤンジャ、最後が私である。

さて、ツキバ村含めて上記の地域はクレハ地方と呼ばれているのだが、魔王試験と魔王総会においては各地方から一人ずつ役員という名の雑用係が招集される。今日はその役員を決める話し合いという名の決定通告である。去年もおととしも話し合つた記憶なんぞかけらもない。

「今年こそ役員は公平にくじで決めようよ」

私が抗議すると、ディーネが笑う。

「なんだい、文句があるなら魔法勝負で決めてもいいんだよ？」「拳で決めてもいいんじやよ」

と、ジジイも嫌な笑いを浮かべて言つ。

「ワーライ役員ガンバルー」

今更言つまでもないが、私は最弱である。恐らくは彼らが半分の力を出さないでも軽く虫の息になる自信がある。要するに絶対勝てない。

まあそういうわけだからクレハ地方での面倒くさい仕事は全て私に押し付けられるというわけだ。魔王に良心とか思いやりを期待するの無駄なことである。だって魔王だし。くそつ。

「やついいえば、空ちゃん子守の方ははがぢつてるかい？」

と、ディーネが面白そうに聞いてくる。建前上の話しえいが終わったのでここからは雑談である。ちなみに彼女の言つ空ちゃんというのは、不本意な私の通称「空の魔王」を略したものである。

「……子守じやなくて教育係ね」

私が嫌そうに訂正すると、ククロがびつくりした顔をで言つ。

「あれ、あの子たちつて空の隠し子じやなかつたの？」

ちょっと待てククロ。あんた会話こそしたことはないけど勇者ママ達見たことあるはずでしちゃうが。

「私まだ十九だから！ あんなでかい上に生意氣な子供いてたまるか！」

憤然として抗議すると、ジジイがおかしそうに笑つ。

「いやいや、有翼族は恋多き種族というから、おかしくはないじやろ？ うむ、若いもんはいいの？ ああ、でも嬢ちゃんには色氣がないから無理じやな」

「何かにつけては家でだらだらしてるか食べてるか飲んでるかだものねえ。ちょっとはおしゃれして外に出たらどうだい？ そんなんじやすぐにウミウシみたいな締りのない体になつちまうよ」

人の心に突き刺さる言葉を次々と放つてくる連中である。＝＝＝＝＝ヤンジャが話に加わらないのが不幸中の幸いだ。奴の場合、単にうとうとしているから話を聞いていいだけだが。

「最近はちゃんと運動してるし体も鍛えてるから大丈夫でしょ。余計なお世話つ」

「ふむ。嬢ちゃんが体を鍛えるようになるたあの？ 子育てもやつてみるもんじやな」

感心したようにジジイが言つ。だから教育係だつちゅうのに。

「しつかし空ちゃんも豪胆だね。勇者を育てるなんて最初に聞いた時は耳を疑つちまつたよ。フグが自分の毒にあたつて死んじまつたつていう方がまだ納得がいくつてもんさ」

しみじみというディーネに、ククロが不思議そうに首を傾げた。

「あの子供、バーク 口の子供なんだろう? なんでわざわざ空の
が。バーク 口にも腕つ節の強い奴はいるだろ?」。たゞや
し子なんだろ?」

「違うからつ!」

否定するも三人とも笑つていて話にならない。これはもつ遊ばれ
ているらしい。

私が唸つていると、部屋の扉が叩かれた。返事も聞かずに入つて
きたのはトウイである。

「談笑中のところ悪いな。クレハ地方の役員はこいつだな?」

女の部屋にいきなり入つてくるな。

つていうかせめて役員は誰になつたかつて聞いてくれ。それじゃ
最初から私に決まつてたみたいじゃないか。決まつてたけど。……
悲しくなんかないやい。

「おお、トウイか。久しいの」

と、ジジイが言つ。

「この通信魔法は範囲内の人間なら映し出すため、他の四人にもト
ウイは見えているのだ。

トウイはおもむろに私の隣りに座つた。オヤジ臭いから近付かな
いでほしい。

「空ちやんに決まつたよ。なんだい、総会までまだ日はあるのに急
いでるねえ」

デイーネが呆れたように言つと、トウイは苦々しげな顔をした。

「お前らの誰一人として締め切りを守らないからだ。役員の決定通
知すらこっちに出してこないんじや、仕事が回せねえだろ?」が

「仕事は部下にさせるもんじやろ。わざわざお前さんが嬢ちゃんの
ところまで行く必要はあるまいに」

仕事を全て部下に丸投げしているジジイらしい言葉である。私が
言えた義理じやないが。

「仕事ついでに様子を見に、な。美味しい飯も食いたいし」

現在夕方である。長居するつもりかこのおっさん。

「それからお前ら、総会にはちゃんと来いよ。来なかつたらこっちが絞られるんだからな。特にミーミーヤンジャ！ お前また寝坊したりすんなよ」

「…………ん」

かなり不安な返答である。

その後小一時間ほど井戸端会議的なことを喋つてから通信は終了した。ミーミーヤンジャはずつと寝ていた。

「さて、こつからが本題なんだが……」

幻像が消えて静かになった部屋で、トウイが煙草に火をつける。
「お前、総会の間あのちびつごどつするか決めてるか？」

あのちびつこ、といつのは勇者サマのことだひつ。

魔王試験といつのは魔王総会の開催中に行われる。いかに総会が白熱していようとも試験官及び雑用係はそこから抜け出して仕事をしなければならない。

ま、白熱しているといつても単に乱闘騒ぎや小さな子供並みの口喧嘩だから、そいつた騒ぎが大好きな連中以外は構わないのだけれども。

ともかく、魔王試験に合格した新人魔王たちは、試験終了後に魔王総会へとすぐさま参加し、所信表明をしてから自分の支配する領地を決めるというのが通例である。

私の時は、すでに魔王試験での事が伝わっていたらしく爆笑とともに迎え入れられた。そういう時は無駄に団結力があるのが魔王なのである。

なんにせよ、魔王総会が終わるまでは一週間近くかかるといつす法だ。その間当然ながら私はツキバ村を空けることになる。

勇者サマのことをジョシュに任せるとこもあるのだが、それ

にしたつて一週間だ。モンスターたちはおの子様たちにやたらと甘いし、仕事から帰つてきたら私の城の主が勇者サマになつていていた、なんてことも恐ろしいことにありつる。

ジョシュをえおいていけばなんとかなるかもしけないが、出来れば人語を話すモンスターを総会へ連れていいきたい。魔王試験の受付係なんかだと人語を話せないと困るのだ。何しろ受験生たちはまだ魔王になつていないので、モンスター言語が分からぬ。それにこの世界で人語は共通語。普段人語を話さない種族などもモンスター言語は分からなくとも人語は分かる。ぜひともジョシュに受け付けの仕事を押し付けたいところだ。

「総会の間は休暇つてことにして、勇者サマは自分の村でくつろぐなりピールと遊ぶなりしておいてもらおうかと思つてるんだけど、何があるの？」

「いやな……」

トウイは煙を吐き出しながら頭をかいた。なんとも困り果てた顔をしている。

「その一、あれだ。お前さん、あのちびっこを総会に連れてくるつもりないか？」

「はあ！？」

思わず素つ頓狂な声が出た。

「ちょっと、トウイ！ 何とち狂つたこと言つてんの？ いつの間におっさんから耄碌ジジイに変わつたの？ それとも水虫で頭やられた？」

「俺は水虫じやねえ！ それからおっさんじゃなくてお兄さんと呼べ！」

ヤニ臭い無精ひげ生やしたおっさんが何をぬかすか。

「そんなことはどうでもいいけど、なんで勇者サマを魔王総会に連れてけなんて言つわけ？」

「どうでもつてお前……！」

トウイがショックを受けたよつた顔をしているが、その辺は構つてられるか。

やがてトウイも言い争つことの不毛さに気付いたよつで、一つ咳払いをして話を本題に戻した。

「あー……お前さん、週刊魔王自身つて雑誌知つてるか?」

「購読してるよ。最近は忙しくて読んでないけど……?」

唐突な話題の変更に私は首を傾げた。

件の雑誌というのは、要するに魔王の間のみに流通する情報誌である。記者は某魔王の配下だそうで、魔王の役に立つ特集やら面白情報やらが書かれている。

私も愛読していたのだが、最近は勇者教育が忙しくて部屋の隅に積まれたままの状態だ。二か月分近いそれがつづらほこりをかぶつている。

私の視線に気付いたトウイは立ち上がると、雑誌の山に近付き、その中から一冊を取り出した。

「前にお前さんとこに記者が来たる?」

トウイに聞かれ、私はそこでようやく思い出した。

「来た来た、一ヶ月ぐらい前に。勇者を育てる魔王つてことで取材させてくれつて。面倒だから断つたけど」

「お前さんはな」

そう言つて、トウイはペラペラとページをめくる。

そしてある記事を私に示した。

大きな見開きページには、得意満面の勇者サマの顔が映つていた。見出しに踊る文字には、

『魔王に教育される勇者「僕が魔王を退治してやるー」』

「あのちびつこは取材を受けたらしい」

「トウイはひょいと肩をくもめた。

私はがくりとうなだれる。

あんつのお子様がつ！

かなりの脱力感が襲つてくると同時にふつふつと怒りも湧いてくる。なにこの矛盾をはらんだ感情。

頭を抱えて今後のことを憂いでいると、トウイが私の肩を叩いた。「やつちまつたもんはしょうがない。」この記事もまあ……好意的だ」色々おかしいだろそれ。

と思いつつも記事を読んでみれば、確かに好意的だ。

こう、なんて言つんだろう。小さい子供が将来の夢を希望いっぱい夢いいっぱい語つてる様を応援している感じといつか……。記事の締めの文も「今後の成長に期待」ってなつてるし。これでいいのが週刊魔王自身。

特に女魔王からの反応が良かつたらしくてな。月一で特集組むことが決まったそうだ

……頭が痛い。

「で、今回の総会でも余興としてあのちびっこを連れて来れないかつて要望があつてな」

「嫌。絶対嫌」

即座に断ると、トウイは苦笑した。

「だらうな。あのちびっこにや早いだろつし」

「つていうか私がストレスで死ぬから」

ただでさえ気苦労の多い魔王総会、あの生意気な勇者サマを連れていくなんて考えるだけでも胃が痛くなりそうだ。

つていうかいつの時期だろうと勇者を魔王総会に連れていくなんて言語道断だ。そもそも魔王総会は魔王以外には秘匿とされているものである。日時も会場もそもそもその存在も。

「俺としても、あのちびっこは連れて行かない方がいいと思つぜ。大概の勇者つてのはほら、いい歳で正義感も強いし分別もついてる。だが子供なら乗せやすいからな。学者肌の連中が研究したいってうるさいんだ」

やれやれとトウイが肩をすくめる。

私はうんざりとした気分になつた。

「それって、連れていかなかつたら私が文句言われない？」

魔王連盟の中でも下から数えが方が圧倒的に早い実力の持ち主だと自負している私である。他の魔王からの反感は買いたくない。

「ま、その時は俺が適当にフォローしといてやるぜ。肩書きつてのは」こういう時に使うもんだからな」

トウェイが力々と笑う。調子のいいおっさんだが、実力はぴか一だ。

「くれぐれもよろしくね。テスハの代表魔王様」

「おう。大船に乗つたつもりでどーんと構えとけ」

しかしちょつとばかり不安が残るのはどうしようもあるまい。

結局、勇者サマ達と会わないようにはしていたが、トウェイはそのまままつちで夕食を食べた上に泊まつていき、トウェイの部下が連れ戻しに来た翌日の昼まで居座つたのだった。

代表魔王つて実は暇なのか？

第22戦 中級魔法講座（前書き）

魔法についてのわりに詳しい説明。一部ダークサイド。

第22戦 中級魔法講座

勇者サマ達が魔法の練習を開始してから一ヶ月弱。日々の魔法の練習によつて勇者サマもピールも随分と上達して來た。

当初は私、的でないと当たることができなかつた勇者サマも、まだ外すことが多いが、今では近くの的ならある程度命中をせることができるようになつてゐた。

ピールとは違つて勇者サマの魔力が低いので、一日の練習量が増やせないのが悩みどころだ。あくまで勇者サマを鍛えるのが目的のため個別指導はしない。つていうか面倒くさい。ピールは力を余らせている状態だろう。逆に勇者サマは魔法の練習があまり進まないので欲求不満な状態が続いている。

とはいゝ、魔力がなくても理論なら勉強できる。

「今日は魔法の種別について勉強しましょう

「はーい」

ジョシュの言葉にお子様一人が良い子の返事をする。

私は頬杖をついていたためにチヨークが飛んできた。うるさい奴だ。

「魔法にはいくつかの種別があります。まず第一種と言われる魔法は、水や火などの本物に近い物質を作り出すものです。現在あなた方が練習している魔法は第一種の初歩になります。あれらはある程度時間が経過すると消失します」

ジョシュが黒板に文字を書きながら解説する。

ちなみに鍛錬の際に魔法でずぶ濡れになつた後にモンスターたちがわざわざ体を拭いているのは、その魔法で出した物質が消えるま

でに風邪をひかないようつとこつ配慮らしこ。過保護だ。

「せんせー質問!」

と、勇者サマが元気よく手を挙げる。

「本物に近いぶつしつつて何だ?」

「本物に近い物質です」

答えになつてないからそれ。

不満そうな生徒たちの様子に気付いてジョシュはさらに説明した。

「……魔力が結晶化したものだと言われています。しかし、学者たちが研究しても本物に近いけれども一定時間経過すると消失する何かだとしか分かつていません」

無表情ゆえに分かりづらいが、ジョシュは微妙に困り顔のようである。

まあその気持ちもわかる。炎や雷、風なんならともかく、消失する水や土つて何なんだ一体といふ気持ちになる。魔法使いによつては宝石に偽物なども作れるのだそうだ。

反論がないことに皆が納得したと思つたのか、ジョシュは眼鏡を押し上げると説明を続けた。

「逆に第二種魔法は物質を固定化する魔法です。簡単に言えば、魔法でつくりだした物を本物にしてしまうといふことです。先ほどの水などでも、第一種魔法であれば本物にすることが可能です」

砂漠地方なんかだと水を作り出す魔法道具が飛ぶように売れるらしい。高いしそれほど水が出来るわけではないが。

と、今度はピールが首を傾げた。

「魔法で作ったお水も飲めるよね。それにお水だつて時間が経つたらおしつこになつちゃうでしょ? それじゃだめなの?」

「ぐぐぐく素朴な疑問ではあるが、なかなかにいい質問である。私が解説するつもりはないが。

ジョシュはその言葉に一つうなずくと、黒板に人間らしきものを書いた。最近ちょっと上達してきたのか、絵を見ると恐らく人間だろうと分かるぐらいにはなってきた。

「どんなものにも、抗魔力というものがあります。魔力に対しても抵抗力です。一般的には無機物よりは生物の方が強いと言われています」

ジョシュはさらに木っぽいものと丸を黒板に書き、その間に比較記号を書く。大きい方から人間（っぽいもの）、木（推定）、石（予想）となっている。それらに向かつて幾本かの矢印が書かれた。さらに内部からの矢印も書いた。

「魔法を作用させるには、外からと内からの二つの方法があります。第一種魔法で作つたものは本物の物質なので抗魔力は関係ありません。しかし第一種の魔法の水を飲むのは外からの作用になりますが体内に入ると」

言いながらジョシュは矢印を人の絵の手から（どうやら口だったらしいが）内部へと矢印を伸ばし、バツ印を書いた。

「外よりも中の方が抗魔力が強いため、吸収されることなく消失してしまいます」

「消えたらその水はどこに行くんだ？」

再び勇者サマが質問をする。子供って好奇心旺盛だな。

「本物に近い物質から魔力に戻るとされていますが、それを飲みこんだ人間に吸収されるかどうかは定かではありません。適性があるようです」

「てきせーつていうのは分かるのか？」

「分かりません」

一刀両断である。

不服そうな勇者サマに対し、ジョシュは眼鏡を押し上げながら無表情に告げた。

「何事であれ、分かることは限られています。ですから分かること

を知つて自分で考えることが重要なのです。無知蒙昧はござといつ時に自身や他の人を 殺します」

いきなりの重々しい言葉に、お子様たちはぴんと背筋を伸ばした。それを確認したジヨシユはこゝそとばかりにたたみかける。

「知は力です。たとえ力が劣っていても、体が小さくとも、それを知恵で補うことができます」

……まあ別に、適当にやつても何故かつましくのが選ばれし「勇者」って奴なんだけどね。

しかしここでその茶々を入れると勇者サマが図に乗る上にジヨシユに田茶苦茶怒られそので止めておく。沈黙は時として金だ。

「では次に、第三種の魔法について説明します」

再びジヨシユは本題に戻る。お子様たちの気合いもすっかり補充されたようだ。

「第三種魔法は空間、時空、生命に関わる魔法です
カツカツとチョークの音が響く。

「空間の転移、召喚、通信、人工生命の作成、治癒などが主なものです」

箇条書きされる文字は綺麗である。文字は、ずっと絵を使わずに文字だけで解説すればいいんじやなかろうか。

「空間の転移は、離れた場所に短い時間で移動する魔法です。距離があるほど転移は難しく、また、既知の場所でなければ移動は難しいとされています」

「僕だったらどれくらい移動できるんだ?」

勇者サマがわくわくした様子で尋ねている。いや、あんたの魔力じゃ到底無理でしょ。

しかしジヨシユは真面目腐つて答えて、

「できません」

「なんでだ！？」

シヨックを受ける勇者サマに、ジョシュはため息をつくとともになく無表情に説明する。

「第二種に限らず、魔法は一定以上の魔力がなければ発動しません。また、最初は大雑把なことしかできず、後から精密な調整が可能になります。よって、指一本分の距離の移動であっても、消費魔力を抑えられるのはその魔法を使いこなしてからということになります。料理で言うところのあれだ、当初はレシピの通りにしないと作れない。そこから分量を減らして少量の同じ味の料理を作ろうとしても難しい、という感じ。魔法の細かな調整は、それこそ小さじどころか一つまみレベルの微調整だからだ。得意な連中は神がかったレベルでの微調整が可能だが、苦手な奴はトコトコ駄目。料理オンチもかくやである。

「召喚できるものは最初は選べませんが、上達すると召喚対象を選ぶことができます。通信は簡易なものであれば声だけ、映像だけ、高度なものであれば幻像として自分と対象者を映し出すことができます。人工生命は高度であればある程寿命が延び、優れた能力を持ちます。治癒魔法はレベルが高ければ高いほど痛みなく傷を癒すことができます」

どうやら質問を挟まれる前に一気に説明したかっただらし、ジョシュは、やや早口で説明を終えた。

「治癒っていうのは回復魔法と違うの？」

ペールが首を傾げた。

ジョシュは眼鏡を押し上げた。

「回復魔法は第一種魔法と第二種魔法が混合したもので、一時的に怪我をした部分を魔法で作った血肉で補つのです」

「一時的？」

「はい。完全な第一種魔法ではないので、本来の体が回復し始めると、その部分から魔法で作り上げた部分は消失していきます。うまく使えば拷問とかにも活用できそうだ。無限に肉をえぐられ

る痛みとか発狂しそうだな。

「治癒魔法は回復魔法では治すことのできない、毒、麻痺、病気、体の内部の怪我などを治療する」ことができます

「馬鹿は治せないのよね」

無言で鞭が飛んできた。痛い。

「総じて、第三種魔法を使うには多大な魔力が必要となります。また、第三種魔法は知の魔法とも呼ばれ、知識の有無によって発現する効果が異なるとも言われています」

「別名キチガイ魔術師向け魔法、だよね」

私がため息とともに呟くと、お子様一人から訝しげな表情を向かれた。私は肩をすくめる。

「第三種魔法の中でも召喚魔法と人工生命の作成、治癒魔法は狂ったみたいに研究に没入する奴が多いのよ。召喚魔法で子供をさらつて売りとばしたり、モンスターと人間を合成させた合成獣つくりだしたり……」

年に何回かはそういう手合いが摘発される。

そのたびに哀れな被害者が発見され、一層の警戒が呼びかけられるのだが、未だ加害者も被害者も途切れることがない。

「ひどい……！」

「とんでもない悪人だな！ 僕がせーばいしてやるー！」

お子様一人が憤然としているのに、私は乾いた笑みを浮かべる。

「いつか勇者サマが強くなればできるでしょ」

私は言わなかつた。そういうたキチガイ魔術師たちはほとんどが人間で、大抵は権力者のお抱えであることを。摘発されるのは大抵トカゲのしつぽ切りであるということも。

希望的観測を述べるならば、いつか本当に勇者サマが強くなればきっとその勇者特性でもつてそれらの悪人たちを成敗することも可能だらう。……背後にいる権力者たちがどうなるかは別として。

関係ないが、その日以降お子様たちの間で魔法ごっこが流行り出した。「空間転移！」とか言いながらそれどう見てもダッシュで移動しているだけじょなんて突っ込んではいけないのだろう。

第23戦 勇者サマの家庭事情（前書き）

シリヲアス + やや
鬱話

第23戦 勇者サマの家庭事情

すつたもんだけはあつたものの、魔王総会の間は勇者教育は中止といつことになつた。先生役のジョシューも連れていくからだ。

お子様たちには建前上「夏休み」と言つておいた。馬鹿正直に魔王総会に行くのだ、なんて教える奴はいない。魔王総会は魔王のみに伝わる極秘事項なのだ。

とりあえずお子様たちには夏休みと言い渡し、私自身はバカансに出かけるということにしておいた。期間は未定。私が帰り次第そのことをモンスターがお子様たちに伝えるということにしてある。勇者サマはざるいだなんだと散々不平を鳴らされたが、その辺は無視だ。ピールが無邪気にお土産を頼んでくるものだから若干心がやさぐれた。仕事だつた。せつから数日遊んでこようかな。

私が留守の間ヤトに勇者サマのことを頼んだが、さて、エネルギーッシュなお子様が何日もつものか。一番迷惑をこらむのはヤト兄だろう。いい気味だ。

魔王総会や魔王試験の最中、私はバークー口に残してきた勇者スマの心配を まったくしていなかつた。何しろ私は下つ端役員。魔王総会の最中は田も回るような忙しさ。押し付けられた仕事を片つ端からジョシューに押し付けたというのにそれでもなおてんてこ舞いである。下つ端だから。といつか弱いから。他人の心配なんてしてられるか。

総会が終わつてくたくなつて遊ぶ元気もなく帰つて來た私を迎えたのは、なにやら複雑そうな面持ちのモンスターたちだつた。ジョシューの方を思わず見てみたが、奴も事の原因を知らないようで、無表情のまま黙つている。

とにかく報告を聞いたこと、家に入った私はソファの上

でふんぞり返った。座つてふんぞり返るのは魔王の基本スタイルだ
と思う。

留守を任せていたモンスターたちは、非常にばつの悪そうな顔を
してなかなか話しさなかつた。終いにはお互い肘やら尻尾ででつ
つき合つて報告する役目を押し付け合つだした。

そんなヤバいことが私の留守中にあつたのだろうか。

不安で嫌な汗をかいていると、意を決したように1カメ2カメが
飛んできた。そして私の目の前のローテーブルに着地する。続いて
ミルクちゃんがカメの記録した映像を映し出す水晶玉を持ってくて
テーブルの上に置いた。

それでようやく思い出した。私の留守中、ジョシュの提案で勇者
サマ達の私生活を隠し撮りをさせていたのだ。ちゃんとバークロの魔
王には許可を取つてゐる。樽一杯の酒を要求されたが。あのウワバ
ミめ。いや、本当に蛇だけだ。

普段生意気なガキンチョの弱みを掴んでやろうと云うのが私の目
的で、生活パターンから課題を見つけたり、より思考パターンを把
握たりししようというのがジョシュの目的だ。当然ながら前者は口
に出していない。言わぬが花だ。

何かまづいものでも写してしまつたんだろうか、と私は首を傾げ
た。

ややあつて映し出された映像は私の想像を裏切つた。
もちろん、悪い意味で。

木剣背負つた勇者サマが道を歩いている。遠田にじょろつちい
つり橋が見えるから、恐らくはバーク 口からアリギ村に向かつて
いるのだろう。ヤト兄のところか、ピールのところかだろう。
と、勇者サマの前方からバーク 口の子供たちがやつてきた。勇
者サマと同い年か、少し上くらいの年齢の子供が五人だ。
それまで無邪気に笑っていた子供たちは、勇者サマに気付いた途
端、その表情をがらりと変えた。

「あー！ 捨てられっ子だー！」

五人の中では一番年少であろう子供が勇者サマを馬鹿にしたよう
に指差す。

すると他の子供もクスクス笑つて、

「本當だ、捨てられっ子だ」

「いらない子だ」

「うげえ、嫌な奴と会つた、最悪う」

などと口々に言つ。

勇者サマはといえば、拳を握つてうつむいていた。いつもの威勢
の良さはどこへいったのかと思つほどだ。

「ほら、どうか行けよゴミ！」

一人が勇者サマに石を投げる。勇者サマはそれを黙つて避けた。
「避けるなよ！ 捨てられっ子の癖に！」

そう言つて別の子供が石を投げる。他の子供たちも次々に勇者サ
マに向かつて石を投げだした。その顔には嘲笑が張り付いている。
ためらいがない。十中八九、常習だ。

苦ヨモギを口の中に突つ込まれた気分になつた。口の中から頭の
芯まで一気に広がる苦々しさだ。苦ヨモギだってアブサンにすれば
苦味はあっても美味くはなるが、あれだって毒があるから飲みすぎ

ると体に悪い。

私の目の前で繰り広げられる光景はまさにそんな感じの、飲み下すのが嫌になるようなものだった。

「…………僕は勇者だぞ！」

悲鳴のように勇者サマが叫んだ。

しかしそれで子供たちの様子が変わる」とはなく、

「捨てられつ子の癖に、なーまい」

「勇者だつたら俺らに恩くすのが当然だろ」

相変わらず馬鹿にしたように子供たちほの強う。

「う、う、う、うう…………！」

恐らうは怒りだらう、顔を赤くさせた勇者サマは子供たちに突進すると、拳を振りかざした。

が、

「俺たち殴つたらお前なんか勇者じゃなくなるんだぜー。」

年長の子供の言葉に、振り下ろされかけた勇者サマの拳がぴたりと止まる。

「勇者じゃなくなつたら本当に用無しだよね」

一人が心底愉快そうに笑う。子供らしい、むき出しの悪意だ。

「どつか行けよ、ばーか」

加減のされていない蹴りが勇者サマの腹に見舞われる。勇者サマはまともなガードもとらずにそれを食らい、地面に転がつた。

子供たちはめいめいに勇者サマに石を投げたり砂を掛けたり、終いには唾を吐いたりしてその場を去つていった。

残された勇者サマはしばらくその場で倒れ伏していたが、やがてノロノロと起き上がつてアリギ村の方へと歩き出した。出来の悪い人形を彷彿とさせる、不気味に表情が欠如した顔だった。

映像が途切れた。

なるほど、これは報告し辛い。

「…………あー、そういうば勇者サマの出自について全然聞いてなかつたね」

視線が泳いでしまひ。

興味がないという面もあるが、必要以上に知りうとしなかつたしわ寄せが来たのかもしれない。ハゲも薄らハゲも勇者サマについて詳しい説明をしてこなかつたのもつと疑問に思うべきだつた。

一応うちのモンスターもボンクラではないので、今回のこと村長隣村村長を知つたらそこから勇者サマの周辺を洗うはずだ。モンスターたちはよっぽど自分たちの口では説明したくなかったのか、あらかじめ用意していたのだろう報告書らしこものをジョシュに渡している。

いや、そこは私に渡してよ。

心の中で突つ込みつつも、ジョシュの報告を待つ。

ジョシュはいつも通りの無表情であるが、かえつてそれが恐ろしい。

ややあつて、ジョシュは報告書から目を上げた。

「では報告します」

「疲れてるから簡単にな」

私が言うと、モンスターたちから非難がましい視線を向けられた。しようがないじゃん。仕事でくつたくたに疲れて帰つてきたのに長くて重たそうな話なんて集中して聞けないつての。

ジョシュもしばらく無言の圧力をかけてきたが、やがて諦めたのが、ため息を一つついて口を開いた。

「詳しくは明日、改めてご報告しますが

くそつ、一朝一夕で終わらない話か。

「彼は現在、バークー口の村長に世話をなつてゐるようですが

私は首を傾げた。

「世話になつてゐる……つてことは、村長の子供じゃないの？」

「あんな次期村長、私だつたらまつぱら」めんだが。

「どうやら違うようです。彼の母親はバークー口出身で、彼自身もバークー口で生まれています。しかし父親は不明で、母親も彼が五歳のころに行方不明になつています」

「不明の理由は？」

「バークー口を出た母親が妊娠した状態で戻つてきたそうですが、父親の名前を決して明かさなかつたそうです。母親は恐らく、新しい男が出来たから子供を捨ててバークー口を出ていったのだろうと。元々男関係が……は、激しいという噂のあつた女性だつたようであるほど、それで捨てられつ子というわけか。どうでもいいけど微妙などこで恥じらうな。こつちが恥ずかしくなるでしょ。

五歳といえば物ごころもついているはずだ。母親の失踪前後のことも覚えているだろう。

「元々母親の方も早くに両親を亡くしていたこともあつて、バークー口では少々浮いていたようです。そのため村を出て行つたそうですが、夫も連れずに妊娠して出戻つてきたと」

だとすれば、周囲の風当たりはさぞやきつかつただろう。未婚の女性の妊娠は忌避されるものだ。もしも身ごもつている女性が伴侶を亡くしたならば、子供が生まれるまでは喪に服すことが通例だ。その母親が喪服でない服装で戻ってきたのならば、周囲の反応を予想することはたやすい。父と別れた後に私を身ごもつたことが分かつた母に対しても、周囲の感情はひどく悪いものだつたし。

そもそも婚前交渉自体が、全惑星の人間の八割以上が信仰していると言われるクエナ教の教えに反することだ。未婚女性の妊娠などもつてのほかだろう。

「それに加えて母親が彼を一人残して姿を消したことから、彼は、その、そういつた女性の子供であり、捨てられた子供であるという認識が広まつたようです。身寄りがない子供は本来教会に預けられ

るはすだつたのですが……」

そこでジョシュは言葉を切つた。

その先は言わすとも分かる。鼻にしわが寄つた。

「クエナ教会の教えに反した女から生まれた子供だからって拒否されたわけね」

勇者サマのためではない怒りがわいてくる。

宗教上の教えというのは神の意志というよりは、実生活に必要なルールを定めた物に過ぎないはずだ。集団を形成し、保つために必要なルールが集まつて経典となり、実践される。神の御意志という言い方は、単に人民の反発心を抑えるための方便だ。その教えがつくられた時にはその必要性があり、意味があつた。

しかし時が経てばそれは形骸化し、多くの敬虔な教徒といつ名の生き人形たちはその教えの真の意味を理解しようとしない。それどころか自分たちの都合のいいように捻じ曲げすらする。

私の怒りを感じてか、ジョシュはいたとか戸惑つたようだが、静かにうなずいた。

「一時は孤児院に送られたそうですが、そこで問題を起してバーク一口に出戻りとなり、村長宅に引き取りになつたそうです」

五歳かそこらの子供がどんな問題を起したというのだろう。つていうか、一週間かそこらでよくもまあここまで調べ上げたものだ。バーク一口の子供の様子からして、尋ねたら悪意たっぷりに嬉々として話してくれそつだが。

しかしふと氣付く。

「確かバーク一口の村長夫人つて……」

私の言葉を遮るように、カメが鳴いた。

そして再び映像が映し出される。

最初に映ったのは金のかかった作りの玄関だつた。恐らくはバーク 口の村長の家だつた。

視点は移動し、家の裏手へと回り込む。

裏庭で、勇者サマが木剣を振つていた。まさか勇者サマが努力しているとは意外だつた。子供というものは夏休みには遊び保けているものだという先入観があつたためにかなり意外だ。勇者サマなんて真っ先に遊びに行つてそつだし。

ともかく、勇者サマは一通り木剣をふると、汗を拭いて屋内へと入つた。

カメはそれを窓の外から追つていぐ。

やがて勇者サマは食堂らしき部屋に入る。そこではすでに村長夫妻が食事を始めていた。つていうかこれ、食事終盤じゃないか？ 勇者サマは他の二つより圧倒的にボロい椅子に座ると、すでに冷めていそうな料理を食べ始めた。

薄らハゲの方は勇者サマを多少気にしているようだが、声をかける気配はない。そして夫人の方は勇者サマを一瞥もしなかつた。まるで勇者サマがいなかのように。

先に食事を終えた薄らハゲの方はさつたと食堂から出て、夫人の方は無言で食器を片づけていた。

勇者サマも無言で食事を終え、食器を片づけている。

その後も村長夫妻の家の勇者サマの様子が映し出されるが、それなどのシーンでも勇者サマが誰かに話しかけられている様子はなかった。

村長夫人は敬虔なクエナ教徒のはずだ。禁忌の子に自ら関わるつとめるはずがない。

映像を見終わった後、私が思ったことは至って単純だつた。

「色々と納得がいったわ」

胸の中のもやもやを吐きだすように息を吐きだしたが、気分は一向に晴れない。

なぜ隣村の勇者サマの教育係が私に押し付けられたのか。

なぜ遊び盛りの子供には楽しくないであろう勇者教育にめげずに毎日来ているのか。

なぜ勇者サマが朝早くから夕方まで、時には夜までしつこいのか。

村長夫妻がこうなのだ。他の村の人たちの反応も推して知るべし。

「どうなさいますか、魔王様」

気がつけば、ジョシュだけでなく他のモンスターたちも私を見ていた。

どうするつて、どうも「いつもないだろ」。

「……もしない。今までじつでここでしょ」

私の言葉にジョシュの顔がピクリと動いた。

眼鏡を指で押し上げると、ジョシュは平坦な声で言葉を投げかけてくれる。

「お言葉を歸すようですが、魔王様。このままでは彼の情操教育上、あまりよろしくないのでは？」

ジョシュが言いたいのは、つまりはあれだ。勇者サマを本格的にうつで引き取つてはどうか、とか、隣村の村長に苦情を言つのはどうか、とかそういうことだらう。

馬鹿馬鹿しい。

「ねえ、ジョシュ。他のあんたたちも、今まで勇者サマから助けてつて言われたことある？」

モンスターたちは互いに顔を見合させていた。しかし召乗り出る奴はない。

「ないでしょ？ なら、手を差し伸べる必要なんてない」

「しかし、彼はまだ子供です」

「子供にだつて考えはあるのよ。プライドも」

ジョシュと睨みあう。

少なくとも、この件では譲る気はない。

「この件で私が動くつもりはないから。あんたたちも余計なことしないでね。くれぐれもいつも通りの態度を変えないようにな」

モンスターたちは不満そうではあった。

もしも従わないようならば、魔王の権限を使つつもりではあった

が、

「…………承知いたしました、魔王様」

一番発言力がある（口達者とも言つ）ジョシュが折れたことにより、他のモンスターたちもやや納得がいかないようではあるが、私

の意に沿つことを示した。やれやれだ。

中途半端に事情を知つてゐる人から同情されることはほゞ惨めないことはない。少なくとも私はそうだった。

勇者サマの生い立ちにまつわることは、勇者サマの人生の問題だ。勇者サマに自力で解決して貰うのがベストだろう。他人が横入りして解決したつて当人の劣等感やら何やらが振り払われるわけではないのだ。私が自ら進んで助ける必要はない。勇者サマがつぶれてしまうというのなら、その時はその時。その程度の人間だったというだけだ。自分の人生は自分で切り開いてもらおう。

よしんばあの勇者サマを助ける必要があつたとしても、それは私と私の部下以外の存在であるべきだ。冷たいと思われても構わない。だつて私魔王だし。

まあ、万が一勇者サマが自身の意思でこちらを頼つてくるというのならば、条件次第で助けることもやぶさかではない。

現在は私が教育係をしているから勇者サマはツキバ村とバークーロの二つの村に所属している勇者だが、本人の意志させあればツキバ村の方に定着させることもできるだろうし。事実上ツキバ村の勇者にしてしまい、バークーロに向かわせるときに貸出料でも報酬でもぶんどつてやればいいのだ。

実質、天災人災などの被害を最小限に食い止められるのは勇者だけだ。その時は勇者サマにはせいぜい私の支配地の便利屋となつてもらおう。外道？ だつて私魔王だし。

第24戦 洞窟に眠る宝

洞窟の奥に何が眠っているのか。

伝説の剣か、金銀財宝か、それとも重大なる封印か。

洞窟というのはロマンを含んでいると思う。大概の人は成長につれそういった物への関心が薄れていくのだが、それらと切つても切れない縁がある人間がいる。勇者だ。

何故か非常時に勇者が必要としている重要なアイテムは沼の洞窟だの森の奥にある洞窟だの海底にある洞窟だの湖の底にある洞窟だの氷づけになつた洞窟だの滝の裏に隠された洞窟だの火口付近の洞窟だの最奥部にあることが多い。

また、洞窟よりは頻度は低いものの、神殿や塔、遺跡などとも勇者は縁が深いが今は割愛。

とかく、何故か洞窟に物を隠す人は多い。盜賊団じやあるまいに、宝物庫でも蔵でも作つて厳重に保管しておけばいいのに。落盤でもあつたらどうするのだろう。

しかしそんな心配があろうとなからうと、勇者たちは必要なものをとりに洞窟へと潜らねばならない。下手に難解複雑な迷宮になつていると、数日どころか数週間も洞窟内で過ごさねばならないといふのはなかなかに気の毒である。私なら「めんこいつむ。

「めんこいつむりたいんだけども。

「どうわけで、今日からこの洞窟内で実技の勉強を行います」

「ちからほど近い山の斜面にぽつかり空いた穴の前で、ジョシュが淡々と語る。眩しくらいに日が照っているが、無遠慮に肌を焦がす光も洞窟の中までは入つていけないようだ。洞窟の入り口は私の頭がギリギリぶつからない程度の高さで、薄暗い中にもある程度中に入ると道が曲がっているのが見て取れた。やや下に傾いているから、地下に続いているんだろう。

「うん、ちょっと待て。

「こんな洞窟あつたつけ？」

「作りました」

「作つたんだ」

「どうしよう、突つ込みどころが多くすぎて困る。

「お子様たちは洞窟に興味津々の様子だ。入口付近から中をのぞき見ている。

「確かに勇者は洞窟でのサバイバルが多いとは言つたけどさ……」

「……

「これ、いつぐらいから作つてたんだろう。つていつかあんたたちやりすぎでしょ色々と。

「もともと空洞が多くつたあたりを狙つて掘りました。まだあまり手を入れていないので入れるところは少ないのですが」

「言いながらジョシュは洞窟の地図を配る。黄ばんだ紙に妙にそれっぽく書きこまれた地図を見て、お子様たちは大はしゃぎだ。こんなところを凝らなくてもいいだろうに。」

「今日は先日の授業で言つたことを思い出しながら、この洞窟の奥にある宝箱の中身を取つてくるのが課題です。二人で協力して課題のクリアを目指して下さい」

「分かつたぞ！」

「はーい」

「お子様たちは嬉々として返事をする。遠足みたいな雰囲気だ。

「では、あそこから必要だと思う道具を一人三つ選んで持つていいでください。今回は乾燥した洞窟での探索です」

そう言つてジョシュは一十程の道具が乗つた板を示した。

松明、ロープ、ナイフ、チョークなどの使えそうなものから、煙玉、なべ、鏡などの使うのか？ といつものまで。

そういうえば前日やら前々日に洞窟探索講座つていつのをやつたなあ。

私は今回はさすがにいかなくてよいようなので、お子様たちがやいのやいのと相談しながら道具を決めているのを眺めていた。

地図を見た感じほぼ一本道だし、それほど大荷物を持つていかなくても大丈夫だろう。

迷いに迷つたお子様たちは、ジョシュの用意したお菓子というトラップにも引つからず（勇者サマが引つかかりかけていたが、ピールが全力で止めていた）、そこそこ必要そうなものを選んでいた。

ヘルメット一つ、松明一つ、ナイフを一つ、万が一の時用の救急キット、そして食糧。それとは別に最後にジョシュから中にある宝箱の鍵を渡されていた。

初心者向けの洞窟ならまあ大丈夫だろう。あえて言つならピールは運が悪いからもう少し防御関連を充実させるべきだ。ピールは絶対落石に当たると思う。勇者サマが無傷であろうとも、ピールだけボロボロという可能性は大いにある。

といつても、実は洞窟内に暗視カメ（暗闇でもはつきり映像が記録できる）を忍ばせてるので万が一の時は助けに行けるらしい。なんというかこんなにぬるい状況で良いんだろうかと疑問に思う。でもあんまり厳しくしようとするとモンスターたちの反感買つんだよなあ。まあこのくらいで妥協しておくべきだろうと思う。

ちょっと前までは私とジョシュ（含む他のモンスター）との教育方針の差は深刻だったのだが、最近はその溝も埋まりつつあった。ジョシュが言うには勇者サマは褒めたら伸びる子なので少しずつハードルを上げていくべきなのだとそうだ。そうして一つ一つ課題をクリアさせていくべきなのだと。私は逆に一度大きな挫折を味わわせて勇者サマに身の程……じゃなかつた、実力を自覚させるべきだと思っていた。

そういうふた主張の違いから、モンスターたちのやり方はぬるいと思つていたのだが、勇者サマのバーク 口での扱いを知つて私も少々考え方を改めた。

勇者サマのうちでのあの横柄な態度にはまあ、ある程度理由がある。生まれ育つた村でのあの境遇だ。勇者サマ自身は常に自信過剰な発言をしているが、あれが虚勢なのだと言わると納得がいく。クソガキにはありがちな特徴なので見過してはいたが、あれは自分に自信がないがゆえに過剰なまでに自分を大きく見せようとしたのだ。ま、それが勇者サマの地という可能性も捨てきれないが。

そういう子供に下手に失敗ばかり重ねさせていると、嫌な方向に性格がねじ曲がる。まあ多少ねじ曲がつてもその後のやり方次第ではまっすぐに育つかもしない。ただそれにはこちら側の多大な努力と根気もしくは愛情が必要になる。私にそんなもんはない。あらわれがない。よつて、楽な方法を選びたい。すなわち、勇者サマ自身が成功経験を積み重ねていくことで自信をつける方法だ。もちろん、図に乗らせないように適度に失敗はさせるが、順当にいけば性格がそこまで卑屈になつたりしないはず。

子育てに王道なしとも言つから、それが成功するかどうかはまだ分からぬのだけれど。

……私まだ独身なのに、なんで子育てなんかで悩まなきゃいけないんだろう。くそ、村長のせいだ。^{ハゲ}今後モンスターたちに脱毛クリーム開発させてハゲの頭にある微かな希望すらも奪い去つてやる。

さて、洞窟の中に恐々と入っていくお子様たちを見送つて、私はモンスターに用意させたハンモックの上に寝そべつた。暗視カメから送られる映像を寝そべつてみようといふ日論見だ。

が、ハンモックつて仰向けに寝る分にはいいけど、ハンモックの上で体を横にするつて難しい。しううがないので頭の部分を上げてもらつてカメの映像が見えるようにした。モンスターたちからは呆れ顔で見られたが、こんな糞暑い日なんだから木陰でハンモックぐらいいいじゃないかと思つ。

「中は涼しいんだろうなあ……

私はカメから送られてくる映像を見てため息をついた。

＊＊＊

ジョシュが乾燥した洞窟と言つただけあつて、洞窟の中はそれほど水氣がないようだ。勇者サマの掲げた松明の灯りが煌々と洞窟の中を照らしている。

「ピール、遅いぞ！」

「待つてよオキ兄ちゃん。急ぐと危ないよ

洞窟内で無鉄砲に進んでいく勇者サマに、おたおたとしながらピールがついて行く。

勇者サマは自分しか松明を持っていないことが頭にないのか、どんどん先に行ってしまい、足元が暗くてよく見えないであろうピールは派手に転んだ。

「大丈夫か？」

気付いた勇者サマが慌てて戻る。

そして慌て過ぎた勇者サマもピールの目の前で転んだ。馬鹿だ。

「痛つ」

「オキ兄ちゃん、大丈夫？」

勇者サマが声を上げると、ピールが心配そうに言つ。いや、あんたも転んだでしょ。

「…………全然痛くなんかないぞ！ 僕は強いからな！
いやいや、めちゃくちゃ痛そうにしてこらえてたよね、今。
まあこのやせ我慢できる根性は良いとは思うが。

「僕は平気だけど、ピールは大丈夫か？ 痛かつたら痛いって言つんだぞ」

「おいらはちょっと転んだだけだから大丈夫だよ。ありがとう、オキ兄ちゃん」

ピールがへりつと笑つた。

ま、これは嘘ではないだろう。普段の行動からみると、ピールは勇者サマよりも転ぶことに慣れているようだし。ピールは少々鈍いのに加えて運が悪いからなあ。

「でも、オキ兄ちゃんと離れちゃうと、おいらの足元よく見えなくなっちゃうから、一緒に歩いてほしいな」

ピールって本当にできた子供だ。私だったら松明を持って先に行かれた時点で間違いなく切れてるんだけど。ピールが怒ることってあるのか？

ピールの言葉に勇者サマはばつの悪そうな顔をした。

「…………分かった。一緒に歩こう」

ほんとにこのお子様は、他人に謝るということをしないな。

それからしばらくはお子様一人は並んで歩いていた。奥に進むにつれ道がでこぼこになってきたため、ペースはゆっくりだ。時折飛来する蝙蝠に身をすくめてはいたが、初めての洞窟探検を楽しんでいる様子である。勇者サマはスキップでもしそうな調子だし。

「宝箱つて何が入ってるんだろうな？」

「何だろうねえ。お菓子かなあ」

「きっと金銀財宝だ！」

＊＊＊

んなわけあるか。っていうかよしんば金銀財宝があつてもお子様の手に渡るようなことさせるわけないでしちゃうが。

私は一人心の中で突っ込みを入れていると、傍らから視線を感じた。

「魔王様、結局宝箱の中には何を入れられたのですか？」

そう言えば、ジョシューに宝箱の中身を言ってなかつたな。

洞窟が出来ていることは知らなかつたが、勇者サマの課題用に宝箱の中身を用意したのは何を隠そう私である。

子供心くすぐる外観の宝箱にわくわくしたのは内緒だ。

「内緒。勇者サマたちの努力とか実力によつて変わつてくるかなーつて感じ？」

「……美味しいお酒とかじゃないですよね？」

疑り深い眼差しでジョシュが言つ。

こいつは一体私をなんだと思っているんだ。

「でつ」

鈍い音が響き、勇者サマが妙な声を上げた。出っ張つていた天井の岩に頭をぶつけたらしい。ヘルメットをしているから大したことないだろう。

「洞窟は天井も床も不規則だから注意しなきや」

と、ピールが注意を促す。

ピールは基本的に運が悪いしどんくさいが、必要な時には慎重になれる子供である。今のところ不運な落石以外の被害には遭っていない。

逆に勇者サマは運がいいしどんくさくはないのだが、慎重とか冷静とかいうものがすっぽり抜けている。

それでも大した怪我をしないのは勇者補正なのか。くそ、痛い目に遭えればいいのに。

超初心者向けコースというだけあって、面白くないほど二人は順調に洞窟の奥へと進み、小一時間経つた頃には洞窟の最奥部へと到達していた。

最奥部にはそれっぽく光ゴケが群生しており、その薄ぼんやりとした灯りに照らされて木製の古式ゆかしい宝箱が存在していた。サイズはお子様たちが小脇に抱えられる程度といさか小さいが、し

つかりとした造りの物である。

うん、ロマンだ。そして幻想的な雰囲気である。

つていうか光ゴケつてこの辺にあつたつけ？ ツキバ村に来てから初めて見たぞ。

「すうい……」

「綺麗だねえ」

お子様たちは初めて見るであろう光景に見惚れていた。気持ちはよく分かる。

もうちょっと難しいコースにしてもよかつたかもしない。そうした方が感動もひとしおだつたろう。

三分ほどその光景に見惚れていたお子様たちだが、松明の火が揺らめいたことで我に返つた。あまり長居していると松明が燃え尽きてしまいそうだ。見事な小細工である。

「ピール、一緒に宝箱を開けるぞ」「うん！」

お子様たちは興奮で顔を上気させながら宝箱に近付いていった。まず勇者サマが鍵を取り出し、宝箱の鍵穴にさす。勇者サマの手は震えていた。

……そこまで緊張するものか？ いや、単に興奮してるだけか。
鼻息荒いし。

ゆつくりと鍵を回すと、かちやりと鍵の開く音がした。お子様一人は息を飲む。

私の背後に居るモンスターたちまで固唾をのんで見守っているものだから、ついつい乾いた笑いが漏れた。

……だからそんな」大層なもんじゃないつてば。

そしてお子様一人は声をそろえて一緒に宝箱を開けた。

が、

「何にも入ってないぞ？」

「おかしいねえ」

宝箱の中身を見た一人は首をひねつている。

「入れ忘れたのかな？」

「絶対魔王の仕業だ！」

勇者サマが鼻息荒く怒る。

「うん、実はその通りだ。あてずっぽつもたまには当たるものである。

「あ、宝箱の蓋の裏に何か書いてあるよ」

宝箱の中を覗き込んでいたピールが気付いて声を上げた。

「なんて書いてあるんだ？」

勇者サマも松明を近づけながら覗き込む。

「ええと……」この宝箱を開けるまでに得た経験と共に道を行く仲間こそが宝 だって

「は……？」

勇者サマがぽかんと口を開ける。

「うーん、これってマオさんの字だよね。なんか意外な感じ」

そう言ってピールは笑つた。ピールには珍しく、苦笑といつやつである。

しばらく呆然としていた勇者サマだったが、やがてブルブルと震えだした。

「結局何にも入ってないと同じじゃないか！ ひどいにも程があるぞ！」

勇者サマの声が洞窟内に響く。

「落ち着いて、オキ兄ちゃん。いい経験になつたのは確かだよ！」

ピールが慌てて宥めるが、勇者サマの怒りはなかなか解けそうにない。頑張れピール。

私は私の周囲にいる冷ややかな眼差しを向けてくるモンスターの相手を頑張るから。

＊＊＊

「魔王様？ あれは一体どういふことでしょ？」「凍りつきそうなほど冷たい声が傍らから聞こえる。言わずもがなだがジョシュだ。

「読んで字の」とくよ。勇者の試練の王道ってやつよ」

本当ならば幾多の命の危機をぐぐりぬけた先にあるのが様式美といつやつだが、今回は試練が軽すぎたので書いてある言葉もちゅうとばかり説得力に欠けている。残念だ。

「まさか魔王様、中身を用意するのが面倒くさかつたとかじやないですよね？」

「はは、まさか」

ジョシュの指摘に私は笑う。

思つたけど。田茶苦茶面倒くさいと思つたけど。

「……次回からは私達が用意した方がいいよつですね」

呆れたようにジョシュが言つ。

「そ、ひどい言われよつだが次回からは是非そつしてくれ。面倒くさいし。

「一応仕込みはしてあるんだけど。ま、それに気付くかどうかは勇者サマ次第なんだよね」

そこは勇者だし、どうなんだろ。

ある程度落ち着いたのか、勇者サマは怒鳴るのを止めた。

「魔王の性格が悪いのはいつものことだからな。知つてたけど腹が立つたぞ」

「うるさいガキだ。私は魔王だからそういうもんなのよ。

「でもどうしようか、この宝箱。中身空っぽだよ？」

ピールが困り顔で言つ。

課題の内容が『箱の中身を取つてくること』である以上、何かしら持つて帰らなければならないことになる。

すると勇者サマはやにわに松明をピールに手渡すと、自分は宝箱の蓋を閉じて脇に抱えた。

「ならこれを持つて帰るだけだ！　この中に僕が手に入れた宝物をこれから入れていつたらいいんだ」

勇ましく宣言する勇者サマに、ピールは一瞬だけ驚いたがすぐに笑顔になった。

「そうだね！　せっかく最後までたどり着いたんだもんね。きっとすぐに中が一杯になるよ！」

実は一部始終力メを通して見ているわけだから何も持つて帰つて来なくても失敗とは断じないんだけどね。

帰りの道中はピールが松明、勇者サマが宝箱という担当になった。随分と慣れたようで、行きよりスムーズだった。

が、

「オキ兄ちゃん、大丈夫？ 疲れてない？」

ピールが心配そうに声をかける。

片道小一時間の洞窟だ。あとは帰るだけとはいえた目より重い宝箱を持つて移動するのは骨が折れるに違いない。

「全然疲れてないぞ！ 早く帰つて魔王に文句を言つてやるー。」
その意氣やよし、だが足元がいきさか危ないぞ。

「ならいいんだけど……」

ピールは心配そうにしながらも再び歩き始めた。

五分ほど歩いたるうか、勇者サマがぽつりと呟く。

「疲れた……」

「それじゃあちよつとだけ休憩しようか

ピールが言つ。『へへへ普通の提案だつたが、何故か勇者サマは驚いたようだつた。

「いいのか？』

心底不思議そうに言つものだから、ピールもきょとんとしている。

「うん、いいに決まつてるじゃない。どうして？」

純然たる質問に勇者サマは言葉に詰まつた。

「…………うん、そうだな」

嬉しそうな、困惑したような、そんな表情を勇者サマが浮かべる。

……なるほど、勇者サマって他人に面と向かつて気遣われることに慣れてないのかもしれない。

勇者サマは「めんなさい」とかありがとつとかいう言葉を使わない。

他人を気遣うことも滅多にない。人間としての基本だらう。

でもそれは、ひょとすると教える人がいなかつたせいじやなかろうか。そういうた基本のことを教えるべき親は勇者サマが小さいころからいないし、親代わりとなるべき村長夫妻からは冷遇されて

いる。友人となるはずだった村の子供たちからは迫害されている。弱者を助けるべき教会の人間ですら勇者サマを忌避しているのだ。

一体誰がこの子供を躊躇するというのだろう。

一体誰がこの子供に正しいことを教えてやるというのだろう。

改めて思う。

これ、勇者教育つていつか本気で子育てじゃない？ と。子育て魔王の異名が言いえて妙だつたわけだ。

あれなのか、勇者としての必要知識に加えて本来親や大人が教えるべき道徳教育からしなきやいけないのか。すでにマナーですら大概時間を割いて教えているというのに。勇者サマが字が読めたのは僥倖だが、そういうえば読み違えたり書きちがえたりすることが多かつた。物知らずなところも多かつた。単に勇者サマが馬鹿なだけだと思っていたが、もしかしたらちゃんとした教育を受けさせてないからじゃないのか？

バークーロの薄らハゲには今度改めて追加の報酬を請求しよう。
決定だ。

私が考えを巡らせている間にお子様たちは休憩を終えたようだ。気付いた時にはお子様たちは再び歩き出していた。

その後も特に問題なく歩いていた一人は、あと少しで出口とこりここまで来ていた。

カメの映像を通して洞窟の入口が見えたときにはほつと息をついたのだが、

「 危ない！」

私は思わず叫んだ。

ピールの頭めがけて、大きな岩が落ちてきたのである。ヘルメットがあるひつと怪我をするのは確実な大きさだ。

背筋が凍つた。

が、大きな音が響いた後、画面に映つたのは転がるお子様一人の姿。

そう、二人。

「ピール、大丈夫だつたか？」

「う、うん…………」

小石まみれになりながら二人が身を起こす。どうやら勇者サマがピールに体当たりをして直撃を回避したようだ。地面を転がつたせいであちこち擦り傷ができる。

私は今にも一人のもとに殺到しそうなモンスターたちを制しながら胸をなでおろした。致命傷にはいたつていないようだ。

地面を転がつた松明の火は辛うじて残つていた。

「ごめんね、オキ兄ちゃんは大丈夫？ 怪我してない？」

「僕は大丈夫だ！ 勇者だからな！」

パンパンと力強く体を払うと、勇者サマは落とした松明を拾い上げた。

「ありがとう、オキ兄ちゃん！」

ピールは勇者サマにと無邪気な笑顔を向けた。

「た、大したことないぞ」

勇者サマはぶっきらぼうに言つと、視線をそらした。

そんなやり取りは割とどうでもいいんだけど、気になることが一

つ。

宝箱、どこ行った？

ピールを庇う直前まで勇者サマが持っていたと思つたが。

大した怪我がない」とを確認し合つた一人もそれに気付いたらしく、地面をあちこち探してくる。

「……あ」

勇者サマが小さく声を上げる。その体が小さく震えた。

視線の先には壊れた宝箱。落下した石の直撃を代わりに食らつたのか、蓋がひしゃげ側面にも大きな傷がついてしまつっていた。ピールもそれに気付き、泣きそうな顔になつた。

「「」「めんな、おいらのせいだ……！」

オロオロと自分と宝箱の間に視線を彷徨わせるピールに気付き、勇者サマは目拭つて顔を顔をあげた。

「気にするな、ピール。こんなのよりお前が無事だった方がよかつたんだ」

自分に言い聞かせているような節はあるが、それでもすぐにこんなことを言えるのは立派なことだ。

「でも……」

「ともに道を行く仲間が宝物なんだから、お前が無事じゃなきゃ意味がないだろ！ ほら、行くぞ！」

勇者サマが促すが、ピールはまだ申し訳なさそうな顔で立ち止まつたままだった。

今にも泣き出しそうな顔を見て、勇者サマは困ったような顔をした。

しばらく気まずい沈黙があつたが、やがて勇者サマは壊れた宝箱を叩いて言った。

「とりあえず、これを持って帰るだけ持つて帰るぞ。僕がこれ持つから、ピールは松明を持ってくれ」

普段はあれだが、勇者サマはこいつ状況だと随分お兄さんになるよつだ。そう言えればピールと知り合つた時もこんな感じだつたけ。

普段からこうだと私としてもありがたいんだけどなあ。

太陽の下に現れた一人の姿は随分とボロボロになつていた。

頭にはヘルメットで守られていたから大丈夫だったが、服はあちこち破れているし、土まみれだった。あちこち血もにじんでいる。

勇者サマはほほいつも通りの表情だったが、ピールはまだ泣きそよな顔をしていた。

「お帰り。首尾はいいだつた？」

あえて一人のボロボロの姿には触れず、結果だけを聞いた。

「見たら分かるだろ！ 持つて来たぞ」

と、勇者サマは壊れた宝箱を突きだした。
私はそれを一瞥してから尋ねる。

「宝箱の中身は？」

「空っぽだつたぞ！ 魔王の下手くそな字で変なこと書いてあるだけだつた！」

下手で悪かつたなガキンチョめ。あんたよりは上手だからね。

「空っぽねえ？」

私がため息交じりに言つと、自分の言つたことが疑つたと思われたのか、勇者サマが憤然とした様子でひしゃげた宝箱の蓋をこじ開けた。

ふむ。

「ねえ、オキ兄ちゃん。それ、何か入つてない？」

はつと気付いたようピールが言つ。
お、気付いたようだ。

宝箱の底板は破損の時の衝撃のせいか傾いて斜めになつて、その下にあるものが少しだけ見えていた。

勇者サマもそれに気付き、慌てて宝箱を地面に下ろした。
そして上げ底になつてゐるそれを外す。

「わ、なんだこれ！
「きれいだねえ！」

お子様一人が歓声を上げる。

中に入つてゐるのは色とりどりの飴玉がつまつたガラス瓶だ。
喧嘩しないように同じものを一つ入れてある。魔法で固定していた
ため、破損の衝撃でも無事だつたようだ。ガラス瓶 자체が特殊なガ
ラスでできているから大丈夫だとは思つたが、なんとか無事だつた
ようだ。さすが私の魔法。

思わぬところから出てきたものにて、お子様たちがきやーきやいと
はしゃいでいる。

「マオさん、これ貰つてもいい？
「もちりん」
「これ食べられるのか！？」
「当たり前でしょ」

再びお子様たちが歓声を上げる。

「……ありがたい格言が中身、というわけではなかつたのですね
無邪気に喜ぶお子様たちを見ながらジョジョがぽつりと言つ。
私は肩をすくめた。
「散々苦労させられた拳句、腹の足しにもならない金言貰つなんて
馬鹿馬鹿しいでしょ」

といつても素直に「こ褒美をやる氣にもなれなかつたので、一重底にして隠してみたのだが。洞察力さえあればもつと早くに気付いたはずだ。

「しかし中身が飴玉ですか

ジョシュがどこか呆れたように呟つので、私はにやりと笑う。

「子供の宝物なんて大体はそういうものから始まるのよ」

模型とか蛇の抜け殻とかパチンコとかも考えたんだけど、見栄えがちょっとね。それにああいうのは自分で集めるからこそ価値があるものだし。その点瓶詰めの飴ならカラフルで綺麗だし、何より食べられる。一石二鳥だ。何より金銀財宝に比べてお金がかからない。この方法であと何年かは誤魔化したいところだ。

「ひねくれた褒賞でしたね」

ジョシュが眼鏡を押し上げながらため息をつく。

ひねくれていて当然だ。だって私魔王だし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0754m/>

正しい勇者の育て方

2011年6月24日12時09分発行